
魔法学院生徒物語

靈琉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法学院生徒物語

【Z-コード】

Z2059W

【作者名】

靈琉

【あらすじ】

魔法が当たり前に存在している世界。クロリア王国にある世界最大の魔法学院マジックゲートの優等生と落ちこぼれが様々な事件に巻き込まれていく物語。

プロローグ（前書き）

不定期更新。登場キャラ募集中。

* 注意事項 *

ド素人が書くので期待はしないこと。行き当たりばつたりのストーリーです。

プロローグ

- - ドクン…… ドクン - -

光など微塵も入り込まない真っ暗闇。心臓の音が響くだけ。何時間、何日……いや、何年間も経っているかもしない。見るという行動はとうの昔に忘れた。聴覚は働いてはいるが心臓の音しか聞こえない。

嗅覚を働かせても腐ったような臭いしかしない。声をだそうとしても口が何かに塞がれてくぐもったうなり声しかあげられない。自分が誰なのかもわからない。いや、忘れてしまった。

- - カツツ…… - -

何処からか床に何かが当たる音が聞こえる。

- - カツツ、 カツツ - -

少しずつ音が近づいてくる。……これは足音だ。ひそしひぶりに聞く、自分以外がたてる音。

その音は突如として聞こえなくなる。

- - キイイ…… - -

何かが床とこすりつけられる音とともに、真っ暗闇の景色が真っ白に染められた。

目を刺すような痛みにたまらず目をつむる。……視覚は働いた。黒以外の色を見た。

.....マブシイ.....

口に手が添えられ、次の瞬間口を塞いでいたモノが外される。

「ウゥゥ……ダ、レ、ダ……」

ひむじぶりに声をだした。目も徐々に光になれ、景色が映し出される。

「私は君を助けに来た。……君を苦しめたヤツらに天罰を下されよ」「田に映つたのは光を背に、語りかけてくる少年。差し伸べられている手と少年を交互にみる。

「……キュー セイシユ、カ？」

少年は腕を引っ込め、考えるように手を顎にあてる。

「救世主？……悪くはない。そうだな……それがいい」

少年は納得するよつに何度も頷いた。再び手を差し伸べ言つた。

「私はメシア……救世主だ。私とともに世界を変えよつ」

……神を見た。……いや、神になるであらう少年を見たと言えば良いだらうか。

救世主は世界を変えるべく降臨する。

彼が創る世界の先に一體何が待つてゐるのか……。

適当な世界設定みたいなもの（前書き）

* 注意事項 *

加筆する可能性あり。深くは考えてないので期待はしない」と。

適当な世界設定みたいなもの

この世界には魔法が存在する。魔法を使うには魔力が必要だ。魔力は生まれつき持つものでほとんどの人が持っている。

魔力には属性があり、使用者の属性に合った魔法の威力が高くなる。

強い魔法であればあるほどより多くの魔力を消費する。

魔法は様々な種類があるが大きく分けて4つの種類がある。

『白魔術』……防御や治療など主に使用者を補助する魔法が多い。

『黒魔術』……相手を攻撃する魔法のほとんどがコレに分類される。そのなかには使用者の生命を削る危険なモノも存在する。

『錬金術』……物質を別の物質に変えたり、物質を作り出す魔法というより技術。

『召喚術』……遠く離れた魔力を持つ生物を呼び出す魔法がコレにあたる。熟練した者は異世界の生物を呼び出せるという。

この世界では魔法学院と呼ばれる学校があり、初等部（6年間）、中等部（3年間）、高等部（3年間）、上等部（4年間）に分けられる。

魔法学院は全寮制の場合が多く、基本的に2人部屋しかない。魔法学院の敷地内には校舎に加え、食堂や図書館、寮がある。

食堂は1階が初等部、2階が中等部用、3階が高等部、4階が上等部用とわかれている。

図書館は3階建てで1階は普通の本、2階は魔法に関する本、3

階は王国や世界の歴史を記した本や資料などがある。

魔法学院の生徒には成績に応じてランクが決められる。
AからFの基本ランクに加え、優秀な者……いわゆるヒーロー、
ランクのS、落ちこぼれのGがある。

ランク分け試験は年に3回、長期休業前に行われる。

ランクは学院内だけではなく世界中で共通している。やはりランクが高いほど社会的地位も上がる。ランクは魔力の大きさと魔法の技術、知識、体力などにより決められる。高ランクが待遇がよいにもかかわらず手を抜いて低ランクに見せかける人もいる。

この世界に住んでいる人間を含む全ての生物に魔力がある。ごくまれに魔力が極端に少ない生物も存在する。

少ないとは言つても全くないということはない。魔力が少なくても訓練などで大きくすることができる。

『ランクの基準』

魔法学院初等部	……	E
魔法学院中等部	……	D
魔法学院高等部	……	C
魔法学院上等部	……	B

ランクの基準はあくまでも各課程終了時にこのランクにはなつて欲しいというものだが、ほとんどの生徒は1ランク下だ。魔法学院は高等部まで通うことが義務づけられている。

この世界には魔術協会と呼ばれる機関があり、簡単に言つと魔法を扱う者の管理をする。

魔術協会は魔法学院上等部を卒業した者しか入会出来ない。

よつて魔術協会はエリート集団だという認識が世界中の人にある。

魔術協会は世界中にあり、その本部はクロリア王国にある。

そこでは4年に1度世界中の魔術師が集まり世界一の魔術師を決める大会がある。参加資格はAランク以上であること。

優勝者には世界最大の図書館……『世界書庫』に入ることが許される。

『世界書庫』には世界中のすべての書物がある。中には禁断の魔法とされる魔法の使い方が書かれている本も存在する。

『世界書庫』がどこにあるのか知るものはクロリア王国国王と魔術協会会長、大会優勝者のみである。

第一話（前書き）

* 注意事項 *

名前は適当。意味はほととぎなー。つまらないこと思ひながら読んでくれる方に感謝いたします。

第1話

---クロリア王国魔法学院マジックゲート中等部---

魔法学院では優秀な魔術師になるための勉強が行われる。

「私達魔術師にはランクがあります。ミスター・リカッド、ランクについて簡単に答えなさい」

呼ばれたレイル・リカッドは面倒臭そうに立ち上がる。

「はい。ランクとは魔術師の実力を示すためのものです。ランクが高いほど地位も高いです」

「まあ良いでしょ。座りなさい」

「はい」

レイルが座るのを確認すると教師は周りを見渡す。

「ランクはAからFがありAが最も高いランクです。ですが、例外も存在します。ミスター・クルー答えなさい」

「はい。Aよりも高いランクとしてUランクがあります。そして…」

カシア・クルーは1人の少年を見た後、再び前を向いて答える。

「Fランクにも満たないランク。落ちこぼれのGランクがあります」

「そうです、その通り！ 初等部の者でさえヨランクが多いのにシリルフィード・マグナス、アナタは落ちこぼれなんですよー。」

シリルフィードは名前を呼ばれたのにもかかわらず机に突っ伏している。

「マグナス君は寝てまーす」

「またですか！ 中等部に入つて2ヶ月、寝てばかりじゃないですかー！」

騒ぐ教師の声に反応してシリルフィードは顔を上げる。

「やつと起きましたか……だいたいアナタは
「…………うるさいババア」

シリルフィードは吐き捨てるように言つて再び机に突つ伏した。

「な……ババアですつて！ 教師に向かつてババアと……寝るなー。」

教師はシリルフィードの頭をつかみ、無理やり顔をあげさせた。

「シリルフィード・マグナス、放課後職員室に来なさい。これは絶対です。拒否権はありません」

「…………わかりました」

「よひじー」

わかりましたと答えたが、シルフィードは職員室に行く気は全くない。

放課後になつたらすぐ寮に戻るつもりだ。

「そして、放課後」

シルフィードはそれからと学院を抜け出して、寮の自分の部屋に来ていた。……いや、行こうとしていた。

「……通せよ」

「ダメだよ。ちゃんと職員室に行かなきゃ」

教室の入り口に立つ女生徒アイリ・シグニットをシルフィードは睨みつけていた。

アイリは優等生だ。眞面目で成績も良く、中等部一年生にして既にCランクだ。

「教師の犬が……。そこまでして教師に気にいられたいのか」

「そんなことはない」

「ならそこを退け」

「行かないと授業中はまた説教ばかり……マグナス君のせいで授業が進まないんだ」

「授業中邪魔にならないように寝ているだけだ。それなのに教師がくつてかかる……それだけだ」

「それだから落ちこぼれなんて言われるんだ！ 初等部の頃から授業中は寝てばかりじゃないか」

「いいから退けよ…… 学院内で魔法使用は授業中以外禁止されている。純粹な力だけだと強いのは俺だ」

魔法学院は魔法を学ぶ所であつて使う所ではない。実習で魔法の練習をする以外は許可がない限り使つてはならない。使つた場合は生徒指導の対象となり、それ相応の処罰がされる。

「お、脅してゐつもり？」

強がつてはいるがアイリは痛いのは嫌いで、内心ビクビクしている。

シルフィードは中等部1年生の中でも力は強い方で、素手同士なら上級生にも負けないだろう。

「脅してゐわけではないけど…… 早く退かないと本気で殴る」

シルフィードは手に力を入れて、拳を上に振り上げる。

「ヒツ……」

殴られる。そう思ったアイリは震えながらその場から退いた。

「それでいいんだ」

シルフィードは廊下に出て歩きだそうとしたが足を動かすことが

シルフィードが廊下に出て歩きだそうとしたが足を動かすことが

できなかつた。シルフィードが足下をみてみると、光でできている紐で足が縛られていた。

「……アイリ、校則違反だ。優等生のお前ならわかるよな、許可なしに魔法を使つてはならぬことべりこ」

「それを言つなら……」

「俺は魔法学院に入つてから一度も校則違反はしてない」

「授業中に寝てはいけないとこつ校則はない。教師の話をきかとう校則もない」

「で、でも……それは当たり前のことだから」

「当たり前？ なら校則を知らないとは当たり前じゃないのか」

「…………ついでに。こいから職員室に行きなセー。」

「……今解放すれば見なかつたことにしておけ。幸いにも他の生徒は寮に帰つたみたいだしな」

シルフィードの言葉にアイリは迷つた。わざといのまま職員室に行かせれば魔法を使つたことをバラされるだらけ。

校則違反の処罰は様々だが、どんな罰でもランクに影響するだらう。

酷ければ自分もGランクに落とされるかもしねい。

「……本当に、誰にも言わない？」

しばらく互いに黙っていたのだが、さきにアイリが口を開いた。

「もううんだ。今すぐ……」

「何をやつてこるのですか！」

「……チツ。来るのが早いんだよババア」

タイミングが悪い、とシルフィードは思つ。もう少し遅ければ魔法は解かれていた。それに自分もこの場に居なかつた。

アイリは青ざめた顔で教師を見ている。

「ミス・シグニッシュ、どうぞ」とです

「も、もうしわけ……」

「すべて俺が悪いんです。職員室に行かず寮に帰ろつとした俺を止めただけです」

「……そうであろうとも校則違反を犯した者には処罰をしなければなりません。2人ともついてきなさい」

黙つて教師の後をついて行く2人。アイリはたまにシルフィードを見ながら歩いているが、シルフィードはただ前を向いたまま歩いていた。

「……で待つていなさい」

そういうて教師は学院長室に入つていへ。

「ど、ど、ど、じよつ。学院長室だよ」

もちろん学院長はこの学院でもっとも偉い。さらにこの学院の学院長は中等部時代で既にランクの魔術師として学生でありながら魔術協会の手伝いをしてきた。

そして、王国内だけではなく世界中でも有名で、『伝説の魔術師』の1人として今でも活躍中である。

「もとはといえばお前が魔法を使うから」

「……」「めんなさい」

2人は互いに顔を合わせようとせず、アイリはうつむいて、ただ時間がだけが過ぎていぐ。

「入りなさい」

学院長室から男性の声がした。シルフィードはアイリをチラシと見た後、学院長室の扉を開けた。

「シルフィード・マグナス、失礼します」

「アイリ・シグニット、失礼します」

2人が中に入ると、2人をつれてきた教師と白髪混じりの男性
… 学院長がいた。

「話は聞いた。魔法を使ったようだね」

「 もひしわけいじやこませんー。」

アイリは深々と頭を下げるが、シルフィードはじつと学院長を見ている。

「君は授業態度が悪く、教師の言つことも聽かない……何故かな」「校則にはありませんし、学院で罰つことがすべてだと思つていません」

「それでも学院の生徒として見せかけでも真面目にしていると助かるがね」

「……あいにく、俺は不器用ですから」

「まあ自分に正直なのは良いことだ。さて、今回の処罰のひとなのだが……」

「退学でも良いのですよ」

「高等部までは義務だから退学はないよ。酷くとも留年だまつ」

留年と聞いてアイリの顔が青ざめていく。

「君達2人のどちらかが1ヶ月後にあるランク分け試験で2ランク上がれば処罰を取り消すつ」

「……俺は退学が良いです」

「ち、ちゅうと待つてください……ランクって無理ですよ」

「君には無理だうね。でもGランクだつたら簡単じゃないかい」

「必死になつて頑張りなさい」

学院長室を出て2人は並んで校舎を出た。

「……決めた」

「何を?」

「マグナス君に勉強を教える」

「はあー。」

「だつてそつしなきや。お互い頑張ろうよ」

「お前がAランクになればいいだけだろ」

「無理だよ! 今だつて必死に勉強してCランクなの」

「とにかく、俺はどうでもいいんだ」

「そ、そんな」

俺は勉強なんてしないと言つてシルフィードは歩きだした。

第1話（後書き）

登場キャラ募集中。ストーリーも募集中。もちろん期待はしないこと。

第2話（前書き）

* 注意事項 *

思いつくまま書いて書けたら投稿します。不定期更新になります。
じやありませんが御了承ください。

「ねえ、お願ひ」

「何度言われても俺の気持ちは変わらない」

魔法学院マジックゲート敷地内にある食堂。中等部用の2階、入り口から1番奥のテーブルにシルフィードとアイリはいた。

もともとシルフィードが一人で昼食を食べていたら友達と一緒にきたアイリに見つかり、アイリがシルフィードと相席したのだ。ちなみにアイリの友達も相席している。

「ねえ、アイリ……気の毒だけど処罰は免れないと思うよ」

「で、でもマグナス君だって勉強すれば……」

「どうせ勉強しないでしょ。それに処罰が留年だとは限らないよ」「そうかもしれないけど……」

「なあ、そろそろ良いか? 食べ終わつたから帰りたいんだが」

「え! 午後からの授業はどうするのよ」

「……アイリ、今日の授業は午前中だけだよ」

「え…… そりだっけ」

今日は職員会議で午前中しか授業がない。職員会議は初等部から上等部までの教師が参加するためかなり時間がかかるらしい。

「さすが優等生……授業がなくても授業するんだな」

「うう……」

アイリは恥ずかしそうに顔を赤く染めている。

「マグナスは今から暇なの?」

アイリの友達セレーナ・クラントはシルフィードにたずねた。

「今から寮で昼寝をするんだ」

「つまり暇つてことね。……今から遊びに行かないかしら?」

「……どこに行くんだ?」

「もちろん学院敷地外。あまり街の中に行つたことないからね」

この学院だけではなくほとんどの場合が大きな街の中に建つている。生徒は平日は校舎と寮を行き来するだけだが休日になると街に出て買い物をしたりする。

買い物をするには無論お金が必要だが、物などの代金もランクによって異なる。ランクが高いほど安く買える。5ランクになると街にとんどの店で無料になる。

お金についてだが学生はバイトで稼ぐ以外に王国から援助金をも

らつてこる。毎月貰えるがやはりランクによつて異なる。バイトの給料なども同じく異なる。

ちなみ学院内ではお金は必要ない。学費もないのと誰でも入学出来る。「ウランクの俺としては街に行くのは遠慮したい」

「大丈夫だよ。私はランクだけどアイリが居れば安く貰えるんだ」

笑顔で言つセレーナにたいして呆れたよつてアイリはため息をつく。

「それでも遠慮しどくよ」

立つてあるシルフィードの腕をセレーナがつかむ。

「……殴るだ」

「ひつ」

シルフィードの脅しにセレーナではなくアイリが怯える。セレーナはシルフィードに睨まれてこるが腕をはなそつとしない。

「こくら不良生徒でも女子を殴るわけにはいかないんじゃないの」

「……いいからはなせよー」

「そんなに私達と一緒に居るのが嫌なの?」

「……嫌だね」

「あつそ……わかつたよ、アイリ2人で行こう

「え！ う、うんわかつた」

セレーナはシルフィードの腕を乱暴にはなし、大股で歩き去つていぐ。アイリは慌ててセレーナを追つていた。

「……何なんだよ」

1人残されたシルフィードはしばらく呆然としていた。

- - 魔法学院マジックゲート校門 - -

「ムカつくー やっぱりアイツムカつく！」

「えつ……と、どうしたの？」

「どうしたもんかったもないわよー アイツ、ウソenkのくせに生意氣

「そんなこと言つたらダメだよ」

「何で？ 処罰のことだつて人事みたいに……ホントびっくりのー。」

「……びっくり」

アイリはその場で止まつてしまふ。

「……こうなつたらマグナスを落とすしかないか

「落とすって？」

「もちろん、マグナスをアイリに惚れさせる。好きな人のためだから頑張るだろ！」

「う、ちょっと、それはいくら何でも」

セーラーはアイリが顔を染め荒てる様子を見てニヤニヤと笑っている。

「あれあれアイリちゃん。もしかしてマグナスが好きなのかじらへーる。」

アイリが答えた瞬間セーラーの動きが止まった。そして信じられないという顔をして口をパクパクさせていた。

「ほ、本気なの？ だってランクだよ！」
「ランクは関係ないよ。……マグナス君格好いいしああ見えて優しいんだよきっと」

「……たしかに格好いいけど、優しいとは思えない」

「優しいよー」

「あ、そう。……今日まだどこに行こうか？」

「話変えないでよ」

「うー、うめえ」

「まあ後からマグナス君の良いところを話してあげるかい

「あ、ありがとうございます」

セレーナは苦笑いしながらこの友達は大丈夫なのだろうかと心配する。

「クロリア王国首都クロリア」

「やっぱり街は良いね」

「そうかな？ 私は静かなところがいいな」

アイリは小さな村で生まれ、初等部に入る時にこの街に移ってきた。

はじめの頃は怖かったのだがいつの間にか慣れてしまい、今では休日になると友達と一緒にして街に遊びに来ている。

「……タシカーノマチハサワガシイネ」

「え？」

アイリが振り向くと、緑髪の少年がいた。その目は真っ赤に輝いている。

「ハジメマシテ、ルー、トイイマス」

緑髪の少年ルーは丁寧なお辞儀をする。

「あ、初めまして。アイリ・シグニシットです」

「私はセレーナ・クラントです」

2人もルーに自己紹介をした。

「あの……外人さんですか？」

「ン……ワタシ『リトリッジ王国』カラキタンダ」

リトリッジ王国は小さな島国だ。魔法学院もあるが小さい。だが、遺跡が多く、たくさんの学者達が訪れる。

「へえ、リトリッジ王国ですか」

「リトリッジ王国は歴史的な建造物で有名な国だ」

「フレイル先輩！」

ディイザ・フレイル。魔法学院マジックゲート中等部3年でBランク。顔立ちが整っていて優秀であり特に女子から人気がある。

「ヤア、ディイザ」

「お2人は知り合いなんですか？」

「ああ、友達だよ……今日はこの街を案内するんだ。それじゃ、また」

ディイザとルーは手を振りながら街の人ごみの中に消えていった。

「……フレイル先輩と話しかかった」

「そうだね。ビックリしたよ」

同じ中等部とはいえ、なかなか会うことが出来ない憧れの先輩と話したことでセレーナは興奮していた。

「クロリア王国図書館」

「……ヤハリソノセカイタイカイトヤラニコウショウシナケレバセカイシヨコニハイケナインカイ？」

「ああ、大会優勝者にしか『世界書庫』の場所も教えられないからな」

2人の少年はクロリア王国図書館で資料を探していた。禁断の魔法に関する資料は普通の図書館に存在しないことは2人にはわかっていたがもしかしたら……という考えが捨てきれなかつた。

結局何も見つからず、2人は図書館の隅で話していた。

「……イッソノコトコクオウラオドシタラダウダ？」

「そんなことをしたら私達は犯罪者だ」

「オソカレハヤカレク……セカイヲテキーマワスンダカラベツ一イイダロウ」

「ダメだ」

「ハア……セカイタイカイガアルノハライネンダロ。ソレマテマツノカ？」

「……実験をしようと思つ」

「ナンノジックエンダ？」

ディザは質問には答えず、図書館の出口へと向かう。図書館を出でしばらく歩いた。ふと立ち止まつたディザは振り向いてルーを見る。

「……まずは仲間を探さないとな」

「ワタシタチダケデハダメナノカ？」

「駒があれば戦略も広がるからな」

「ダガ、ソレナリニユウシユウナモノヲサガサナイトイケナイ」

「大丈夫だ、あてはある」

「魔法学院マジックゲート - -

夕食の時間となりほとんどの生徒が食堂で食事をとつている。

「……で、頼みつて何ですか？ フレイル先輩」

ディザは一人の女子と相席していた。その女子の顔は若干赤い。

「つきあつて欲しいんだ」

「……え？」

「君じゃないといけないんだ。……頼む」

「わ、私なんかで良ければ……喜んで」

「ありがとう。それじゃ、後で僕の部屋に来て欲しい」

「わ、わかりました」

ディイザは立ち上がり、食堂をあとにした。外は既に薄暗くなり日は沈んでいた。

「オドロイタナ……「クハクカ？ ピピローモナイコトカペラペラ
ト」

「いや、あの言葉は本気だよ。彼女しかいないからね実験の適応者は……」

「」の日、一人の女生徒が学院から姿を消した。

第3話（前書き）

* 注意事項 *

今週は体育祭＆文化祭の練習や準備のため更新はなかなか出来ないと思います。

暇な時に少しづつは書いていくつもりです。

気がつくと闇の中だった。ビニを見ても真っ黒な景色が続くだけ。

メイス・アグラニアは魔法学院マジックゲート中等部3年だ。メイスは先ほどティザに告白され、彼の部屋に行つたはずだった。

部屋に入った瞬間意識を失い、気づいたらここにいた。

どうやら景色が真っ黒なのは田隠しをされているからみたいだ。体を動かそうとしても動かないのは体を縛られているからだ。

でもビニして？

メイスは考えるがわからない。ティザがしたかもしれないということは考えられなかつた。

でもティザの部屋で何かがあつた。これはたしかだつた。

「だ、誰か！」

メイスは叫ぶが、メイスの声が響くだけだつた。近くには誰もないようだ。

「誰か……助けてよ……」

「魔法学院マジックゲート - -

「行方不明？」

「そう。アグライア先輩が昨日の夜から行方不明」

食堂で朝食をとしながらアイリとセレーナは話していた。行方不明になつた先輩はセレーナが初等部の頃からお世話になつてゐる優しい人だつた。

寮は初等部から高等部まで一緒に。上等部の校舎は離れたところにあり寮も校舎の近くにある。

「いつたいどこに行つたんだろう

「それがまつたく謎なんだよね…………」

「ところで、なぜお前らは相席なんだ?」

そう、アイリとセレーナは今日もシルフィードと相席だ。

「気が変わつたかなーとか思つてゐるけど…………」

「それはない。…………さて」

「どこに行くの? 暇なら今日は休日だし…………」

「あいにへ、俺には用事がある」

「どんな?」

「部屋に戻つて眠るんだ」

「暇つてことだね。よし、行こう

セレーナはシルフィードの腕を掴み、立ち上がる。

「ダメ……アイリはそつち持つて」

「わ、わかつた」

アイリも立ち上がりシルフィードの空いている腕を掴む。

「お、お二ご」と

「それじゃ、出発！」

シルフィードは2人に引きずられて食堂をでた。アイリとセーラーは学院内にある図書館までシルフィードをつれてきた。

「……いい加減はなせ」

「ルルルのルル」

「頼みがあるの」

「……断る」

「まだ何も言つてない！」

「言わなくてもだいたいわかる……ランク分け試験のことだの」

図星だったのかセレーナは沈黙する。シルフィードはため息をついたあと図書館から出ようと歩きだす。

「質問していい?」

「……何だ?」

「マグナス君は試験で本気を出した結果Gランクなの?」

「試験で手を抜いてランクを低く見せるメリットはないだろ」「

「そり。……もし、手を抜いているのなら、一度だけで良いから本気だしてよ」

「……考え方?」

シルフィードが図書館から出て行くのをアイリは黙つてみていた。

「……アイリ、できる限りの協力はするね」

「セレーナ、……ありがとう」

・・魔法学院マジックゲート男子寮・・

シルフィードは図書館を出たあと自分の部屋に戻り寮に帰つていた。

「よつ、落ちこぼれ。朝食のあと姿が見えなかつたがどこにいたんだ

「図書館まで連れ去られた」

「はは、とんだ災難だな」

寮の入り口でシルフィードに声をかけてきたのは中等部1年のフィル・フォモール。ロランクでシルフィードと同じ部屋だ。

「で、フィルはここで何してる?」

「お前を待つてたんだ。……お前以外全員そろつてる」

悪かつたな、と言つてシルフィードは寮の中へ入つていいく。フィルも追いかけるよつについていく。

男子寮は初等部から高等部までが一緒なのでかなり広い。しかし、一緒なのは入り口だけで、そこから3方向に道が分かれている。

初等部は入り口からみて左、中等部は右、高等部は正面の道を進めば自分たちの寮につく。

3階立てで一応どの階でも行き来ができるよつにつながらつていて、シルフィードは入り口から右に進み、数部屋通り過ぎたあと足を止め部屋に入った。

「ずいぶん遅かったな」

「ああ、すまないな」

「(リ)はシルフィードの部屋だが今この部屋に居るのはシルフィー

ドを含め6人だ。

「みんな揃つたから始めるか……」

ボサボサの黒髪長髪の眼鏡をかけたロランクのリーチ・ランダイ
ンは話を切りだす。

「俺達は田頃の授業態度や生活態度が悪い。それは学院内でも有名
だ」

「今更わかりきったことを……」

呆れるように呟いたのはEランクのテスラ・ヴァインス。

「これは先輩から聞いた話だが、どうやら教師達は俺達に何かしら
の処罰をあたえるつもりらしい」

「処罰だあ？ ンなの無視すればいい」

ロランクのキース・コナレイゼルは校内で暴力をふるつゝが多く
生徒達から怖れられている。

「無視したら処罰が重くなるぞ」

キースを注意するリサーバ・ランダインはリーチの双子の弟でロ
ランクだ。

「俺、処罰を受けるかもしねない」

「シル、本当か？」

「ああ、今度のランク分け試験で2ランク以上上がらなかつたら処罰だと」

「それってお前と同じクラスの女子も言われたんだろう？」

「さすがファイル、情報が早い」

ファイルは噂好きな生徒で話を盗み聞きしたり聞き出すのが得意。真偽は問わず生徒の様々な噂を知つてゐる。

シルフィードは学院長室で言われた処罰免除条件を眞に話した。

「お前なら安心だな……でもお前は処罰を受けるつもりなんだな」

「ランクを上げるつもりもない処罰を受けるつもりもない」

「…………どうすんだよ」

キースがニヤニヤしながらシルフィードに聞く。他の4人も気になるのかシルフィードを見る。

「ランク分け試験は手抜き。処罰の件で呼び出されても行かない」

「駄目だろそれは。それに運命共同体の女子生徒はどうなる？見捨てるのか？」

「そりいえば何度か試験で頑張るよつこと頼まれた」

「…………アイリ・シグニッシュだろ？ アイツ結構人気あるぜ」

「人気？」

「ああ、可愛くて頭もいい。処罰免除になればアイツの「ことだし何かしらのお礼はするんじゃないか」

「興味ないね」

「だから落ちこぼれって言われるんだ」

「何の関係があるんだ」

「せめて異性にたいしては積極的になれよ」

「だから何の関係があるんだよ」

シルフィードとキースの言い争いに皆は苦笑いをする。

「でも処罰つて何だらうね。免除条件もあるくらいだからかなり重かつたりして」

「重いと言つても最悪留年ぐらうだろ」

「……いや、噂だと死んだほうがマシだといつような処罰があるりしい」

「へえ……なら女子は絶対我慢出来ないな」

ファイルとリサーバはシルフィードを見るが、シルフィードは全く気にしていない。

リーチはため息をつく。そして口を開いた。

「シル、男の俺からみてもお前は格好いいと思ひ

「……気持ち悪いぞ、お前」

リーチの言葉にシルフイードは冷たく対応する。反応だけではなく視線も冷たい。だが、リーチは気にせず続ける。

「それなのにお前のこと好きな女子を聞いたことがない……噂好きのファイルでさえも」

「ああ、やうだな」

「俺はその原因を考えて見た……それはそのランクだ」

一田話を区切りリーチはシルフイードの田を見る。

「ランク分け試験で処罰免除されたらシグーツトからの評価も上がる。周りの見る田も変わる。良い方向にね」

「興味はない。特に色恋」と云はね

まだ中学生だからな、と言つてシルフイードは部屋を出よつとす。

「どこに行くんだ?」

「ちょっと勉強にね

やつにシルフィードは部屋を出た。

「……ふん。素直じゃないね」

「シルのひどだ。もともとやる気だつたんだろ」

「わいこえはわいつの尊つて本物?」

テスラの質問に「嘘に決まつてるだろ」とキースとリサーバは笑つた。

「……どうだんな」

フィルは誰にも聞こえなこよつに呟いた。

- 学院敷地内図書館 -

「はあ……無理だ。AランクつてAランクだよね。Bランクにも届きやうになじよ」

「諦めたらダメだつて」

「いや……頑張るだけ無駄だ」

アイリとセレーナが声がした方を向くとシルフィードがいた。

「わいこえはわいつの尊つて本物?」

「上等部でもAランクはほとんどない……客観的事実を言つただけだ」

「何でやつこいつはいつのかなー もともヒマンタガ…… アイリ」

セレーナの言葉を遮るみづはアイリはセレーナの手を握る。

「もひ…… 良いよ。処罰がそんなに重いとは限らないから」

アイリはやう言つたが今にも泣き出しそうな顔をしていた。それを見たシルフィードはため息をつきながら頭をかいた。

「…… そういえばマグナス君はいじで何をしてるの?」

「勉強だ」

「……え?」

「だから勉強しに来たんだ。一度だけでも本氣を出しちがと想つて」

アイリは驚いたようにシルフィードを見る。セレーナも口を見開いてシルフィードを見ている。

「…… 何だよ」

シルフィードは顔をしかめ2人を見る。

「…… いつたじどうじう風の吹き回し?」

「たんなる気まぐれ。文句は言わせない」

「…… あつがとひ。マグナス君」

「礼を言われるようなことはしてない」

シルフィードは2人から離れ2階に上がる。

「……マグナス君は優しいよ

「そうかもしないわね」

第4話（前書き）

* 注意事項 *

今回は体育祭やりの練習で疲れたまま書いたのであまり出来は良くないと思います。

第4話

- 学院内図書館2階 -

シルフィードは机の上に様々な本を広げたまま寝ていた。ノートもあるが、開かれているページには何も書かれていない。

「……起こした方が良いかな？」

「当たり前じゃない。呪起き起こせり」

アイリとセレーナがシルフィードの背後からゆっくりと近づく。

「あれ？ たしかシグニツトさんだよな」

「！」

驚いた2人が振り向くとリサーバがいた。

「何だ、リサーバか……おどろかさないでよ」

「……セレーナ居たんだ」

リサーバとセレーナは同じクラスだ。それも奇跡的に初等部の頃から毎年。セレーナは親しげに接しようとがリサーバは嫌そうな表情をする。

「リサーバは何でこんな早くから？」

「ソイツの付き添いだ」

リサーバはまだ眠っているシルフィードを指す。

「へえ、2人は知り合いなの？」

「ああ……シルによつがあるなら起しちゃうか？」

リサーバはセレーナから視線を逸らしアイリを見る。

「たいした用事じゃないから大丈夫」

アイリが答えようとしながら、さきにセレーナが答えた。

「……なら良いけど」

リサーバはシルフィードの隣に座る。

「そりだ、今度の夏休みはどうするの？」

「家に帰るけど……それがなにか？」

「気になつただけ」

「……そつか」

リサーバは小さく舌打ちをしたあと、手にしている本を開いて読み始めた。

「何読んでるの？」

セレーナはリサーバが読んでいる本を見ようと覗き込む。リサーバは鬱陶しそうにしているがセレーナは気づかない。

「『黒魔術の応用』だ」

「リサーバは黒魔術が得意なの？」

「そんなことはない」

リサーバとセレーナが話している後ろでアイリはビックリしながらウロウロしている。

シルフィードに話しかけたいが寝ている。起きるやうかと考えるがもしかしたら嫌われるかも……。

アイリはしばらく考えていたが、意を決して起立した。

「ねえ、マグナス君」

声をかけながら肩を揺する。するとシルフィードは起きた。

「ん……アイリか。何か用？」

「う、うん。ちゃんと勉強してるかな、って」

アイリは不安そうにシルフィードと、机の上のノートを見る。

「見てのとおりだ」

「……勉強していないね。寝てたし」

「……心配しなくても手は抜かない」

「そう」

アイリは安心したよつた顔をする。

「マグナス君は夏休み家に帰るの？」

「いや、俺は学院に残る」

「そりなんだ。えつと……私も残るんだ」

「へえ、そなのか」

「うん、だから……その……夏休み一緒に宿題しない？」

「ん、わかった」

「ありがとう！」

アイリはセレーナを見る。いつの間にかセレーナはリサーバの隣に座っていた。

「リサーバには将来の夢あるの？」

「いや、まだ決めていないな」

そつか、と言つてセレーナは再び話しかける。そつきからセレー

ナが話しかけリサーバが答えるだけ。話しかけるセレーナは楽しそうだがリサーバは面倒臭そうだ。

「そうだ、ランク分け試験来週だけ調子はどう?」

「まあまあだ

「そう……わ、私はたぶんランクは変わらないかな」

「そうなんだ」

リサーバの視線は本に注がれたまま、まったくセレーナを見ない。

「さて、そろそろ昼食だ。行こうかリサーバ」

「もう、そんな時間か。……シル、勉強してないだろ」

「気にするな。……それじゃ、お先に」

シルフィードリサーバは席を立ち、図書館を出た。

「リサーバって格好いいよね」

「そう……だね」

「今日いっぱい話しちゃった」

アイリは、はしゃぐセレーナを見て若干呆れていたがシルフィードと話せてアイリも胸の鼓動が高まっていた。

「アイツ、何いひるやうよな」

「アイツ……セレーナか」

シルフィードとリサーバは食堂で昼食を食べていた。

「そうだ！ アイツ嫌いだな」

「どうしてだ？」

「俺が好きなタイプは物静かな人だな。……お前は？」

「俺か？ そうだな……あまり興味ないな」

「お前な、もう少し女子に興味を持つてよ。校則違反をしてまで魔法を使って女子の下着を見るヤツもいるんだぜ」

「それは変態だろ」

「そうだな、とシルフィードとリサーバは顔を見合わせ笑つてた。

「来週のランク試験は本気を出すのか？」

「ああ。俺も自分がどれほど力があるか確かめたいからな

「そりいえば最近お前の魔法みてないな」

「最近は使ってないからな」

「実技の授業もサボつてると

「だつて面倒臭いからね

お前らしいな、と言つてリサーバは立ち上がつた。

「午後も勉強するのか?」

「いや、午後は姉貴の買い物についていかないといけない

「ああ、ワインか……ご愁傷様だな

ワインディーネ・マグナスはシルフィードの姉だ。皆からはワインと呼ばれている。ランクはBで中等部1年だ。同じ年だが誕生日はワインが早い。

「何がご愁傷様のかなりリサーバ君

リサーバがゆつくり振り向くとワインディーネがいた。

「う、ワイン!」

「久しぶり。そうだ、リサーバ君もついてこない?」

「遠慮する!」

リサーバは逃げるよつと去つていつた。

「相変わらずだね……行こうか、シル

「わかつたよ姉貴」

「クロリア」

シルフィードとワインティーネは街で有名な洋服屋に来ていた。

「ねえ、これ似合つかな？ あ、これも良いなあ」

「……はあ」

ワインティーネは自分が気に入つた服を見つけてはシルフィードに似合つかどうか聞いてくる。

「ため息ばかりついてちゃ幸せが逃げちゃうよ」

「思ひんだけども、弟よりも彼氏に頼んだ方が良いよ」

「ふふ、シルくうん！ 私に彼氏が出来ないのを知つて言つてるのかな？」

ワインティーネに彼氏がいたことはない。頭も良く、容姿もかなり良い。なら何故彼氏が出来ないのか？

本人は彼氏が欲しいと言つたが、ワインティーネが告白すれば高確率で成功するだろ。

だが、ワインティーネは自分から告白したことはない。告白されそうになつたら無理やり話を逸らそうとする。

「作りうとしないだけだろ」

「 そりや思つ? でもシルも彼女いないじゃん

「 まつたく興味ない」

「 まだ中一なのに悲しいこと言つね」

「 姉貴も中一だろ」

「 むう。 …… そりや、私達付き合わない?」

「 何言つてゐんだよ、姉弟だろ」

「 でも血は繋がつていない」

シルフィードとワインディングの母は、シルフィードの父とワインディングの母が再婚して姉弟となつた。

シルフィードの母はシルフィードが小さい頃に病氣でなくなつた。ワインディングの父は魔術協会に勤めていたが、魔獸討伐の時に魔獸に殺された。

シルフィードの父とワインディングの父は小さい頃からの付き合いで2人とも魔術協会に勤めていた。

ワインディングの死後、シルフィードの父とワインディングの母は話を重ねるたびに互いに惹かれ合つていつた。

ちなみに、魔獸とはモンスターとも呼ばれ、人間以外の魔力を持つ生物のうち人間に害をなすものを言つ。

「何を言つてゐるんだよ」

「結構本氣なんだけどね」

「……俺は姉貴を姉弟としてしか見てない」

「……そつ、なんだ」

「いめん、用事があつたんだ」

「あ、わかつた。……じゃあね
シルフィードが去つていく姿をワインディングはじつと見ていた。

第5話（前書き）

* 注意事項 *

いつも短いですが今回は更に短いと思います。読んでくれている皆様に感謝です。

第5話

一学期の終業式前日、クラス分け試験の日を迎えた。

試験は筆記、実技がある。

筆記は魔法知識、一般常識などがあり、魔法以外にも数学やら様々な問題がある。

実技は魔力の大きさを測つたり、魔法の技術を測つたりする。他にも体力も計測する。

学院生は学院内で試験を受ける。

- 試験会場 -

シルフィードは筆記を終え、実技に入っていた。実技も残すのは魔法技術だけだ。

「シルフィード・マグナス。使用魔法系統を言い的に向かって魔法を放ちなさい」

「シルフィード・マグナス。使用魔法系統を言い的に向かって魔法を放ちなさい」
的には大きさが異なる10個あり、魔法使用10回以内でどれだけ当てられるかの試験だ。

「……使うは黒魔術、系統は炎」シルフィードはまず一発放つた。

シルフィードが放つた魔法は……全ての的を中心で射抜いた。

「……は？」

シルフィードの魔法は1つの火の玉だったが、途中で10の矢に分かれそれが的の中心を射抜いた。

呆気にとられた試験官はしばらく呆然としていたが、ハツとしたように実技の終了を告げた。

- - 食堂 - -

「試験どうだった？」

シルフィードがいつもの場所に座った瞬間、アイリがやってきた。

「……ダメだった」

「え……。 そう……」

アイリ自身ランクは上がつてないと感じていてシルフィードが最後の希望だったが、ダメと聞いて顔を青くした。

「……[冗談だ]

「ち、ちょっとー。 心臓に悪いよお」

今度は顔を赤くして頬を膨らませるアイリを見て、面白いヤツだなとシルフィードは思った。

「……ヤケに親しそうに話してゐね。 もしかして付き合つてゐる?」

「ち、違つよ……つてワイン！」

アイリは顔を赤くして振り向くとワインディーネがいた。アイリとワインディーネは同じ部屋だ。仲が良くて、セレーナも含めよくつるんでいる。

「あれ？ セレーナは居ないの」

「セレーナはリサーバ君のとこだよ」

「へえ、それぞれ好きな人もとへ行つたのね」

「ち、ちよつと… ウィンディーネは行かないの？」

「来てるじゃない。私が好きなのはシルだよ」

「え……。そつか、血は繋がつてないんだよね」

「うん。負けないよ」

「え、ええ！」

ライバル宣言をするワインディーネに顔を赤くしながらアイリは驚いたように叫ぶ。さらに叫んだことで周りの視線を集めた。そのことでさらに顔を赤くする。

「ほり、シルに好意を寄せてる乙女は居るんだよ……つて、シル！」

ワインディーネが振り向いた時にはシルフィードは既に食堂から居なかつた。

「ジッケンハセイコウシタカ?」

ルーは2階で読書しているディザを見つけ話しかけた。

「失敗だ。……肉体的にも精神的にも脆すぎた。せめて、Bランクだな」

ディザはつまらなそうに言った。

「ソウイエバ、ランクワケシケンハドウダッタ?」

「変わらないね。それに、ランク分け試験よりも実験が優先順位が高い」

さて、と言つてディザは立ち上がる。ディザはルーを見て笑みを浮かべる。

「ランク分け試験の結果は明日の朝、学院内の掲示板に表示される。そこから高いランクのヤツを探す」

「へエ、アラタナジッケンダイヲサガスンダナ、……ナカマサガシハオワツタノカ?」

「仲間? ……ああ、駒のことか。今作つている最中じゃないか」

ディザが何を言つてゐるのかイマイチ理解出来ないルーは首を傾げる。

「実験の成功体が駒となるんだ」

「ディザが行う実験は、人間の体を器として別の魂を入れ込むモノだ。」

入れ込む魂は人間ではなく、悪魔だ。

悪魔は強い者であれば人間と同じ見た目になることが出来る。だが、全般的に言うと出来ない悪魔が多い。

弱い悪魔と言えども人間で言えばBランクを超える。器が脆いと魂が入り込めず器は精神的に崩壊する。入り込めたとしても肉体が魂の動きについていけないと器は崩れる。

成功した場合は人間の姿と悪魔の姿を使い分けることが出来、部分的に変化させることも出来る。

器になつた者の魂は悪魔の魂によつて消え去ることが多いが、器の魂が悪魔の魂よりも強ければ悪魔の魂は消え去る。悪魔の魂が消え去つても悪魔の姿になることが出来る。

場合によつては両者の魂が消え去り、新たな魂が入ることもある。それとは逆に、両者とも消えず一つの器に2つの魂が入ることもある。

「ナルホド……」

「まだ早いが今日は寝る……じゃあな」

「男子寮前」

「……こつまでついてくるんだ？」

「あ……ちょっと話があるんだ」

「何？」

俺は早く部屋に行きたいんだが、とリサーバは小さく呟いた。

「私、リサーバのことが好き！ つきあってください」

「……ふえ？」

いきなり告白され、目を見開いて口をパクパクさせるリサーバ。顔が真っ赤なセレーナはリサーバを真っ直ぐ見つめている。

「ち、ちょっと待て……お前、俺が好きなのか？」

「うふ。……返事は遅くとも良いから、待ってるね」

呆然とするリサーバを背にセレーナは女子寮へと帰つて行く。

「次の日」

全校生徒が掲示板の前に来ていた。掲示板は敷地内に多数存在するが、どの掲示板の前にもたくさんの生徒がいる。

「……やりすぎたな」

自分のランクを見てシルフィードは呟いた。

シルフィードの視線の先にはこう書かれていた。

『中等部一年シルフィード・マグナス……ランク』

第6話（前書き）

* 注意事項 *

今回も短いと思いますが、了承を。

こきなりですが皆様のアイデアを募集したいと考えています。
書きに簡単に説明しますので気が向いたら読んでください。
後

「ランク……魔術協会によって定められた魔術師ランクの最高位。終業式が終わった後、シルフィードとアイリは学院長室に呼び出されていた。

「約束通り、処罰は免除だ。しかし、ランクになるとはね

「自分でビッククリしています」

「ランクになつたといつ」と魔王に向ひ来るよつこと連絡があつた

「ランクになつた魔術師は魔王に会わなければならぬ。基本的にその場で魔術騎士団と呼ばれる魔王警備隊のよつなモノにスカウトされる。

「……夏休みなのに」

「規則だからな、学院内ではなく国内での

シルフィードはため息をついた後学院長室を出て行った。アイリはその後ろをついて行く。

「凄いよ、マグナス君。いきなりランク！」

「ああ、やりすぎた

「……やりすぎた？」

「ああ、せめてSランクにしようかと思つていたけど久しぶりに使つたから力を出しすぎた」

「ランクは高い方が良いと思つけど」

アイリはそう言い、不思議そうに首を傾げた。

「田立ちたくないんだよ」

「Gランクの時点でかなり田立つてたよ」

ツツ「//」を入れるアイリに「違つんだ」と言つてシルフィードは頭を抱え込んだ。

「Gランクなら国では田立たない。でもSランクなら国内だけじゃなく世界中に注目されるんだ」

Gランクは珍しいことではない。ランク分け試験をサボればすぐになれる。だが、Sランクは本気を出してもなることは難しい。

知識や技術など努力で補う点に加え、素質も必要だ。だからGランクは国内だけではなく世界中で貴重だ。

「でも、凄いよ。それに、そんな凄い人と知り合いだなんて……」

「はあ……明日早速王宮だ。幸いにもこの街に王宮があるのがせめてもの救いだな」

魔術学院は世界中にあり、クロリア国内にも多数存在する。王宮

からかなり離れたところに存在する学院もあり、そこにいたら何日かけて王宮に行くのだろうかとシルフィードは思った。

- - クロリア 王国図書館 - -

「ナア、オレガオモウーハランクラジックエンダイースレバインジヤナイカ」

「Sランクは無理だ。王宮からの呼び出しもたまにあるだろうし、Sランクがいなくなれば大騒ぎだ」

「……ナラ、Bランクノワインティーネトカイウヤツカ？」

「ああ、幸いなことにワインティーネと同じクラスの男子に聞いてもらひ情報を得た。

「デモウインティーネトハランクノシルフィード、ドチラモマグナスダトイウコトハキヨウダインナンダロ？」

「そうだ、シルフィードが王宮に行つてゐる間に実行する」

ディイザは薄気味悪い笑みを浮かべていた。

- - 男子寮 - -

シルフィードは王宮へ行く準備をしていた。フィルは終業式が終わつた後すぐに荷物を持って家に帰つた。

なので、夏休みの間は1人でこの部屋を使えるはずだったが王宮に呼び出され、さらには数日間は王宮に泊まることになった。

王宮には教師も一緒に、ノウフォン・ミケロッジという女教師……いつもシルフィードがババアと呼んでいるがまだ23で美人だ。

「……で、なぜお前がここに？」

シルフィードは自分のベッドの上で寝転がっているキースにたずねる。

「暇だから……明日からお前は王宮、俺はリトリッジに旅行。しばらく会えないからいいじゃん」

「旅行？ リトリッジって言えば文化財巡りか……お前歴史に興味があつたか？」

そんなわけないじゃん、とキースは笑う。

「俺が興味あんのは昔そこで研究された魔法だ」

「……たしか召喚術の類だつたな」

召喚術にも様々なものがあり、遠くの物（人）を近くに呼び出したり、魔獣を呼び出したりするものがある。

禁止されているものとしては悪魔や天使などの召喚がある。

「昔は召喚した悪魔を人間と一体化する研究がされていたらしい」

「それは悪魔が人間の体を乗っ取るのとは違つのか？」

悪魔は人間の体に憑依する」ことが出来る。その時の人間の魂は気を失つてゐる状態だといつ。

「体だけじゃなく魂も一体化させるんだ」

「なら強い魂が残るわけか」

「お、そうだ。だが例外もあるらしいが」

「そもそも成功してゐるのか、その研究は？」

「その資料がないんだ」

かなり前の研究なので資料が紛失してもおかしくはないが誰かが故意に紛失させた可能性もある。

もしくは盗まれた可能性もある、とキースは考へてゐるようだ。

「リトリッジに行つて研究に関する情報を手に入れられるといいな」

「うだな、と行つてキースはシルフィードの部屋を出て行つた。しばらくすると、今度はリー・チとリサーバが部屋に入つてきた。

「なあ、リサーバの悩みを聞いてくれ

「……どうしたんだ？」

「いや、IJの間セレーナに告白されてさ…… それまで嫌いだつたの

に、最近何だか妙に意識しちゃつて

「付き合えばいい」

顔を赤くして囁つリサーバにシルフィードは冷たく言い放つ。リーチはシルフィードの隣で頷いている。

「だろ？ 僕もやうやくたんだが……」

「俺は……俺のタイプはセレーナみたいなタイプじゃないはず、なのに、なのに……」の気持ちは何なんだあ！」

「リーチ、リサーバを連れて部屋から出てつてくれー！」

「了解」

「は、放せ兄さん！ 俺は、俺はあー！」

・・バタン・・

リーチはリサーバを引きずつて部屋を出て行つた。だが、シルフィードの部屋にいてもしばらぐの間リサーバの叫び声が聞こえていた。

「……もつ、誰も来ないよな」

頭を抱えてベッドに倒れ込むシルフィードだが、すぐにノックの音が聞こえる。

「今度は誰だ……」

シルフィーはゆっくりと扉に向かって歩いていく。シルフィードが扉を開くとアイリがいた。

「あ……」とぼんは

「……」と野子寮だぞ

「わかつてゐるけど……正面へ呼び出しつて凄いね」

「もとほとこえはお前のせいだからな」

「うん、やうだね……『めん』

「……まあ、俺も悪いか」

「いや、マグナス君は校則違反をしてないから……私が校則違反をしてそれに巻き込んでしまつて……」

アイリは徐々に落ち込んでいく。それを見て氣まずそうにシルフィードは頭をかく。

「お前、何しに來たんだ?」

「あ、そうだった。歸つてきたら一緒に宿題して欲しいんだ」

「ああ、勿論だ。約束してたからな」

「……ありがと。それじゃ、行つてらっしゃい」

「……行つて来ます

アイリは「チココ」と微笑み、部屋を出て行つた。

「さて、寝るか

ベッドに向かおうとするが、再びノックの音がした。シルフィードはため息をついて扉を開けた。

「ヤッホー、シル。ワインだよお

・ - バタン - -

シルフィードはワイン「トイーネ」と皿があつた瞬間扉を閉めた。

・ - ドン・ドンドン・

「開ける~」

ワイン「トイーネは扉を叩き壊すような勢いでノックをする。しばらくシルフィードは無視をしていたがノックが止まることがなく、いやいやながら扉を開けた。

「ヤッホー、いきなり閉めるなんてビド~よ

「わつきから次々に入つてこられて最後に姉貴つて……気が滅入るな

「本當にビド~よ」

ワインティーネは頬を膨らませる。

「で、何のよつ?」

「明日王宮に行くんでしょう。……その前に話したいことがあって」

「……何だよ?」

真剣な表情になるワインティーネをみて、シルフィードは顔を引き締める。

「朝から誰かに見られている気がする」

「……ストーカーか?」

「そんなんじゃない。はつきり言えないんだけど人のようで人ではない気配がするんだ」

「何だよそれ」

「わからない。でも、確実に誰かが見てる。……今は気配はしないけど」

ワインティーネは室内にいる時はあまり気配を感じないが、窓の近くや外に出ると誰かに見られている気がするといつ。

「……気をつけろよ」

「心配してくれてるんだ」

「そりゃあ、姉貴だしな」

「そこは大切な女だからとか言って欲しいな」

「大切なのは変わりない」

「そうだね。それじゃ、お休み。……なるべく早く帰つてきてね」

「……わかった」

ワインティーネが部屋を出てからもシルフィードは扉をじつと見ていた。

「……ワイン」

第6話（後書き）

* 募集説明*

体育祭が終わり、本格的に受験シーズンとなつて参りました。なかなか時間が取れず、登場人物のアイデアなどがあまり浮かびません。

それで、もしよろしければ皆さんからアイデアを貰いたいなと思い、募集に至ったわけです。

募集するのは？登場人物、？国です。

？登場人物は名前、年齢、性格、ランクなど詳しいほど有利難いです。

物語にどのように関わらせたいかも記載してくれると助かります。

？国はいづれ主人公達を旅行等といった形で外国に行かせたいと考えているのでそのためです。

場合によってはその国が舞台となる小説も書くかもしれません。こちらも詳しく記載して貰えると有利難いです。

募集により集まつたアイデアは出来る限り使わせて頂きますが、希望通りに書けないこともあるかもしれませんのでご了承ください。

採用することにしたアイデアは活動報告にて知らせたいと思っています。

募集はしばらくしたいと思っています。是非ともご協力をお願い

します。

第7話（前書き）

* 注意事項 *

最近、新たに小説を書こうかと考えています。書くとしてもこの小説は続きますし、同じ世界観にするつもりです。

まあ、あくまでも考へておるだけですが……。実行した場合は更新スピードが落ちます。ご了承ください。

・・クロリア王国クロリア王宮・・

シルフィードは王宮の前に来ていた。王宮は首都クロリアの中心に位置している。王宮内部は一般人立ち入り禁止だ。

立ち入りが許されているのは呼び出しを受けた者、許可をもらつた者、魔術協会幹部、魔術騎士団などだ。

「ミスター・マグナス、くれぐれも失礼のないように」

「わかつてます、ミケロッジ先生」

2人は魔術騎士団の兵士に案内され部屋に連れて行かれた。

「全員が到着するまでの数日間、2人にはこちらの部屋で過ごして頂きます」

王宮敷地内にある客人用の建物には一人部屋が多数あり、食堂や浴場もある。

一人部屋のひとつに通された2人は部屋を見回す。

「……凄い」

部屋を見てノウフォンが呟いた。部屋はそれなりに広く、どの家具も高価なものだろう。寮とは大違いだな、とシルフィードは思つた。

「お食事の時間になりましたら呼びに来ますのでそれまでゆっくりしていくください」

兵士はやうやく部屋を出て行った。

「全員って何人来るんですか?」

シルフィードはノウフォンにたずねる。

「全員で7人来ます。一番若くてアナタと同じ年齢。今回は全員学生なので最高22歳までです」

初めてクラシックに上がった者は長期休業期間中に王宮に行かなければならぬ。学生、社会人に関わらず呼び出しがかかる。学生の場合は教師がついて行くことになる。

「……はしゃぐのは良いですが、呼び出されたのは俺ですから、あまり騒がないで下さい」

「……はー」

ノウフォンは教師だが、まだ若くて王宮に来たことも初めてで、この部屋ほど豪華なホテルにも泊まつたこともない。はしゃぐのも当然だ。

ノウフォンは顔を真っ赤にして俯いた。

「……ミスター・マグナス、聞きたいことがあります

「俺にミスターをつけたのは久しぶりですね……何を聞きたいんですか?」

「今までラシングでいたのは何故ですか？」

「ラシングだと期待すらされませんからね、気楽にやれる」

「やうですか……その、落胆しました」と言ひてすみません」

「氣にしてなこです。それよつさしきかいつしたんだす？」

「いえ……私としたことがラシングだけで生徒を見ていました。これからは氣をつけます」

「は、はあ……頑張つて下せ」

「ほとんどがラシングで見ると想ひが、とシルフィードは言いたいが」「はノウフォンを応援することにした。

・・・マジックゲート敷地内図書館

「えつと、」「はい」「……」

「あ、そつか……」

ワインティーネとアイリは図書館の2階で夏期休業中の宿題をしていた。

「もつ着いた頃かな？」

「近いからすくに着くよ」

「わかつてゐるけど……あ、セレーナ」

アイリがふと階段の方をみると顔が赤いセレーナを見つけた。セレーナはアイリに近づいてくる。

「あ、アイリ……思いつきり私を殴つて

「な、何をいつてのー？」

「わ、私ね。リサーバからOKもひつたの」

「何が?」

「皆曰く……付き合つてくれるって」

「ほ、本当に良かつたね……リサーバ君は?」

「せつめつーと一緒に家に帰つたよ」

その時に付き合つてくれるといつててくれたんだあ、とセレーナは満面の笑みで叫ぶ。

「……本当に殴つていい?」

ウインディーネは笑顔でアイリにたずねる。

「が、我慢してくれると嬉しいな

「そつか……ちよつと部屋に戻るね。夕食こは来るから食堂の席取つてね」

「わかった」

ワインディーネは図書館を出て、女子寮に向かおうとするが視線を感じて振り向いた。

「……やあ」

「フレイル先輩」

ワインディーネが感じた視線の正体はディザだった。

「ちょっとといいかな？」

「……何ですか？」

「……初めて君を見たときから……何だい？」

ワインディーネが睨んでいることに気づいたディザは言葉を止める。

「先輩が、昨日からずっと私を見ていたんですか？」

「？ 一体何のことだ」

ワインディーネはランク分け試験の翌朝から視線を感じるということをディザに伝えた。

「いや、僕は知らないよ？」

「なら、一体誰が……」

ディイザは、もしかしたらルーか？と思つが口に出さない。

「僕が犯人を探すよ」

「気持ちは嬉しいです。だけど、まだ先輩のことを信じたわけではないので遠慮します」

そう言つてワインディー・ネはディイザに背を向けて歩き出した。

「ザンネンダッタナ、ディイザ」

「……犯人はお前だろ？」

「ソウダ。テ、ドウスル？ ケイカクハシッパイダナ」

「いや、違う。こぎとなつたら無理やりにでも……まだ手はある」
アイツは手に入れる。ディイザはワインディー・ネが去つた方をただジツと見つめていた。

「……どうやって学院内に入ったんだ？」

「キギョウヒミツダ」

「クロリア王国クロリア王宮魔術騎士団訓練所 - -

王宮内に存在する魔術騎士団の訓練所、そこで2人の兵士が剣術の練習をしていた。

この世界は魔法がよく使われるが、武術も勿論使われる。武術は剣術や柔術、槍術など、様々な種類が存在する。

武術は魔法学院でも学ぶが道場も存在する。

訓練所で使う武器はすべて訓練用の武器であり、殺傷能力はほとんどない。

「騎士長、ありがとうございました」

1人の兵士グレイ・グレファスは騎士長と呼んだ兵士に礼を言う。

魔術騎士団は数チームに分かれていて、それぞれに隊長と副隊長がいる。隊長がチームのトップだということに大して、騎士団のトップは騎士長と呼ばれる。

ちなみにグレイは隊長だ。隊長は日替わりで騎士長に訓練を見てもらられる。

「そういえば今騎士長の息子さんが王宮内にいるようですよ」

「シルが？」

騎士長の名前はグノムス・マグナス、シルフィードとワインディーネの父親だ。Sランクにして騎士長である彼はクロリア最強の魔術師と呼ばれている。

だが、それはあくまでも王宮内だけでの話だ。なぜなら魔術騎士団のメンバーは一般人には知られることはないからだ。

グノムスがSランクであることを知っている人は居ても騎士長で

あることを知つていいのはほんのわずかだ。

「ランクになつたみたいですよ」

「何、アイツが……目立ちたくないと言つていたのにランクになるとはな」

グノムスが腕を組みながら呟く。グレイはそれを見て微笑んだ。

「騎士長はお子さんの話になると楽しそうですね」

「まあな、親バカと言われる」ともある

グノムスは笑いながら着替えるために宿舎に向かつ。グレイはそうですね、と言つてグノムスを追いかけた。

・・H宮内客人用食堂・・

シルフィードとノウフォンは兵士から食堂に案内された。食堂も大きく、学院とは大違いだ。ノウフォンが目を輝かせているのを苦笑いしながらシルフィードも周りを見回す。

既に4人が席に座つて料理を待つていた。どうやら今日来たのはシルフィード達を含め6人のようだ。

席は既に決められていて、シルフィードの席の隣は同一年である少女だった。シルフィードが席に座ると少女が話しかけてきた。

「はじめまして、エミリー・シユバルツといいます。ランクは……わかりますよね。サンライト学院の中等部1年です。よろしくお願ひします」

「俺はシルフィード・マグナス、マジックゲートの一年だ。気軽にシルと呼んでくれ。よろしくな」

サンライト学院。首都クロリアから東に向かい森を抜けるとヴァニアスという街があり、その街にサンライト学院は建っている。

「同じ年なんですね。そこにいるアリサ・ベストルは高等部一年だそうですね」

シルフィードがエミリーの視線をたどるとアリサという少女がいた。まだ女子しか来てないのか……、とシルフィードは居心地が悪そうに周りを見る。

食堂の扉が開き、2人の男性が入ってきた。その内の1人をシルフィードよく知っていた。

「ええ皆さん、王宮へようこそ。私は魔術協会に勤めているバアル・ゼブルです」

「俺はグノムス・マグナス、数年前から魔術騎士団騎士長をやってる」

グノムスの言葉に周りはざわめく……といつても6人しかおらず、1人は平静を保っている。

どの国にも魔術騎士団は存在する。その中でもクロリア魔術騎士団はトップクラスの実力を持ち、騎士団のトップである騎士長は最強の魔術師だ。

そんな凄い人に会えたことに5人は驚いていた。エミリーとノウ

フォンは、ふとあることに気がついてシルフィードを見る。

「マグナスって……もしかしてシル君のお父さん？」

「……ああ、そうなるな」

2人が、信じられないという様子でシルフィードを見ているとグノムスがシルフィードに近づいてきた。

「久しぶりだな、シル。元気にしてたか？」

「勿論だ。父さんこそ元気だったか？」

「当たり前だ。俺を誰だと思っている。……話したいことは山ほどあるが、また今度な」

さて、と言つてグノムスは周りを見渡す。

「今回のランク分け試験では、なんと7人、しかも学生が5ランクになった。これは異例なことだ」

毎年、新たに5ランクが1人出れば良い方だ。ほとんどの場合5ランクになった者は王宮に泊まるのは1日だけだ。

全員が揃つてから国王に会うのだが、7人もいて学院がバラバラだ。揃うまで時間がかかるので長ければ1週間王宮に泊まる可能性もある。

「この世界の交通手段は基本的に徒歩だ。手名付けた魔獣に乗つたり、魔獣が引く馬車ならぬ魔獣車があるが魔獣だということで不安

に思つ者が多く、滅多に使われない。

「魔術騎士団に入ればいつでも王宮に入れるが、学生は騎士団に入れない。まあ全員が入るとも限らんな。王宮で過ごす数日間、是非とも楽しんでくれ」

グノムスが言い終わると同時に厨房の扉が開き、料理が運ばれてきた。

どの料理も高級な食材を使つてこる。

「……美味しいわ」

エミリーは呟く。口には出さないがみんなも同じ気持ちで料理から皿を離さない。

「それでは召し上がり

シルフィードは周りを見て呟つてましたと言わんばかりに誰もが料理を食べ始めた。

「……みんな凄いな」

シルフィードは周りを見て呟つてましたと言わんばかりに誰もが料理を多かつた。それに対してエミリーはゆっくり食べていた。

「食べるの遅いんだな」

「いえ、そなへなくゆっくり味わつて食べたいんですよ。こんなに美味しい物、今度いつ食べれるかわかりませんから」

なるほど、と思ったシルフィードもゆっくり食べていた。

ふと、扉が開き女性が入ってきた。

「マグナス様、ロフオカル様がお呼びします」

「ルキフグスが？ わかつた、ありがとう」

グノムスは女性に案内されて食堂を出て行つた。

- - 王宮内魔術協会会長室 - -

魔術協会の本部はこの街にあり、すべての魔術協会を統べる会長の部屋は王宮内にある。

会長ルキフグス・ロフオカルに呼び出され、グノムスは会長室に来ていた。

「魔術協会ヴァニアス支部から連絡があつた。最近遺跡荒らしが頻発している」

ヴァニアスの北には遺跡があり、まだ発掘調査の途中だ。そこに盗賊がやってきて遺跡で掘り出された物が盗まれたり壊されたりしている。

「そこで、魔術騎士団に救援要請が来た」

魔術騎士団は王宮警備以外にも王国内で起きる様々な事件の調査や討伐依頼を受けることもある。

「盗賊なら支部でも対処出来ると思つが」

「報告によれば△ランク魔術師が盗賊の中にいるよつだ」

魔術協会本部でも△ランクは数えるほどしかいない。支部に至つては△ランクが1人いれば良い方だ。

「わかつた。今すぐにでも向かう。俺一人でも充分だが、念のためグレイも連れて行く」

「ああ、大丈夫だと思うがくれぐれも油断はしないでくれよ」

わかつてゐる、と言つてグノムスは会長室を出た。

第8話（前書き）

* 注意事項 *

だんだん登場人物が増えてきたのでそのうち人物紹介を作ると思います。あまり深くは考えてないので期待はしないほうがいいです。

夕食を食べた後、それぞれ用意された部屋に戻った。シルフィードは王宮内の散歩をしている。もちろん許可をもらっている。

シルフィードが散歩をしていると、シルフィードと背があまり変わらない少年がいた。少年はシルフィードに気づいて近づいてきた。

「おー、お前。王宮で向してる」

「俺は国王に呼び出されただけだ。お前は誰だよ」

「お前、王女なのか……俺はルベライト・セイファートだ」

「セイファート……もしかして」

「ああ、お父様は国王だ」

スプリガン・セイファート、クロリア王國の国王だ。

「王女に向かってお前と言つてしまつ申し訳ございません」

「大丈夫だ。それより、お父様に呼び出されたといふことはうるさいだろ？ 濃いな」

「いえ、ちよつとした手違いで……」

「手違ひ？ まあいい、お前に頼みがある」

「私に出来る」となり何なつと

「俺と友達になつてくれー！」

「……友達に？」

予想もしなかつた頼み」とシルフィードは聞き直した。

ルベライトは生まれた時から今まで一度も王宮から出たことがない。魔法学院で学ぶとされていることは専属の家庭教師が教える。

王宮内にはルベライトと同年代の者はいない。それなりに話す人はいても友達と言つには年が離れている。

ルベライトは魔法学院に通つていたら中等部1年でシルフィードと同学年だ。

「私のような者でよろしければ」

「ああ、それと友達に敬語使つなよ」

「……わかつた、ならルベライトと呼ばせてもひひつ。俺はシルフィード・マグナス、シルと呼んでくれ」

「マグナス……騎士長の息子か」

「ああ、そうだ」

「騎士長こはいつもお世話になつてゐる。魔法や武術は騎士長から教えてもらつてゐる」

騎士長の息子ならハインクだとこいつとも頷けるな。ルベライトは腕を組んで頷いた。

2人しばりく魔法学院の」とや王宮の」と話をしていた。

「む、そろそろ戻らなければ皆が心配する。シル、また明日会えるか？」

「たぶん、許可がもらえたの話だが」

「せうか、いやとなつたら俺が出向く」

「はは、ならまた明日だルベライト。おやすみ」

「ああ、おやすみ」

ルベライトが帰つて行くのを見送つたあとシルフィードは客人用別館に戻つた。

客人用別館の2階に宿泊用部屋があり、シルフィードが用意された部屋に向かつていると、部屋の前にエリリーがいた。

「どうした？」

「あ、シル君。今夏休みですから宿題があるんです。わからないところがあるからもしようしければ教えてもらいたいと思いまして……」

「……」

「……けど……教師に聞けばいいんじゃないかな？」

「私の付き添いの先生はもう寝てしまつて……今日はもつ遅いです
し迷惑ですね」

「あ……せうだな。なら明日明るこひに来てくわ」

「わかりました」

HIIリーは微笑んでお辞儀をしたあと部屋に戻つていつた。

「次の日」

朝食を食べにシルフィードとノウフォンが食堂に向かうと、アリ
サと付き添いの教師がいた。

「あ、オハヨー。……名前なんだつけ?」

「シルフィード・マグナス。気軽にシルと呼んでくれ」

「ん、了解。私の名前はHIIリーに聞いたよね。……年離れている
けど敬語はいいからね」

「わかった」

「あ、シル君。おはようござます」

遅れてきたHIIローがシルフィードに挨拶をする。

「おはよう」

「エリコーちゃん、私には？」

「はー。アリサさん、おはよひー」

「よくできました」

満足したようにアリサが言つ。

その後、料理が運ばれてきて旨美味しく食べたあと昼食まで自由に過りやすうことになった。

予定では今日来るエリコンクは2人。午前中に来るうことになる。

朝食のあと部屋に戻ったシルフィードが散歩しようか考えていると、扉を誰かがノックした。

「はー」

「シル君、今勉強を教えてもらえるでしょうか？」

「ん、わかった」

シルフィードは扉を開けエミリーを招き入れた。ちなみにノウファンは教師達と食堂で話していた。

シルフィードがエリコーに教えていると再び誰かがノックした。

「今度は誰だらう？」

シルフィードが扉を開けるとルベライトがいた。

「シル、来てやつたぞ」

「頼んでないけどな……まあいいや」

シルフィードはルベライトをエミリーに紹介する。王子と聞いてエミリーは驚いた。エミリーはかなり眞面目なようで、ルベライトに対して敬語を止めようとはしなかった。

そして昼食の時間。シルフィードとエミリーが食堂にいくと見知らぬ学生2人と教師1人がいた。

「帰りたい帰りたい帰りたい」

「え、えっと……」

「カムバック、俺のフリータイムー！」

「え、え、え～」

「……お前らもうちよい場所をわきまえり

ずいぶん個性的な生徒のようだ。

「でもよ、先生。俺は無理やり連れてこられただけっしょ？ 帰りたくもなるじやん」

「わ、私は嬉しいけどな……」

「あ、？ お前がいる」とも帰りたい原因だ

「え……」めん

「とにかく今すぐ帰りさせてくれ

「うぜえ、帰りたいなら帰れ。だが帰つたら殺す」

「物騒だな、オイ」

教師に向いてない、とシルフィードは思つ。口だけではなく態度も悪すぎだ。

「ヴォイド君？」

「ん？ ……ノウフォンか！」

ノウフォンが教師に声をかけるとすぐに反応した。

ヴォイド・アキシオン、都市シルギリアにある学院ソーティアムの教師でノウフォンの幼なじみだ。

「お前が引っ越して以来だから五年ぶりか？ あまり変わってないな」

「それを言つたら、ヴォイド君もだよ」

「うだな、と言つてヴォイドは笑つた。

「……昔から綺麗だつたけど、ついに綺麗になつた」

「ヴォイドも……やうに格好良くなつた」

「……何だコレは、ラブコメか？」

「同感だな……俺はシルフィード・マグナスだ」

「俺は「一ネリア・オブシディアンだ」

「私は……」

少女が自己紹介しようとするのを「一ネリアが遮る。

「コイツはミレーナ・クロッカス……あまり関わらないほうが身のためだ」

「……」めん

「……ふん。ちなみに中等部1年だ」

「俺と同じ年か、よろしく」

「ああ」

シルフィードと「一ネリアは握手をした。ミレーナは俯いたまま、指定された席に座った。

ちなみにノウフォンとヴォイドはまだ話している。若干2人の顔が赤いのでシルフィードはもしかしたら両思いじゃないかと考える。

しばらくすると他のメンバーも揃い料理を食べ始めた。

- - 首都クロリア - -

ワインディーネは昼食を食べたあと一人で街に来ていた。街で一番大きな商店に行き本を買つつもりだ。

商店についていたワインディーネは書籍売り場に着くとすぐに目的の本を探し始めた。本の名前は『恋する乙女 夏休み特別号』だ。

『恋する乙女』は国内で人気がある女性用雑誌で内容は「男にモテるには」、「素敵な彼の見つけ方」、「成功する告白」など恋愛に関するものばかりだ。

目的の本を見つけたワインディーネは手に取つてパラパラとページをめくつてみる。

「へえ、そんな本読むんだ」

ワインディーネが振り返るとトイザがいた。

「乙、これはですね……」

ワインディーネは慌てて本をもじし、何か言おうとするが言葉がみつからずオロオロとしている。それをみたトイザは笑みがこぼれた。

「わ、笑わないでください。それより何のようですか?」

「ん、本を買いにきたら顔を見つけたからね」

「そうですか……何の本を買つんですか?」

「これだよ」

ディイザがワインディーネに見せたのは『魔法構成知識応用魔術作成基礎応用編』と書かれた本だ。

「な、なんだか難しそうですね」

「簡単だよ、魔法を作る人がよむ入門書みたいなものだ」

「自分で魔法を作るんですか？ 漆いですね」

「本当に凄いのは最初に魔法を作った人だよ。そしてそれがみんなに使われてる。僕もみんなに使われるような魔法を作りたいんだ」

「先輩が作る魔法ですか……使ってみたいですね」

「そう？ なら、出来たら教えるね」

「ありがとうございます」

嬉しそうにワインディーネは笑った。2人は本を買ったあと一緒に学院に戻ることにした。

「あの……信用してないって言つてすみませんでした」

「いいよ、気にしないで。……話があるんだけビココではちょっとあだから人気のないところに行こうか

「？ はい、いいですよ」

不思議に思いながらもワイン「ディーネはディザについていた。ディザは薄暗く人がまつたく通らない路地裏にワイン「ディーネを連れて行く。

「あ、あの……話つて何ですか？」

「……初めて君をみた時から心を惹かれていた。僕と付き合つてくれないか？」

ディザの告白に驚いたがワイン「ディーネは申しわけなさそうに、ディザをみた。

「ごめんなさい、私には好きな人がいるんです」

ワイン「ディーネの好きな人。それはシルフィードだ。一度振られはしたがまだ諦めていない。」

「……やつぱりか」

「え？」

「ルーの報告どおりか。こうなつたら些か気が引けるが……やるしかないようだ」

「あ、あの、何のことですか？」

「僕は君が欲しい……実験台として」

「……やっぱり、視線の犯人は！」

「ちょっと違うな、それは僕の仲間がしたことだ

「仲間？……それよりも実験って何ですか！」

「どうせ君は帰れないから教えても問題ないか」

そう言つて、ディザは話だす。人間を器として悪魔の魂を注ぎ込むこと。それにはより高ランクの魔術師が望ましいが、高すぎると悪魔の魂が消えるかもしれないこと。

そして、既に1度実験をして失敗したこと。

「アグライア先輩を実験台にしたんですね」

「ああ、そうだ。そして次の実験台は君だ」

ワインティーネは逃げようとするが、背後に気配を感じて振り向く。

「ヤア、コンニチハ」

「だ、誰？」

「君が感じた視線の正体。そして、実験の成功例だ」

ディザはルーについて話す。ルーははるか昔実験が行われていた頃の最後の成功例であること。

実験の途中で研究所が何らかの原因で廃棄され、ずっと閉じ込められたままだつた。研究所が廃棄される前に悪魔の魂が入り、人間

の寿命をはるかに越えてしまった。

悪魔によつて得る力は違うものの、悪魔の寿命は引き継がれる。寿命といえど悪魔は寿命は永く、不老不死になつたといつてしまつても過言ではない。

ルー以前の成功例はどうなつたのか？ それは、生き残りはいるだろうがほとんど始末された。不老不死とはいえどあくまでも寿命では死なないだけで心臓を一刺しすると死ぬ。

ルーを研究所から出したのは「ティザ……ではなく、リトリッジに住む男性だ」と言つ。

その男性は今は行方不明であり、死んだという噂もある。

ティザもその男性に会つたことがある。本名は知らないが、男性はメシアと名乗つていた。

「さて、お喋りも終わりだ……手荒なことはしたくない、潔くついてきてくれるとなつた」といふ。

「……わかりました」

「聞き分けがいいやつは嫌いじゃないよ」

ティザはワインティーネを街の外れにある廃屋に連れて行く。その地下には研究所だつたため、そこでティザは実験をしていく。

「……何をすればいいんですか？」

「何もしなくていいよ。暴れると困るから拘束をせてもいいナビ、真つ暗な部屋にいてもいいだけだから」

「どうやって悪魔の魂を?」

「召喚術を使って魂だけを呼び出す」

召喚術は魂を入れる器があれば器に魂を呼び出すことができる。

死人の魂を呼び出すことも可能だが、死んでいる魂を呼び出すのは難易度が高く、成功しても魂はすぐに器から抜け出す可能性がかなり高い。

ワインディーネは拘束され真つ暗な部屋に閉じ込められた。

暗い……。長い時間閉じ込められたら気が狂うかもしれない。

逃げた方が良かつた、とワインディーネは考えるがすぐに思い直す。逃げてもディザには捕まつた。下手すると抵抗したことで殺されたかもしれない。

実験は死ぬ可能性が高いだろう。死ぬ前にもう一度だけでもシリードと話したかった。父親に会いたかった。母親に抱きしめてもらいたかった。

自然と涙が流れてくる。

ワインディーネは涙をこらえようとするが、止まることではなく、むじむじ溢れ出してきた。

もう一度みんなに会いたい。

そう思つたウェンディーネはゆっくりと意識を手放した。

第9話（前書き）

* 注意事項 *

今回はシルフィードは出ません。 今回は戦闘描写が入ります。
下手でしので期待はしないこと。

- - ヴァニアスの遺跡 - -

魔術騎士団騎士長のグノムスと魔術騎士団第1隊隊長のグレイは盜賊討伐に来ていた。

盜賊が出るのは夜が多く、夜まで待っていた。辺りはもう真っ暗だ。立てられている松明の火だけが辺りを照らした。

「この遺跡によく盜賊が現れるといつことは拠点はここからあまり遠くないはずだ」

「そうですね。……それにしてもランクなのに盜賊なんて。何があつたのでしょうか？」

「正確にはランク相当だ……。案外、普段は真面目に働いてるかもな」

その可能性もありますね、と納得するグレイ。

「遺跡の発掘調査は盜賊の影響で一時中断、遺跡内には魔術協会ヴァニアス支部によって作られた警備隊が配置されている」

「盗賊、現れるでしょうか？」

「……おい、集中しろ」

「騎士長？」

グレイがグノムスを見ると、グノムスは腰につけた剣に手を当てて目を閉じていた。

「……来る」

「ウオオオ！」

グノムスが目を開いた瞬間、盗賊達が暗闇の中から現れた。

「クロリア王国魔術騎士団騎士長グノムス・マグナス、いざ参る！」

「おなじく、クロリア王国魔術騎士団第1隊隊長グレイ・グレファス、いざ参る！」

2人は剣を抜き、盗賊達にかかっていく。既に周りからは剣と剣がぶつかりあう金属音や、魔法がぶつかる音が聞こえていた。

「遺跡内への進入は許すな……！」

- - ガキンッ - -

「ほう、これを防ぎますか？ 今回は楽しめそうですね」

何かの攻撃を受け止めたグノムスは松明の火に照らし出された敵を見て驚愕する。

姿形は人間だ。だが、グノムスの剣は剣ではなく、爪を受け止めていた。人間の爪としては異常に長く丈夫だ。

「もしや、魔人か？」

魔人とは悪魔の力を持った者ことを言う。生まれた時に既に持つてゐる者もいると言われているが、ほとんどの場合は何らかの原因で突然変異が起きて身体能力などが急上昇する。魔人は自然的に発生する症状だが、人工的に魔人にする研究が行われていた。

どちらの場合でも体を局所的に変化させることが出来る。

「さあね、そう呼ばれることもあるね」

「……やつかいだな」

グノムスは魔人から離れて距離を取る。

「……だいぶ、倒されたようだね」

周りからはほとんど音がしなくなつた。ぼんやりと見える程度だが、倒されたのは盗賊ばかりのようだ。

盗賊は実力的には魔術協会の人間の足下にも及ばない。

「どうやら、あとはお前だけのようだな」

「……みたいだね。君が僕の足止めをしておいたことで被害はまったくなくなつたようだね」

「おとなしく投降すれば、命は助けることを誓う」

「投降……つまりは降参だね。降参つてを勝ち目が無こときにする

ものだよね」

「ふん、お前に勝ち目があるとでも」

「思うね。本気で戦つてやるよ……ヴォ、オ、オオオン！」

魔人が雄叫びをあげると、魔人の全身が姿を変える。

その姿はまるで狼……。丈夫な爪を持ち、松明の火に照らされ銀色に輝く毛を持つ。顔も、まさに狼だった。鋭い牙を持ち、常に獲物を狙うような目をしている。

「ガハハハ！ 怖じ気付いたか、人間共！」

「貴様も人間だろうが」

「僕は人間よりも、は・る・かに優れている……この姿になると殺人衝動が湧いてくる。さあ、狩りの始まりだ」

そう言うと魔人は姿を消した……よう見える。魔人は人間の目にはとまらぬ速さで動いている。

「……まずは、1人」

どこかで声がしたかと思えば、1人の魔術師の首が切り裂かれ血が飛び散る。

「マズい、お前ら一力所に固まるんだ！」

グノムスが叫び、魔術師達が動こうとするが、次々に血を吹き出

し倒れていく。

「ちつ、所詮は魔人……化け物か」

グノムスが気づいた時には、生き残りはグノムスとグレイだけだつた。

「はあ、ヤツパリつまらない。……残りは2人だね。そういえば魔術騎士団なんだって？ 残念な結果にはならないでね」

魔人は動きながら話しているので、何処にいるのかわからない。

「き、騎士長！」

「落ち着けグレイ……そこだ！」

グノムスはある一点に向かって剣を突き刺す。すると、何もないはずのところから血が飛び散つた。

少し離れたところで、何かが落ちる音がした。グレイが見ると魔人だった。

「グウウ……まさか、僕に攻撃が当たられる人間がいるなんて」

「確かにお前は早いよ。だが、気配を感じる。気配を消せればお前にかなう人間はいないだろう」

「指摘をありがとう。でも、コレくらいじゃまだ倒れない」

やはり傷が浅いか、とグノムスは思った。グノムスはグレイに話しかける。

「……グレイ、お前は逃げる」

「あ、騎士長！」

「このままだと2人とも死ぬ……俺でも勝てない」

「そんな……」

「だから、逃げる。逃げて、ルキフグスに伝える。俺達が束になつても勝てない」

「……わかりました。ですが、必ず生きて帰つて帰ると約束して下さい」

「……了解だ」

グノムスの返事を聞いたグレイは頷いて走り出した。

「……以外だな、待つてくれるとほ

「ふん、初めて楽しめそうなヤツが来たからね。不意打ちは勿体ない」

グノムスはニヤリと笑う。

「そりゃ、ならばお見せしよう。俺の最強魔法を……」

グノムスは目を閉じて集中力を高める。すると、徐々にグノムスの周りが明るくなつていく。

「な、何だコレは！」

魔人は驚き周りを見渡す。周りは相変わらずの暗闇だ。グノムスの周りだけが、眩い光に照らし出されていく。

すると魔人は不思議なことに気づく。確かに明るくなつていいくが見えるのはグノムスだけ。景色は松明で照らされた範囲しか見えない。

これは、魔法弾だ。魔法弾とは魔力を込めて作られる弾で球状だ。魔法弾は魔力を込めれば込めるほど威力が高くなる。

グノムスの魔力は国内で最大といつても過言でもなく、まさにグノムスの最強魔法だらう。

「だが、それほどの威力、こんなところで撃てば……」

「心配するな、障壁を張つた。今、俺達は強固な球体に閉じ込めら
れていると思つていい」

さらに、ヒグノムスは続ける。

「この障壁は魔法を弾き返し倍にして返す……障壁内に存在するも
のは跡形もなく消え去るだらう」

すまないな、ワインディーネ、シルフィード……お前達が立派になつた姿を見られなくて。

……サラ、ごめんな。お前より先に逝くことを許してくれ。そし

て、早く支えてくれる男を探してくれよ。俺より良い男はいないだろうがな。

グレイ、俺の代わりにアイシラを守つてやってくれ。

みんな、さよならだ……。

終わりだ、と言つてグノムスは障壁に魔法弾を放つ。障壁内は眩い光で溢れる。

- - ピシッ - -

あまりの威力に障壁にはヒビが入り始める。

- - ピシッピシッ - -

ヒビが入った場所、そこからヒビは広がつて行く。そのヒビからは光が漏れ出している。

ついに、障壁は耐えきれなくなり、崩れ去る。その瞬間、障壁内に閉じ込められていた光が辺り一面を数秒間照らし出していた。

……障壁が合つた場所から植物が消え、砂漠のようになつていた。そう、砂以外は何もなかつた。

かろうじて遺跡は無事、討伐も成功したが、クロリア王国最強だとされる男の生死が不明となつた。

第10話（前書き）

* 注意事項 *

少しずつ話がグダグダになつてきました。やはり文才はないようですね。

これから数週間、更新が出来なくなると思います。理由は進学のための書類の準備や勉強で忙しくなりそうだからです。

期待している人は居ないと想いますが、お気に入り登録をしてくれている方がいますので一応ご報告します。

最後に一言、いろんな駄文を読んでくださいありがとうござります。

次回の更新は早くても10月になると思います。

- - クロリア 王宮 - -

明朝、シルフィードは王宮敷地内を散歩していた。許可はもらつていて。ルベライトが友達だからいつでも遊びに来れるようことで、国王に頼み許可を得た。

この許可は王宮が存在している間は消滅しない。つまりは半永久的に王宮の出入りが自由だ。

許可の話はともかく、何故明朝から散歩しているのか。昨日の深夜、突然窓から光が差し込みシルフィードは起きた。すぐに光は消えたが、シルフィードの眠気は完全に消え去った。

眠たくなるまで散歩しようかと考え、シルフィードは部屋を出たのだが、体を動かすことで完全に体が目覚めてしまい、今に至るといつわけだ。

「ん……確かシルフィード君か。君は早起きだね」

シルフィードはいつの間にか宿舎に来てしまった。バアルはルキフグスの秘書という立場で王宮に泊まっている。

仕事はまったくしていなが……。

「いえ、夜起きてしまつてそれから眠れないんです」

「それはイカンな。睡眠は成長にはとても大事な要素だ」

「以後、気をつけます」

「つむ」

満足したように頷いたバアルは王宮内に入つていった。

そろそろ戻るのかと思い、シルフィードは部屋に向かつた。

「で、お前は何してる」

部屋の前にはミレイナがいた。

「早く起きたから暇だつたんだけど……迷惑だよね。ごめん」

「別に大丈夫だけど、コーネリアや先生は？」

「私たち3人で来たから性別が違う私が1人部屋になつたの。……それに先生は違うけどコーネリア君は相手してくれないから」

「……お前、コーネリアと仲が悪いのか？」

「……先生達以外、学院のみんなはコーネリア君と同じ態度だよ」

「何故だ？」

ミレイナは話して良いものかと悩むが、意を決して話そつとした。

「私、呪われてるの」

「……呪われてる？」

ミレイナは頷く。

「私が近くにいると魔法が失敗したり、怪我をするんだ」

「偶然だろ」

「初めは誰でもそう言つてくれた。でも、私が居るときに限つて起
こるんだ……それからだよ、私がみんなから避けられてるのは」

「……シリクはないのか？」

「そりゃ、シリクよ。でも、どうじょもないんだ」

ミレイナは今にも泣き出しそうだ。

「……呪われてるのなら呪いを解けばいいだけだ」

「何度も、何度も試したよ。……それでもダメだったんだ。何の呪
いがかけられてこるかもわからない」

「……俺が見つけてやる」

「え？」

「俺がその呪いを解く方法を見つけてやる。」

「で、でも……」

「アテはある。来年行われる世界大会に優勝して『世界書庫』に行く

世界大会は文字通り、世界中の魔術師（Aランク以上）が集まり世界一の魔術師を決める大会だ。

優勝するのは並大抵のことではない。だが、シルフィードは絶対優勝するとミレイナに誓つた。

「ありがとう。私なんかの為に……」

「困った時に助け合うのが友達だ」

「友達？」

「ああ、俺とお前は友達だ」

「……ありがとう、本当にありがとう」

「首都クロリアのはずれにある研究所」

「……そこは？……そだつた、私は実験台にされて……」

あれ？ とウインディーネは思った。体はまったく動かず真っ暗で何も見えないが、自分は生きているのかと。

「ギイイー

いきなり扉が開き、眩い光が差し込んだ。あまりの眩しさに目を

刺激されて目をつぶつたワインティーネはビックリしたが、ホツとした。

自分は生きている。おそらく実験は成功したんだ。

「おめでとう。まさか、成功するとは思わなかつた。……君は悪魔の力を持つた人間、つまりは魔人になつたわけだ」

魔人と聞いてワインティーネはハツとした。もう自分は人間ではなくなつた。実験には成功したが人間としての自分は死んでしまつた。

「さて、君に頼みたいことがある。僕らと一緒に世界を変えよつ

「……世界を？」

「ああ、こんな汚れた世界、ないほうがマシだ」

「汚れた？」

「一見平和そうに見えてもどこかで戦争が起こつてゐる。正義だといわれている魔術協会も裏で何をやつてゐるかわからない」

禁止されている研究をしているといつ噂もある、とディザは言つ。

「そして国は、腐つてゐる」

ディザは語る。

国は優秀な人間の手助けはするが、低ランクには手をさしのべな

い。

主要都市の近くに巣くつ盗賊は討伐するが、それ以外は見向きもしない。

「国は……僕の村を燃やした！」

「……村？」

ディザが生まれた村は平和だった。小さな村だったからか、村のみんなは仲良く、まるで家族のように助け合っていた。

村には祠があつて、その祠には魔法具とよばれる魔力を持つ道具が祀られていた。それが狙いだろうか、ある時盗賊がやってきた。

盗賊は大人数できて、女子供関係なく虐殺した。命乞いをしようと盗賊は殺していく。村には火が放たれ瞬く間に燃え広がった。

村が燃えるなか幼かつたディザはただ、助けが来るのを待ち震えていた。

きつと助けが来る。そう信じて……。

いつの間にか寝ていたディザは残酷な現実を目の当たりにした。

家だつた場所には焼け焦げた木材や灰しかあらず、黒こげになつた死体があちらこちらに横たわつていた。

ディザだけが村だつた場所で立つていた。

ふらふらと歩いていたディザは、祠だつた場所に来た。案の定、

魔法具は盗まれていた。

周りを見渡したディイザは、比較的火の被害が少なく完全には燃えることはなかつた家が並ぶ場所へと歩いた。

生き残つた者を探していたが、そこにも死体ばかりが転がつていた。どの死体にも切り傷があつた。

1体だけ、木材に押しつぶされて死んだ盗賊の死体があつた。

盗賊が着ている服を見てることに気づいた。盗賊が来た時は夜だから気づきはしなかつた。

盗賊の服は魔術協会の制服だつた。魔術協会には制服がある。見すれば助けに来た魔術協会の魔術師が不運にも死んでしまつたよう見える。

だが、誰も助けに来なかつたことをディイザは知つてゐる。そして、魔術協会が魔法具欲しさに今回の盗賊騒ぎを起こしたことも理解した。

ディイザはそれから特に何もするではなくふらふらと歩いていた。

すると、そこに旅人が來た。若そうな少年で、彼はメシアと名乗つた。メシアは学院高等部を卒業して旅に出でていたらしい。

ディイザはメシアに連れられて、リトリッジに行つた。ディイザが学院に入る年齢になるまでリトリッジで過ごした。クロリアの学院に行くことに、ディイザは疑問を持つたがメシアの言つことに従つた。

メシアには一緒に暮らしている少年がいた。名前はルー。ビッグやら魔人で、姿を自由に変化させることが出来るらしい。

ディザとルーはすぐに打ち解け友達になつた。

ディザが魔術協会……国に復讐をしようとしたのはメシアから聞かされた話が原因だ。

メシアはディザが生まれた村と同じように魔術協会によって滅ぼされた村や街が多いと言つた。

それはこれからも起ころうかもしれないと言われたディザは、それを止めるために復讐を誓つた。

「……メシア様は世界に仲間を探しに言つたようです。だから私も仲間を増やすことにしたのです。……拒否権はない」

「……しばらく考えさせてください」

「……無駄なことだが、まあいい」

ディザは地下研究所を出た。

「……ディザ、ワインティーネハマジンデハナイ」

「どうじつことだ。実験は成功したはず」

「アア。アクマラショウカンスルツモリガテンシヨウカンシタヨウダ」

「つまりは、天人か……」

魔人は悪魔の力を得た人間だつた者だ。魔人以外にも似たような存在がある。

天人とは天使の力を得た者。他にも獸の力を持つた獸人がいる。

魔人と天人は寿命が長くなるが、獸人などは寿命は変わらない。

魔人と天人の相性は悪く、互いに抑制し合つ。

「……厄介だな」

ディイザは振り向き研究所を見て呟いた。

第1-1話（前書き）

* 注意事項 *

暇な時に書いていたら出来たので更新しました。相変わらずの駄文です。それでも良ければ読んであげてくれると幸いです。

—クロリア王宮—

「……盜賊討伐は成功。だが、グノムスが犠牲になつたか」

ルキフグスは討伐から戻つてきたグレイの報告を聞いた。グノムスが負けたということよりも魔人がいたということに驚いていた。

「人間としては強い方だった。所詮魔人には勝てない」

バアルはソファに座り、紅茶を飲んでいる。

「問題は、本当に魔人なのかどうかだ。……グレイの話を聞いたが、獸人の可能性がある」

「むしろ、その可能性が高い」

出現したのは狼男だからな、とバアルは付け足す。

獸人にも種類があり、大きく分けると3つ。陸での行動が得意な者。水中での行動が得意な者。空中でも行動出来る者。

一般的に陸で活動する者を獸人、水中で活動する者を魚人、空中で活動する者を鳥人と呼ばれているが存在を知らない者が多い。

「魔人にしろ獸人にしろ、もとは人間……魔術協会に欲しい人材だな」

「ふん、魔術協会に……ではなく、我が軍にだら？」

「そうだな……。グノムスの息子には討伐のことを話すのか？」

「いや、まだ早い」

・・マジックゲート女子寮・・

アイリとセレーナはワインディーネを探していた。昨日の昼食以降だれもワインディーネをみていない。

「どこにいるの……」

アイリは寮の全ての部屋を回り調べたがどこにもワインディーネの姿はなかった。

「……ねえ、コレってアグラライア先輩の時と同じだよね」

結局先輩は見つからぬままだった。今回も同じかもしけないと思つとアイリはつらしそうな顔をした。

「……ウイン」

・・王宮客人用食堂・・

昼食の時間、教師が5人、学生が6人いた。学生はシルフィードとミニリー、アリサ、コーネリア、ミレイナに加えもう1人いた。

名前はラダロア・ペテロゲーテ、ゼーレといつ街にあるリヒト学院上等部4年だ。

ラダロアは他の学生よりも教師と年齢が近いため、教師達と一緒に食べている。

「……あと、1人か。どんなヤツだろ?」

「イケメンの高等部がいいなあ」

シルフィードの言葉にアリサが反応した。今回呼び出された学生は上等部と高等部がそれぞれ1人に対して、中等部は4人もいる。

「ペテロゲーテさんは教師達としか話さないし、他は皆ガキだし……」

「ふん、中等部にしてみれば高等部の学生はババアだ」

「……あんた「コーネリア」つたつけ? ふざけたこと抜かしてるとぶつ殺すよ」

アリサがドスをきかせて睨みつけるが「コーネリアは怯えた様子はなく何事もないように食事をしている。

「……年上を無視するなんて、良い度胸だね。……話を聞け!」

「食事中は騒がないでください。迷惑です」

「な……」

「年上なら人に迷惑をかけることは止めるべきだと思します」

「一ネリアは食事を中断してアリサに話してくる。

「も、もとはと詫へばアンタが」

「年上なら注意するべきのところを挑発にのるなんて……」

「…………」

「あれ？ もう食べないんですか」

「一ネリアの問いには答えず、アリサは俯いて食堂を出た。

「なあ、言ひすぎじゃないか？」

「ああ……案外脆いようだ」

後で謝れよ、といつシルフィードに一ネリアは頷いた。

アリサは食堂を出たあと部屋に戻った。

「…………私つて馬鹿なのかな」

アリサは初等部のころからちょっとしたことで怒っていた。冗談で言われたとしてもイラついた。

「はあ……」

すぐにキレることで、仲が良かつた友達がどんどん離れていった。学院ではほとんど一人でいる。

「…………友達欲しいな」

- - 首都クロリア - -

「……がクロリアか……」

呼び出されたSランク、最後の1人カーネル・リファレンスは首都クロリアに着いた。カーネルは港町コーラルにあるセレスチャル学院高等部1年だ。

「……物の種類はコーラルの方が多いな」

クロリアは国の様々な物が集まるが、コーラルは港町なので世界中の物が集まる。

「コーラルなどの港町には魔術協会とは別の組織がある。正式名称は知られていないが海軍と呼ばれている。

海軍にはAランクの魔術師や武術が得意な者が多い。

海軍は貨物船や客船などの警備として船に乗り込む。船を傷つけないために魔法は極力ひかえている。

カーネルも長期休業中には海軍の手伝いをする。海軍にはランクとは別に称号が定められている。

「ふむ……海が見えないと何だか落ち着かないな」

教師のライゼル・フォールトは海軍に入っている。ライゼルどころかセレスチャル学院の教師のほとんどが海軍に入っている。

「街を探索するのは帰りだな。今は王宮に急ぎましょ」

「そうだね、とライゼルは行つて2人は王宮に向けて歩き出す。

「そして……」

カーネル達が王宮に着いた時は空が夕日に染められていた。

「部屋に荷物を置いたらすぐに食堂だな」

「わかりました」

2人は兵士に案内されて部屋に行つた。2人が食堂に来た時、すでに他はそろつていた。

「ついに、今日全員揃いました。改めまして、ようこそクロリア王宮へ！私は魔術協会に勤めているバル・ゼブルといいます」

バルが説明をしている間にカーネルとライゼルは席に着いた。

「皆様には明日の朝食後、國王ならびに王妃、その御子息にお会いしていただきます。それまではじゅつくりくつろぎ下さいませ」

バルがお辞儀をすると、料理が運ばれてきた。

カーネルはアリサの隣の席に座つていた。アリサはカーネルに話しかける。

「私はアリサ・ヘストル。あなたは？」

「カーネル・リファレンス。ちなみに高等部1年だ」

「私も高等部1年！ 同じだね」

アリサは高等部の学生が来たことが嬉しいようだ。

「カーネルって呼んで良い？」

「ああ、俺もアリサと呼ばせてもらひ」

アリサとカーネルの様子を見て、向かい側に座るシルフィードとコーネリアはひそひそと話していた。

「なあ、お前謝ったか？」

「ああ、一応な」

「一応ってなんだよ？」

「それが、謝つたら泣き出して……大丈夫としか言ってこなかつたな」

アリサが泣き出した原因是コーネリアに嫌われてないことが嬉しい流した涙だが、コーネリアは知るよしもない。

ミリーとミレーナは隣あつた席に座つていた。向かい側にはラダロアがいた。ミレーナの隣にはシルフィード、ラダロアの隣にはアリサがいる。

「あの……ラダロアさんは学院を卒業したあと、どこに行くのかは決めているんでしょうか？」

ヒリコーの質問に考える素振りを見せたあとラダロアは答えた。

「魔術協会に入ろうと思つてゐるが、魔術騎士団にスカウトされたら騎士団に入らうかと考えてゐる」

「やうなんですか。私は教師にならうかと考えていてます」

「教師ですか。あなたは？」

ラダロアはミレーナに聞いた。

「私は……魔術の研究をしたいです」

「なるほど。ならば2人とも上等部まで進むんですね」

「上等部に進むにはどの学院にしても試験を受け、合格しないといけないが、Bランク以上は免除になる。」

必ず自分が通う学院の上等部に進まないといけない」とはなく、自分が好きな学院にある上等部に行くことが出来る。

「これは学院によって上等部で学ぶ内容が多少異なるからである。

「はい。私はマジックゲートの上等部に行きたいと考えていてます」

「私もそうです」

「確かにマジックゲートは国内トップクラスの学院ですからね。そのほうが良いですね」

3人の話を聞いていたアリサはカーネルに上等部に行くのかを聞く。

「俺は上等部には行かない。高等部を出たら海軍に入る」

「海軍つてほとんど船で生活するんだよね」

「ああ。結構楽しいぞ。世界中の港町に行けるからな」

海軍の中には外国の武器を持った者も少なくない。カーネルが使つてゐる武器もとある島国の武器で刀と呼ばれている剣だ。

「へえ……海軍に女性つているの？」

「少ないけど何人かいるが……まさかお前」

「うん、私も海軍に入ろうかな」

「大変だぞ。力仕事も多いし」

「大丈夫。私だつてUランクだよ」

「……そうだな」

微笑んだカーネルの横顔を見てアリサは顔を赤くした。

「……落ちたな」

「ああ、落ちた」

シルフィーとペネロッパはつまらながつに食事をしていた。

第1-2話（前書き）

* 注意事項 *

学校の昼休みなどを使って書くことが出来ました。相変わらずの文才の無さですがご了承ください。

朝食を食べたSランク達はバアルに案内されて王宮本殿を歩いていた。教師達は客人用宿舎で待機している。

「ここの先が王の間……儀式などで使われる部屋となつております」

今回も一種の儀式のよつなものなので王の間が使われる。

バアルが扉を開くとかなり広い部屋で奥には豪華な装飾が施されている玉座に国王である人物が座っていた。

他にも2つ玉座があり1つには王妃である人物、もう1つにはルベライトが座っていた。

バアルが先頭を歩き、Sランク達が後ろをついていく。男子はあまり緊張した様子は見られないが女子は3人とも緊張していた。

「はじめまして、私はスプリガン・セイファート。このクロリア王国の国王だ」

ちなみに王妃の名前はジオラ・セイファートだ。

「この度はSランクにランクアップしたといつことで集まつてもらつた。皆、おめでとう」

Sランク達は深々と頭を下げた。

「今回Sランクになつたのは7人の学生、これは異例のことだ。普

段なら魔術騎士団にスカウトするといひだが学生といひともあり、それは無理だ。そこでだ」

「ランク達は何だかと思つて国王を見る。

「君達には合宿に行つてもらひ。心配しなくても夏期休業が終わる数日前には帰つてこれる。宿題も免除しよつ」

「質問ですが、合宿とはどこのへ？」

「コーラルという港町にあるティアス教会といつといひだ。クロリアから2、3日かかる。そこで合宿をしたあとそのまま解散だ」

ティアス教会と聞いてカーネルは誰にもわからないようにため息をついた。どうやら知り合いがいるようだ。

「ランク達はすぐにコーラルへ出発することになった。教師達はついていかない。

コーラルまでは手懐けられた馬のよつた魔獸が引く馬車ならぬ魔獸車を2台使つて向かう。

魔獸車の中は意外と広く1台で6人はゆっくり寛げる。王宮の物なので豪華な造りで長い間座つっていても疲れがたまらないようになつてゐる。

「……なんでルベライトが乗つてゐるんだ？」

シルフィードは田の前に立つて國王の息子、つまつは王子に質問する。

「お父様に頼んだ。暇だからな」

ちなみにこの魔獣車にはシルフィードとルブライト、コーネリアとカーネル、ライゼルが乗っている。もう1つの魔獣車にはエミリー、ミレイナ、アリサ、ラダロアが乗っている。

魔獣の上にはバアルとグレイがいた。グノムスのことはまだシルフィードには伝えられていない。

もう1つの魔獣車では……。

「ヒリーとミレイナは好きな人いるの？」

女子3人で恋愛トークなるもので盛り上がりっていた。ラダロアは爆睡中だ。

「好きというわけではありませんが、気になる人はいます」

「わ、私も……」

「誰？ 今回のメンバーにいる人？」

ヒリーは顔を赤くし、ミレイナはうつむいた。

「お、当たりか。もしかして……シルフィード……」

「ち、違います！」

「……その慌て方は肯定しているようなもんだよ

「ミレーニーとミレイナは顔を真っ赤にしてうつむいた。

「でも、2人とも同じ人が好きなんだね……。ま、私はカーネルだからライバルは……あれ？ 今から行くのはカーネルが通う学院がある町……しかもカーネルが生まれたのもそつだし……」

アリサが悩み出したのを見ながら2人は互いをチラチラとみていた。

「シユバルツさんはシルフィード君のことだが……」

「ミレーニーでいいですよ。シルフィード君のことは好きです」

「私もです。あ、ミレイナって呼んでください」

「ミレイナさん、私は合宿の間に告白しようかと考えています」

「え、そんなに早くですか？」

「はい、合宿が終わればいつ会えるのかわかりませんから」

「そうだった……、とミレイナは思った。合宿の間に告白しないともうチャンスはないかもしれない。

「ミレイナさんは、告白しないんですか？」

「私は……シルフィード君にふとわしづらいから。あきらめます」

ミレイナがあきらめる理由は自分が近くにいることでシルフィー

ドが危険な田に合つかもしれないと思つたからだ。そう考へているとミレイナは合宿中はなるべく一人でいるほうが良いと思つた。

ふと、魔獣車が止まる。皆が何だらうと思つてゐるがバルが夕食を食べるためこの村に寄ると言つた。ちなみに夕食は弁当だつた。

シルフィード外に止ると田を覗き驚いた。

「うーん……」

「そう。アルフムだ」

アルフムは小さな村で学院はない。シルフィードの故郷であるアルフムには一軒の料亭がある。その料亭にはアルフムだけではなく遠くの町から来る客もいるほど料理が美味しい。

料亭に入ると店長がシルフィードに話しかけてきた。

「お、シル坊か。ひそしごりだな。聞いたぜランクになつたらしいな。俺だけじゃない、村のみんな知つてるぜ」

「何で知つてるんですか」

「細かいことは気にするな。今夜はお前達のためことひつかりの料理を作つてやつたぜ。味わつて食えよ」

そう言つて店長はテーブルをさす。テーブルに止まるで正面の料理みたいに豪華な料理が並んでいた。

席につくとすぐになにかは料理を食べ出した。味はもう少し美味しい。王宮の料理にも劣らない味だった。

シルフィードとグレイ、バアルは夕食後シルフィードの家に向かつた。

「……母さん、ひせじぶつ」

「シル、ラランクおめでとう」

シルフィードの母親、サラ・マグナスは笑顔でシルフィードを出迎えた。

「元気にしてた？ 友達と仲良くしてる？」

「心配しなくても大丈夫だよ」

そう、と言つてサラは安心したように手を細めた。

「シルフィード、スマンが先に戻つてくれ」

グレイに言われ、シルフィードは2人よりも先に魔獣車に戻つて行つた。

「サラさん、すみません。グノムスは……」

「いいんです。こつかはそうなると思つていました」

「……あとワインティーネのこと何ですが」

バアルはウイングティーネが行方不明になつたことをサラに伝えた。サラは目を見開き口に手を当てた。

「そ、そんな……ウインが……」

「現在、協会の方で捜索していますが一向に見つかる気配は……」

「そう、ですか……頼みがあります」

「何ですか?」

「シルだけは、必ず守ってあげてください。ランクですがまだまだ子供ですか?」

「……わかりました」

グレイ、バアルは深く頭を下げたあと魔獣車へと歩いていった。

「……サラさんは強いな」

「ええ、普通なら泣いてもおかしくない」

「……母親とはそういうものなのだろうな」

第1-3話（前書き）

* 注意事項 *

勉強の合間に書いていたらいつの間にか書く合間に勉強している
状態になった……。今回もグダグダです。

ワインディーネはリトリッジに来ていた。ワインディーネは天使の力（本人は悪魔の力だと思っている）を使う練習をしていると翼を生やすことが出来た。

翼を使って飛ぶ練習を夜中にしていると上達したのでリトリッジまで来たのだ。デイザから遺跡を調べることを頼まれたのも理由だが。

遺跡は夜には入れないので日が明けるまで待っていた。ワインディーネがウロウロしていると、後ろから声をかけられた。

「ワインか？ お前も遺跡見学とは奇遇だな」

「き、キース！ ほ、本当ビックリ、まさかキースに会うなんて」

キースはワインディーネが学院で行方不明になつていることを知らない。そのことにワインディーネはホッとしながらキースと一緒に遺跡をまわることを提案した。

「そうだな、1人よりも楽しいからいいだろう」

その後2人で遺跡を見学したあと、食堂で昼食を食べていた。

「ん、この料理美味しい！」

「良かったな」

キースは船着場で貰つたパンフレットに印をつけていた。

「何してるの?」

「見学した遺跡に印をつけている。今まで手がかりはなしか……」

「手がかり?」

「ああ、ちょっとした調べものだ」

「ふうん」

ワインディーネは食堂を出たあと、キースに帰ると伝え人気がないところに行つた。

「……ドウダ? ナニカハツケンシタカ?」

「いえ、何も発見できませんでした」

「フン、ヤクタタズダナ」

「……すみません」

ルーもリトリッジに来ていた。リトリッジにはルーの家があるのでワインディーネはそこに泊まらせてもらつていた。

「オマエハデイザ」「ウリュウシティロ」

「はい、わかりました」

ワインティーネはルーに頭を下げ、早足で立ち去った。

・・港町コーラル、ディアス教会・・

「コーラルは段差や坂が多い港町だ。ディアス教会は高台にあり、町全体を見渡すことが出来る。

セレスチャル学院は島に建ててあり一本の橋によって本土と繋がっている。

「コーラルで最も高い建物である灯台兼展望台はクロリア海軍本部の敷地内に建っている。

「ん、風が気持ちいいな」

魔獣車から降りたアリサは大きく伸びをした。

「……海ですね。はじめまして見ました」

H//リーは目を輝かせて海を眺めている。

「一ネリアは「帰りたい」とブツブツ呟いている。ミレイナは皆と離れたところから海を見ている。

「海か……この海の向こうにはまだ見ぬ世界が……」

ルベライトは海を見ながら自分の世界に入り込んでいる。

「皆さん、よつこりティアス教会へー。」

教会の中から修道服を着た女性……シスターが走ってきた。そして、……カーネルに抱きついた。

「ええ！」

アリサは声をあげて驚いた。アリサ以外も声には出さないが驚いた様子だ。

カーネルは顔をしかめ、シスターを引き剥がす。

「姉さん、いつも言つてるじゃないか。人前では抱きつくな」

「なら、人前じゃなければいいのね」

満面の笑みのシスターを見てカーネルはため息をついた。

「か、カーネル、この女性は？」

カーネルが答えようとしたが、シスターがそれを遮つた。

「私はパーズイ・リファレンス、カーネルの姉でディアス教会でシスターのバイトしてまーす」

「バイト……シスターのバイトつて……」

「人手が足りないんですよ。最近、神への信仰心がない者が増えて……私もですがね」

教会から神父と思われる男性が出てきた。

「信仰心がない人が神父つて……」

「気にするな、この教会の人間はみんなそうだ」

それじゃ教会に何でいるの？ というアリサの疑問に答える者はいなかつた。

- 次の日の朝 -

「納得いかねえ！」

まだ薄暗い空の下、コーネリアは叫んでいた。コーネリアは畠の草むしりをしていた。

「何で俺が草むしりなんか……」ミレイナにだけやらせればいいんだ

ミレイナも畠の草むしりをしていた。ミレイナはコーネリアとなるべく視線を合わせないようこつこつむいて作業をしていた。

「……疫病神が」

「……ごめん」

シルフィードとルベライトは教会の部屋（客人用）西側の掃除をしていた。

「ルベライト、掃除はやつたことあるのか？」

「いや、初めてだ。意外に楽しいな」

「はは、そうか」

ミリーとラダロアは教会東側の部屋の掃除をしていた。

「ラダロアさんは彼女はいらっしゃるんですか？」

「ん、いるよ」

「告白はどちらから？」

「相手からだよ」

「どのような告白をされたんですか？」

「ストレートに好きですって言われたよ。……言葉よりも気持ちが
こもっているかどうか大事だよ。頑張つて」

「は、はい」

アリサとカーネル、ペーズイは皆の料理を作っていた。

「アリサってカーネルが好きなの？」

「え……は、はい。どちらかといえば……」

「そう……殺す」

ペーズイは手に持っている包丁をアリサに向ける。

「姉さん！」

「はーい」

カーネルに声をかけられパーズイは料理を再開する。包丁を向けていたアリサの顔は真っ青だつた。

「大丈夫か？ すまないな、姉さんは俺のことになると少しアレでな」

「弟思いの素晴らしい姉でしょ、ねえアリサさん」

「は、はい」

「弟に寄り付く悪い虫はどんな手を使ってでも駆除したいの。協力してね」

満面の笑みのパーズイに怯えながらアリサは頷いた。

朝食の時間になり、作業を中断、もしくは終わらせ皿は食堂に集まる。

「うわあ、美味しそうだな」

テーブルに並んだ料理を見てルベライトは言った。

「さて、本来なら教会では食事の前に感謝の言葉を捧げることがあるんですが……この教会ではありません」

神父の言葉にカーネルとパーズイ以外のみんなが「本当にこの教会大丈夫なのか？」と思つた。

「いただきまーす」

パーズイは最初に料理に手を出した。シルフィードはふと気になつたことを神父にたずねた。

「そういえば、この教会のシスターは……」

「ええ、パーズイ一人です。まあ、手伝いというなのバイトに来れる人もいますが」

本当にここ教会か？と思つたのはシルフィードだけではない。ちなみにグレイとバアルは海軍に泊まつている。ライゼルは学院に戻つている。

気持ちを切り替えて皆は料理を食べ始めた。料理は美味しく、最近美味しい料理ばかり食べるな、とシルフィードは思つていた。

朝食後、初日ということもあり、自由に町の見学をすることになつた。……アリサを除いて。

アリサはパーズイに捕まりカーネルのあとをつけている。

「な、何をするんですか？」

「カーネルに悪い虫がつかないように見張り。あと、アリサもその対象にならないように気をつけてね」

「は、はい」

2人がカーネルをつけていると、1人の女子がカーネルに話しか

けた。

「……また、あの女懲りずに」

カーネルと話している女子がふとパーズイを見た。その女子は目を見開いたあと、からうじて冷静を装い、カーネルとわかれた。

女子がその場で立ち去くし震えているところにパーズイは近づく。

「えっと、まだおはようかな？」

「お、おはよーい」ぞいます先輩」

「うん。……カーネルのこと好き？」

「す、好きです。あ、別に特別な意味はなくて友達としてです」

「そう、ならいいや。じゃあね」

女子はパーズイに頭を下げるあと逃げるよつに去つていった。

「……カーネル君つて彼女がいたことは？」

「ないよ。私が阻止するから」

「どうな、とアリサは思った。逆にパーズイに認められたらカーネルの彼女になれるかもしねえ、と考える。

それを承知でアリサはパーズイに自分の気持ちを伝えることにした。

「パーズイさん。私はカーネル君が好きです」

「友達として、でしょ」

「異性としてです」

パーズイはアリサを睨みつける。アリサは怯えるがパーズイを見つめたままだ。

「パーズイさんがどう思おうが、この気持ちは変わりません」

「……ふう。わかった、応援してあげる」

「……え？」

「私と面と向かって言えたのはアリサが初めて。みんな睨んだら逃げていくからね」

「え？ え？」

「私がカーネルの相手を見定めるような真似をしているのはね、カーネルの頼みなんだ」

「どういづ」とですか？」

「カーネルさ実はシスコンなんだ」

「……へ？」

「どうより姉離れが出来ないだけなんだ、と言つてパーズイは話し出す。

それを簡単にまとめる、姉離れ出来ないカーネルを心配したパーズイが彼女を作るようカーネルに促すと、パーズイが選んだ相手なら……ということになつたらしい。

カーネルが姉離れ出来ないと同様にパーズイも弟離れが出来ない、本人は認めてはいなが……。

実際、カーネルにふさわしくないと思つた相手はカーネルに近づかないように脅迫紛いのことをする。ちなみに、パーズイはカーネルが好きで姉弟じやなかつたらいいのにと何度も思ったことがある。

「そう……なんだ」

「あれ？ ガツカリしたかな」

「いえ、ちょっと意外で……」

「そう。なら、カーネルのことは……」

「好きである」とに変わりはないですよ」

「良かつた。よろしく頼むよ」

パーズイは笑顔でアリサに握手を求める。アリサはそれに応じた。

「よろしくお願ひします」

以後アリサはパーズイのことを姉さんと呼び始めた。

シルフィードヒルベライト、コーネリアは海岸を歩いていた。

「俺、釣りつてやつたことないんだ」

「安心しin、明日の手伝いで釣りをするからな」

「本当か… 楽しみだな」

はしゃぐルベライトと対照的に「コーネリアはふうふうと歩いていた。

びつやう草むしりが予想以上にツラかったようだ。

「せういえば、えつと……せう、ミライナ。コーネリアの彼女か？」

「あんなヤツが彼女だつて？ アイツ、学院の嫌われ者だぜ」

ちなみに魔獣車の中でコーネリアはルベライトとは友達になつた
(カーネルも同様)。

「嫌われ者？」

「アイツがいると悪いことが起きるんだ。合宿中にも起らうないと
は限らない」

「一種の呪いか……」

だらうな、と言つたあとコーネリアは「帰りたいな」と呟いた。

ミレイナは1人で教会の高台から海を眺めていた。教会の敷地内には神父がいるが教会には少なからず人がやってくるため神父は常に教会の中にはいる。

「……海ってキレイだな」

海を眺めるミレイナは寂しそうな雰囲気を纏っていた。

「……神父さんなら呪いのこと少しさはわかるかも」

ミレイナはそう思つて神父に聞いた。

「呪いですか……。この教会には人ならざる者を拒絶する結界がありますが……呪いに關してはなんとも」

「そりですか……」

ミレイナは残念そうに2階にある部屋に戻つた。ちなみに客人用の部屋は3人部屋だ。女子は1部屋で足りたが、男子は2部屋使つた。

ミレイナが部屋に戻つたころ、エミリーは町のカフエでラダロアに恋愛相談をしてもらつていた。

「ヤッパリ、気持ちはハツキリストレーント」

「はい、わかりました」

「告白は？」の合宿中に？」

「はい、やつでないともつチャンスはありませんから……」

「やつ、頑張つてね」

「ありがとうござります」

その日の夕食は各自食べることになった。午後も自由時間となり夕食の時間になると全員が教会の食堂に集まつた。

「皆さん、」「一ラルはどうでしたか？ 良い港町でしょう。明日は主にこの教会内で手伝いをしてもらつことにになりますので、ゆっくり休んでください。それではいただきます」

神父の言葉が終わるとみんなは料理を食べ始めた。

夕食のあと、浴場（男女別）で疲れを癒やしたあと、部屋に戻つて早くも眠り始める者や散歩をする者がいた。

シルフィードは時間買つてきた本を部屋のベッドに寝そべり読んでいた。その本に興味を持ったルベライトはシルフィードに聞いた。

「何読んだんだ？」

「魔獣図鑑最新版だ」

魔獣図鑑には今までに発見された魔獣の習性や使つ魔法などが掲載されてゐる。

「くえ……それこしても暇だ。」「ネリアも寝てるし」

「お前も寝るよ……明日も早いんだから」

「まだ眠くない……散歩する」

「散歩か……俺も行くよ」

シルフィードとルベライトは教会の周りを散歩することにした。辺りは街灯や灯台によつて明るかつた。

「……明るいな」

「クロリアもあまり変わらないだろ」

「はは、そうだな」

2人は高台から街を見ている。

「あ、あ、あの……シルフィード君」

シルフィードが振り向くとHミリーがいた。

「どうやら俺はお邪魔のようだな……さきに寝てる」

ルベライトはシルフィードを残して教会の中に入った。

「どうしたんだ?」

「え、えっと、えっと……」

「えつと……何?」

「わ、私……」

「ん?」

「……な、何でもないです！ シルフィード君はここで何を？」

「散歩……ルベライトが言ひだしたけどな」

「や、やつですか」

しばらべ互いに黙つていた。その間、H//ローはオロオロしていった。

「……そろそろ歸りの」

シルフィードが戻るのとするがH//ローがそれを止める。

「あの、シルフィード君。好きな人は……いるんですか？」

「好きな人か……微妙だな」

「……気になる人がいるんですか？」

「そうだな……。一度告白されて振ったんだが、それから意識し始めたかな」

「やつ、ですか……。ありがとつぱれこました。止めたりしてすみません、おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

シルフィードが教会に入るのをHectorは見送ったあと、Hector
も教会に入った。

シルフィードが部屋に戻るとルベライトは寝ていた。

「俺も寝るか……」

第1-4話（前書き）

* 注意事項 *

いつものどおりの駄文。最近早くもスランプ気味……。あまり浮かばないアイデアがさらに浮かばない。

ワインティーネとティザは森の中を歩いていた。

「あの……どこに向かつて？」

「……パーク、国一番の港町だ。そこに協力者がいるんだ」

「協力者ですか……」

「ああ、悪魔払い師でな、召喚師でもある。……名前はデュリオ・アゲート。教会の神父だ」

・ 港町コーラル、ディアス教会 ・

ディアス教会での合宿は約一週間続いた。合宿とは言つてもほとんど手伝いしかやっていない。

合宿でランク達は仲良くなれた。ミレイナは一人でいることが多く例外。

アリサとカーネルは特に仲良くなつた。付き合つことになつた2人は教会の手伝いも一緒にすることにした。

ちなみにエミリーはシルフィードに告白することはなかつた。

合宿最終日（夏期休業期間の半分を過ぎたあたり……予定よりも早い）は自由時間となつた。最終日前日、夕食後食堂でそれぞれ最終日の予定を立てていた。

「ねえカーネル、明日どうするの？」

「やうだな……。アリサは何がしたい？」

「わ、私はカーネルと一緒になら何でも良いよ」

「俺もだよ」

アリサとカーネルの周りには他の人が近寄りがたい雰囲気が漂つていた。

「……あの空間には入れないな」

「ふん、ぐだらねえな」

「おや、」コーネリアはカーネルが羨ましいのか？」

「つるせえ馬鹿」

シルフィードとコーネリア、ルベライトは3人で町を「つるつる」とした。……特に予定と呼べるものはない。

「ラダロアさんは明日どうしますか？」

「うん、お土産買おうかなって」

「あ、私もついていきます」

ミリー、ラダロアは家族や友達にお土産を買うこととした。ミレイナは既に部屋に戻っていた。ミレイナは明日は教会にいる」と

にした。

- - 翌日 - -

朝食後、自由行動となつた。ミレイナが教会の敷地内をうろついて
していると、1人の少年が教会に訪れた。……ディザだ。

ディザはミレイナに会釈、ミレイナも慌てつつ会釈した。ディザ
は教会に入り、神父のデュリオに会う。

「やあ、久しぶり」

「はい。……そういうえば敷地の外に天使の力を持つ者がいるのです
が、連れてこないんですか？ 教会の結界は悪魔の力を防ぐので問
題ないのですが」

「ふん、アイツは自分のことを魔人だと思つてゐる。」あらとして
もその方が好都合だ」

「なるほど……。今回の用件は魔力が流れ出る場所についてでした
ね」

召喚は召喚する者の魔力が大きく影響する。魔力が高ければ高い
ほど召喚できるモノが増える。

また、召喚する場所も影響する。世界には魔力が流れ出る場所が
あるという。その場所には魔力が高い魔獣が集まる。

その場所にある魔力はそこにいる生物に流れ込み魔力を高める。
また、召喚の成功率も上がるという。

「ああ、わかつたか?」

「ええ、勿論。私の使い魔は優秀ですからね」

使い魔とは、契約した悪魔もしくは天使のことをいつ。契約内容は様々だが、契約すると契約者は力を貸してもらえることが出来る。

「場所はここから遙か南にある小さな島です」

「流石にそこには自分で行つたほうがいいな……船はあるか?」

「そういうふうと思って海賊の知り合いで楽しんでおきました。」この町から海岸に沿つて東の方に行くと洞窟があります。その奥に海賊がいます。あ、私から紹介されたと言えば大丈夫ですので」

ちなみにコーラルはクロニア王国の南端にある。

「わかつた。一応礼は言つておく」

ディザがデュリオと話しているところ、ワインディーネは教会敷地横の石段に座つて海を見ていた。

「……最近海をよく見る気がする。はあ、シルに会いたいな

「シルとは?」

「弟だよ……つて誰!」

「おつと、失礼。僕はガル……お嬢さんの名前は?」

「う、ウインディーネ・マグナスです」

「良い名前だ」

「あ、ありがとうございます。……何かよろですか?」

「いや、なんだかお嬢さんが寂しそうに見えてね……迷惑だったかい?」

「い、いえ……あ

「ん?」

ガルーが振り向くとディザがいた。

「誰だ?」

「僕はガルー。……君はマグナスさんの彼?」

「ふ、そう見えるか?」

「ああ、お似合いでですよ」

「そうか……行くぞ」

ディザはウインディーネの手を握り、引っ張つていいく。

「え、え? あ、ちょっとな?」

「はい、さよなら」

森に入ったところでディザはワインティーネの手をはなす。

「あ、あの……」

ディザは頭に手をあて何かを考えている。ワインティーネはその様子をオドオドしながらみてくる。

「……アイツ……何者だ」

ふとディザが呟く。

「え？」

「アイツ……人間じゃない。気をつけろよ」

「え？……は、はい」

ディザの言葉にワインティーネは不思議そうに頷いた。

カーネルとアリサは商店通りを歩いていた。その中のとおり店が建ち並ぶ道だ。

「あのネックレス可愛いね」

「そうだな。きっとアリサに似合つよ。買つてやうつか？」

「そ、そんな、悪いよ……高いし。あ、あの腕時計カーネルに似

合意モード

「ん、あれか？　ずいぶん高いな」

装飾品店で商品をみている2人は互いに相手に買おうとしてるが、相手は遠慮するというのを数回繰り返している。

「おや、カーネル君。彼女とデートですか。羨ましい」

「ガルーさん！　お久しぶりです」

「えつと……」

「ああ、紹介する。海軍兵士のガルー・ファトウスさんだ」

「ども、ガルーでいいよ。可愛いお嬢さん」

「は、はひ。わ、私はアリサ・ヘストルです」

「ガルーさん、旅から戻つてきていったんですか？」

「ああ、クロリア王国中をまわるのは時間がかかつたよ」

「王国中をまわったんですか？」

「そうだよ。アリサさんの街にも行つたと思つ」

「ガルーさんは海軍には」

「戻るよ、そのために来たんだ。……それに気になることもあるか

らね

ガルーは2人に手を振りながら去つていった。

「気になることって何だろ?」

「何だろ? な。……あ、これアリサに似合つんじゃないか」

「わ、キレイ。これはカーネルに似合つよ」

ガルーが去つたことでまた2人はいちゃつきはじめた。

シルフィード一行は予定通り、町をうねりうねりしている。Hミリーとラダロアはお土産を探していた。

「やついえば、告白はしましたか?」

「いえ……シルフィード君にふさわしいのは私じゃありませんから」

「やつですか」

最終日は昼食は自分達で食べ、夕食はみんなで食べることになっている。夕食後、帰り仕度をしてカーネルはその場で学院に戻り、他はクロリアに戻つて解散となる。ちなみに夕食はグレイとバアルも一緒だ。

バアルとグレイが海軍本部を出ると、ガルーがちょうど海軍に入らうとしていた。

「おや、あなたは……」

ガルーはグレイを見て驚いた表情をしたあとグレイに話しかけた。

「ん……どこかで会いましたか？」

グレイはガルーを見たが、会った覚えはなかった。

「あ、すいません。人違いのようです」

「はあ、そうですか」

ガルーは2人に軽く頭を下げ海軍本部に入つていった。

「……どこかで見たような」

グレイは思い出そうとするが、途中で諦め教会へと歩いていった。

第15話（前書き）

* 注意事項 *

馱文です。受験真っ盛りなのに自分は何をしてるんだ、と思いつつ書いてます。

- 海賊のアジト -

デュリオに言われたように「ディザとウインディーネは「一ラルの近くにある海賊のアジトと化した洞窟に入った。

すぐに2人の海賊がいて、槍によつて前を塞がれた。

「……何者だ」

「ディザ・フレイル、デュリオ・アゲートの紹介で來た」

「……通れ」

見張りである2人は槍を下げ、ディザとウインディーネを通した。

洞窟はしばらく薄暗い道が続いていた。歩いていくと、開けた場所に出た。

そこには、どこから持ち込んだのかわからないがテーブルや椅子があり、数人の男達がいた。

「おい、アゲートが紹介したのはお前らか？ まだ餓鬼じやねえか

2人に声をかけたのはディザと同じくらいの年である20歳だ。

「が、餓鬼つてアンタも！」

ワインティーネが少年に向かつて叫ぶと、周りの海賊から槍を向けられた。

「ひい……！」、「ごめんなさい」

「ふん、やっぱり餓鬼だな」

「餓鬼に餓鬼と言われるのは些か気が引けるのだがな」

「せ、先輩！」

「……ふうん、お前ら中等部？」

「私は3年、コイツは1年。2人ともBランクだ」

「へえ、Bね。俺は高等部1年だ……学院の休みの日は海賊をしている」

2人がBランクと聞いても海賊達はビックリしない。むしろ口の端を吊り上げてニヤニヤしている。さらには平然としている少年を見て2人は若干驚く。

「び、Bランクだから本気になればアンタなんか……」

「俺はレングス・ストリング、Sランクだ」

「え、S-！」

「ああ、中等部1年のころになつてな。えつと、本気になれば……」

何だつて？」

「な、何でもないです」

怯えるワインディーネに対して「デイザは表情を変えず、レングスを見ている。

「ふ、コイツは魔人だ。Sランクであろうと勝てはしない」

「お、魔人なの。俺は魔人じゃないけど悪魔の力持ってるぜ」

「……何？」

レングスの言葉に「デイザは目を見開く。魔人じゃないが悪魔の力を持っているだと……。デイザはレングスの言葉を信じられなかつたが、嘘だとも思えなかつた。

「俺の親父が悪魔でさ……母さんに一目惚れして種族の枠を越えてな。まったく驚きだよな」

笑いながら言うレングスは、「あ、そうそう」と言って自分が受け継いだ力について話した。

魔力、身体能力は人間を遥かに超え、体の一部及び全体を悪魔の体に変化させることが出来る。

寿命は人間よりも少し長いらしいこと。ちなみにSランクという結果を出した時は受け継いだ力を一切使っていない。

「……化け物だな」

「化け物？ 確かにな……。さて、頼み事があるんだってな」

「聞いてくれるのか？」

「アゲートに頼まれたからな」

「そうか。……船を出してくれないだろうか？ 場所は……」

「ほう……。船を出すことで海軍に見つかる可能性がある。そういうことは危険だ」

「それでも、行きたいんだ」

「逝くの間違いじゃ……まあいいか。なんたってアゲートに頼まれたんだからな」

ディイザはランクを超える者をいとも簡単に手懐けたデュリオが何者か不思議に思った。

「さて、出航は今夜だが俺はいかない

「お、お頭！ 何故ですか」

「だつて、夏期休業内に帰つて来れないだろうからな。まあ、頑張つてくれ」

レングスはアジトから去つていった。

「お頭ああああ

「……トップ以外は雑魚の集まりなのか？」

「わい、今から出航の準備だ。夜まで待つんだな」

「お、おわ」

ディイザとウインディイーネは洞窟をひひひして時間を潰していた。

・・ディアス教会・・

シルフィード達は既に夕食を食べ終え、帰る支度をしていた。

「長いよひで短かつたな」

「ああ、そうだな。……楽しかった」

「よしあ、もう帰れるぜ」

シルフィードとルベライドとは対照的にコーネリアは帰れることが嬉しく、今まで一番輝いていたひだつた。

「ラダロアさん、ときに行きますね」

「ああ、アリサさんね。わかってるわかつてる

カーネルとラダロアの部屋では、ラダロアがいそと準備をしていた。カーネルは手伝っていたが、そわそわしていて我慢が出来なくなつたのかアリサに会いに行つた。

カーネルはこの町にいるので準備をする必要はない。それよりも、しばらくアリサと会えなくなるのが問題だつた。

アリサが冬季休業中に来ようつと考へたが、カーネルは基本的には長期休業中は船で海に出ているので会えない。夏期休業であれば時間が作れるとのことで、次に会つのは1年後となる。

「アリサ、準備は終わつた?」

カーネルは部屋に着くとすぐニアリサに話しかけた。

「ま、まだだよ。お土産買つすぎてなかなか……」

「手伝つよ」

「あ、あつがとつ」

仲睦まじく準備する2人を見ながらエリコートリレイナはため息をつながら準備をしていた。

「…………告白しなかつたの?」

「はい、どうやらシルフィード船は気になつている人がいるようですから諦めました」

「…………そつなんだ」

「はあ、もつみんなとお別れですか…………」

「まあクロワアまでは一緒に」

「楽しい合宿でした」

「そう、だね」

ヒリーハは合宿中の楽しい思い出があるみつだが、ミレイナではない。

ミレイナは一人で過ぐすことが多かった。手伝いはコーネリアと一緒にか1人だったので喋る相手は同じ部屋の女子2人と神父、シスターだった。

「……でも」

シルフィードに会えたから良かつた、ヒリーハは思つ。

もう忘れているかもしれないが、呪いを解く方法を探すと言つてくれたから。それだけで、充分だった。

「どうしましたか？」

「あ、何でもないよ。サッサと終わらせないとね」

準備を終わらせた者から教会の入り口に集まつてくる。

「やあ、諸君。準備は出来たようだね」

全員揃つたころ、バアルとグレイが教会から出てきた。

「来た時と同じように、魔獣車に乗つて帰るからな……ま、サッサと来い」

行きと向じよに魔獣車に乗り込む。

「じゃあねカーネル」

「ああ、アリサまたな」

アリサとカーネルは抱き合つたあと、アリサは魔獣車に乗り込んだ。

魔獣車が動き出し、教会から遠ざかるのをカーネルはじつと見ていた。

「カーネル、やつぱり寂しい?」

「当たり前だ。……姉さん、ありがとう」

「ん、何が?」

「……いや、何でもない」

「? まあいいか」

パーズイは首を傾げたが気にしないことにした。

- - 海賊アジト - -

「おい、出航するだ

辺りも暗くなり、出航の準備が出来た。海賊の1人がディイザを呼びに、アジトの奥にある休息室に来た。ベンチの上でディイザは本を

読みながら待っていた。

ワインディーネはディザの肩に頭をのせ、眠っている。

ディザが立ち上がり、ワインディーネを支えるものがなくなり、ベンチに頭をぶつけたワインディーネは目をこすりながら起きたようだ。

「あ、あれ？ ここは……」

「おい、寝ぼけてないで早く行くぞ！」

「は、はい」

ワインディーネは先を行くディザを急いで追いかけた。

海賊達と2人が船に乗り込むと、すぐに船は動き出した。

「目的地まで約一週間かかるだろう。ないとは思うが食糧がなくなら、近づく島で補給する。部屋は用意してから着くまでゆっくりしてな」

「心遣い感謝する」

2人は用意された部屋に向かった。部屋は狭く、ベットは一つしかない。天井には蜘蛛の巣も張っていた。

「……しょうがないか。船に乗せてもらつただけでもありがたい」

食事は全員一緒にとることになつていて。ディザは甲板に向かっ

た。ウインディーネも後をついていく。

「うわあ、星が綺麗」

「……ふん」

2人が甲板にでてしばらくすると海賊の1人がやつてきた。

「おい、夕食の準備ができたぞ！」

「夕食じゃなくて夜食だと思つがな」

ディイザは文句を言いながらも食べに向かった。ウインディーネはその様子を見てふと微笑んだ。

「……シル。いつかまた会おうね」

ウインディーネが見上げた空には無数の星が輝いていた。

第1-6話（前書き）

* 注意事項 *

更新再開しました。例の「」と「」で本文です。

ディアス教会を出て魔獣車はクロリア王宮についた。王宮の入り口では各学院の教師達がいた。

「どうやらノウフォンとヴォイドは付き合って始めたようで、イチャしている。」

魔獣車から全員降りたあと各学院の教師と共に帰るところとなる。「一ネリアはヴォイドのもとへ歩いていく。」

ミレイナは追いかけようとしたが、シルフィードの声をかけられ立ち止まった。

「ミレイナ、必ず呪いを解く方法を見つけてやるからな」

「ありがとうございます。……またね」

「ああ」

ミレイナが去るのをシルフィードがじっと見つめていると、ノウフォンがニヤニヤしながらやってきた。

「もしかして彼女ですか？」

「いいえ……先生こそ楽しげに話していた男性とせどりんな？」

「ヴォイド君ですか。結婚を前提に付き合ってくれ、と言われました」

「……良かつたですね」

2人は学院マジックゲートに戻りうつしたが、バアルに呼び止められ魔術協会会長室に案内された。

「私は魔術協会会長ルキフグス・ロフォカルだ。君が、シルフィード・マグナス君……とその教師だね」

「は、はい。何でしょうか?」

ノウフォンは緊張しながらたずねる。

「シルフィード君の父親であるグノムス・マグナスが討伐任務中に行方知れずになった」

「と、父さんが……」

それと、と言つてルキフグスは言いにくそうに言葉を続ける。

「君の姉であるワインディーネ・マグナスが行方不明になつたと学院から連絡があつた」

「な……母さんはこのことを……」

「ああ、知つてゐる。……残念だが何の手掛かりもない以上、もう」

「そ、そんな……」

シルフィードは声を震わせている。

「グノムスの件は我々の責任だ。ワインディングのことも……」

すまなかつた、と言つてルキフグスは頭を下げる。

シルフィードはふらふらとマジックゲートに向かつて歩いていた。ノウフォンは心配そうに見つめている。

「……それじゃ、俺は部屋に戻ります」

「わ、わかりました」

シルフィードが久しづびりに部屋に入る。部屋は出発前と変わらぬ状態だつた。シルフィードはベットに横たわる。

「……姉貴、父さん」

父親のことは仕事上覚悟はしていた。だが、まさか学院にいるワインディングが行方不明になるとは思わなかつた。

しばらく横になつていると、シルフィードはいつの間にか眠つていた。

・・学院内図書館・・

アイリとセレーナはワインディングを探していたが、手掛かりは少しも見つからなかつた。

「アイリ、シルが戻ってきたらしくよ」

「本当? ショックだらうね」

「うそ。 ウインだけでもシルバーのこ、お父さんまで行方不明なんて

.....」

「 私、マグナス君に会つてくる」

「あ、ちゅうと」

セーナが止めよつとしたがアイリは行ってしまった。

「 - 男子寮 - 」

アイリはシルフィードの部屋の前に来ると、ノックせずに中に入った。

「 おかげり! マグナス君 寝てる」

ベットの上ではシルフィードがすやすやと眠っていた。

「 マグナス君の寝顔、よく見ると何だか可愛いな」

アイリはシルフィードの横に座る。シルフィードの寝顔を見つめるアイリは欠伸をした。

「 私も 少し寝ようかな」

アイリもシルフィードと同じくベッドに横になると、すぐこ
眠りについた。

窓から差し込む夕日に顔が照らし出され、シルフィードは起きた。

「……ここの間にか眠つていたよつだな。……ん」

シルフィードは隣で寝ているアイリを見ると、じょじょく動きが止まつた。田をゴシゴシとこすり、再び隣を見たが何も変化はなかつた。

「な、何でアイリが俺の部屋に留まるんだー。」

「ん……あ、おはよー」

「おはよー、じゃなーー。何で寝ているんだよ」

「あ……」、「あは。つこ……」

「つこつて……まあ、いい。久しぶりだな」

「……うん、おかえり」

「……ただいま」

「えつと……ワインのこと聞いた?」

「……あ。俺がついていれば行方不明にならなかつたかもしけない」

「それを言つなら、そもそもの原因は私だよ。私が学院内で魔法なんか使つから」

「……そんなことはない。さて、今から夕食だら？ 一緒に」「うん」

学院内の食堂は休業中でも開いている。ちなみに職員達は交代で休みを取ることになつてゐる。

食堂に来た2人はカウンターで学食を受け取り適当な席に座つた。

「あ、あの……」

「決めたんだ」

「……え？」

「必ず姉貴を見つけてやるつて……」

「……うん」

「居なくなつて気づいたんだ。俺、姉貴が……ワインディーネが異性として好きなんだつてことに」

シルフィードの言葉にアイリの表情は暗くなる。自分が好きな人が、目の前で自分以外の名前を、好きな人だと言つた。
「見つけて、自分の気持ちを伝えるんだ」

「そりなんだ……見つかると良いね」

「ああ」

満面の笑みを浮かべるシルフィードをアイリは見る。」
田をそらす。

「……どうかしたか?」

「な、何でもないよ」

「……なにこいナビ」

二つの間にか食べ終えたシルフィードを見て、アイリも慌てて食べ。その様子をシルフィードは苦笑いしながら見ていた。

夕食後、シルフィードはアイリを女子寮までおへつたあと、自分の部屋へと帰るため男子寮に向かった。

「お、シル。久しぶり!」

「ん、リーチとリサーバか」

「ああ、本来なら一学期が始まる前々日に帰るつもりだったがな……リサーバがセレーナに早く会いたいと……」

「……以前は嫌っていたのにな」

「まあ、そう言つなつて……。」
「お、お土産」

リサーバは手に提げていた紙袋からお菓子の箱を取り出し、シルフィードに渡した。

「お、あつがとつ。……お菓子か?」

「俺達の街で人気のクッキーだ。学生が買うお土産の中で一番人気なんだ」

ちなみに他の街では売られてないからな、とリー・チは補足する。

「しつかり味わつて食べるよ」

「ああ。それで、今からセーラーに会いに行つてくる」

リサーハはリーチに紙袋を渡し、女子寮に向かって走り出した。

「おい、リサー、バああ！」

「……お前も大変だな」

女子察

セレーナの部屋の前に来たリサーバはいきなり扉を開けた。

「 よねー やーー なへ 」

「ば、課題一、ノックづくりこしりょく一。」

部屋では、セレーナと同室のプルム・メルビィーゴが寝巻きに着替えていた。

「す、すまない」

リサーバは慌てて部屋を出た。しばらく待つていると、入れと言
われて中に入った。

「……で、何のようだよ

プルムはかなり不機嫌な様子でリサーバを睨みつける。

「えっと……セレーナは？」

「シャワーだよ」

各部屋にシャワー室とトイレが設置されている。浴場はクラス毎
にはじれる日が決まっている。

「あ、ならしじまへいりで待つてる」

「……なら、俺は寝るから」

プルムの一人称は俺だ。言葉遣いもあまり女っぽくない。

「そうだ、これお土産」

リサーバは地元のクッキーをプルムに渡そうとする。

「……クッキーか？ こんなんで俺の機嫌でも直るとでも

「ん、要らないのか。残念だ」

「ち、ちょっと待て。要らないとは言つてないだろー」

「……欲しい？」

「う……うん」

顔を真っ赤にしながらブルムはクッキーを受け取る。

「あれ？ ブルムー、誰か来てるの？」

シャワー室からセレーナの声がする。

「あ、ああ。ちゃんと服来て出て来いよ」

「わかったー」

しばらくするとシャワー室の扉が開いて寝巻きを着たセレーナが出てきた。

「あ、リサーバ。帰つてきてたの？」

リサーバを見たセレーナは嬉しそうに微笑んだ。

「ああ、これ地元のクッキーなんだ」

「へえ、ありがと」

「あと……」

リサーバは腕時計を取り出しほうとセレーナに渡す。

「何が良いのかわからなかつたから腕時計を選んだんだけど……」

「ありがとう。……嬉しい」

セレーナは顔を赤くしてリサーバを見つめる。

「あ、あのさ、俺先に寝るから……聞いてないな」

プルムはため息をつき、ベッドに入り寝始めるが、2人の会話でなかなか寝付けないでいた。

「あれ？ アイツもう寝るのか」

「プルムは夜早く寝てまだ空が暗い内に起きるんだ。……いつも起
こしてもうらつてる」

「へえ」

「感謝してるんだ。……いつもありがとうね」

感謝するなら寝かせて欲しいんだけど、と思しながらも言つたと
ができないプルムだった。

第17話（前書き）

* 注意事項 *

今回はかなり短いです。何を血迷つたかもう一つ小説を投稿します。そちらの方も読んでくださいと幸いです。

夏期休業が終わりを迎えるとしている頃、ディザ達は目的地である島についた。

「ヒジが……。凄いな、居るだけで魔力が体に流れ込んで来る」
この島は魔力で溢れている。ヒジの島に居るだけで魔力が上がりつていぐ。

その魔力を求め魔獸達が集まっている。魔獸達の魔力はSランクをも越えるものがほとんどだ。

「ヒジに居ればお頭みたいに強くなれるかも……」

海賊達はしばらくヒジに滞在するつもりだ。……まあ、ディザも海賊と一緒に行動するから強制的に残される。

ワインティーネは翼を生やして島から出る」とも可能だが……。

「……なんか化け物がいっぱいいる」

具体的に言えば、羽の生えたライオンとか、6メートルくらいの蠍とか、空とぶタコとか……。

「絶滅した魔獸や進化した魔獸だらうな……強いのは間違いない」

魔獸達はまだディザ達に気がついていない。ディザ達がここに来た目的は召喚術の練習をするためだったが、その前に自分の力を高

わるいことにした。

「これほどの場所なら……」

「どうしましたか？」

「予定変更だ。召喚術はやはり危険……ここで修行を行う」

「し、修行？」

「ああ、お前は自分の力を最大限に引き出せるように。俺は力を手に入れるためだ」

「いつして修行をすることにした」ティザ達だが、果たして無事に島から出られるのだろうか？

……そんな心配をしてるのはワインディーネだけなのだが。

魔法学院マジックゲート

夏期休業が終わり一学期となつた。一学期には学院祭がある。しばらくは学院祭の準備を行うことになつてゐる。

学院祭は2日で渡って行われる。初日は文化祭、2日目は体育祭だ。体育祭は純粋に身体能力を競うものだ。文化祭にはクラス対抗の「一トマソ」がある。

そして、シルフィードのクラスではトーナメントの出場者を決めていた。

「……では、出場者はシルフィード・マグナス君で」

「異議あり」

「意見がある時は手を挙げて下さい」

ノウフォンに言われ、シルフィードは手を挙げる。

「どうぞ、マグナス君」

「何で俺が……といつか候補が俺しか居ないんですか?」「シルク
クだからです」

「……わかりやすい返答、ありがとうございます」

「いえいえ」

・・食堂・・

「納得いかない」

「しようがねえだろ、Sランクなんだから」

シルフィードは回室のファイルと一緒に夕食を食べている。

「しかしながら、実力ならアシリだつてあるぜ」

「ああ、学年トップクラスの成績だつたな……」

「まったく、シルフィークになつて良いことねえな……さて、先に帰つてゐる」

「ん、わかつた」

シルフィークが食堂を出て男子寮に向かつていると、アイリが話しかけてきた。

「ねえ、今度の休みに買い物行くんだけビ……一緒に行かないかな？」

「今度か……わかつた」

「約束だよ。じゃあまた明日」

「ああ」

アイリが去つていいくのを見ていたあとシルフィークは男子寮に向かつた。

男子寮に行くと、リサーバが待ち伏せていた。

「シルフィーク・マグナス！ 僕はお前に勝つ

「……え？」

リサーバはシルフィークを指差してい。シルフィークは呆然としている。リサーバの兄のリーチはため息をついている。

「すまない、シル。コイツ、トーナメントに出るんだ」

詳しく述べとリサーバが出場者に選ばれた。セレーナが「優勝してね」と言つてリサーバは「お前のために優勝する」と、クラスのみんなの前で堂々と宣言したらしく。

「……辞退しようか?」

「それじゃ、意味がない」

ビシッと再びシルフィードを指差す。

「全力のお前を倒してこや、堂々と胸を張れる」

「お前。……ふ、いいだろう。全力でお前を潰す。……彼女に不甲斐ない姿を見せないようにな」

「ふん、わかつてゐや」

リサーバは2人に背を向け歩き出す。

「……中等部同士の戦いだからな、やつすがるなよ」

リーチが苦笑いしながら去つていった。

シルフィードはそのまま部屋にもどつた。

だいぶ変わつた……、とシルフィードは思つ。クラシックのJUNKと比べ話しかけてくる人が増えた。

Jの前なんて握手を求められた。この学院にはJUNKは他には

いない。Sランクになりそうな人はいるがあと一歩のところで届かないでいる。

まあ注目されてたのは前からだつたけど、ヒシリフイードは自嘲するように笑つた。

Sランクになって注目されて困ることもあった。行く先々で囲まれる。特に女子に……。

話しかけてくるだけなら良いのだが、本気で告白してくる人もいる。一学期になって1日に1人は告白してくるのだ。

中等部からだけではなく高等部の女子からも。驚いたのは初等部からも告白されたことだ。

さて、寝るか。シルフィードはベッドに入るとすぐに眠つた。

第1-8話（前書き）

* 注意事項 *

今回は会話が多く、自分でも何だかよくわからない話になります。
た。

今日は休日。シルフィードは女子寮の前でアイリが来るのを待っている。

しばらく待つているとアイリが出てきた。

「あ、ごめん。待たせたみたいで」

「大丈夫だ。さて、どこに行こうか？」

2人は学院を出てクロリアの街をウロウロしていた。良さそうな店を見つけたら入って商品を見てまた他の店を探す。その繰り返しだ。

「ねえ、たまには学食以外も美味しいね

「そうだな」

2人はレストランで食事をしていた。シルフィードがランクになり、その特典としてほとんどの店で無料となる。

本人だけでなく同行している友人も無料で利用できる。

「マグナス君はランクだから無料で食べれるね
でも街はあまり嫌だな」

「そう? ……今日はごめんね」

アイリはつづむにて囁く。シルフィードは首を傾げる

「何が？」

「もつすべ学院祭。トーナメントに出たのです」

「ああ。でも大丈夫だ」

「え？」

「俺は負けない。優勝するよ」

シルフィードはアイリを見つめ宣言する。

「たいした自信……でもマグナス君なら優勝しそうだな。頑張つて
ね」

「おう、お前に誓つよ」

アイリは少し顔を赤くする。アイリはシルフィードから目をそらし、しばらく何かを考えている様子を見せる。

何かを決意したようにシルフィードを見つめた。

「あ、あの、マグナス君」

「ん、何かな？」

「わ、わ、わ……私と付き合つてください……」

その声は店内に響き渡るくらいの音量だった。いつまでもなく店内にいるほとんどの人の注目をアイリは浴びる。

それに気づいたアイリは顔を真っ赤にして体を縮こまらせる。その表情は恥ずかしさからか今にも泣きそうだった。

「……なんで俺なんだ？」

「ま、前から好きだつたんだけど……マグナス君がワインのことが好きって言つた時、嫌な気分になつて……それで……」

「……」

「ワインが居ない今いつのも卑怯だと思つたび……考えてくれないかな？」

「……わかつた、考えておく

「つ、うん……」

その後2人は口数が少ないまま店を出た。

「あ、あの……次はどこに行ひつか？」

さつき食べたのは昼食なので、まだまだ時間はある。

「……どいつもこよ」

「わ、わかつた」

先ほどの虹色の影響だろうが、アイリが話しかけてもシルフィードは素っ気なく答え、話が続かない。

「そ、そりこえぱ王室はいづだつた？」

「ん、楽しかつたよ。今宿もあつたし同年代のクラシック達と友達にもなれた」

「くえ、いいなあ」

「……あと王子と友達になつた

「お、王子ー」

「ああ、国王の息子。同い年だつた」

「く、くえ。王子と友達なんて凄いな

「まあな……で、どこに行くんだ？ そのままだと学院に戻つてしまつが」

「あ……ま、マグナス君が行きたいことあるんで」

「いや、ないな。あまり街は好きじやないから

「な、なら帰るつか」

「せうだな」

アイリは若干落ち込みながら先を歩くシルフィードを追いかけた。

学院に戻った2人はそれぞれの部屋に戻った。

シルフィードが部屋に戻るとベッドの上にファイルが寝転がっていた。

「よお、デートはどうだった?」

「デート? ただ単にアイリと昼食を食べに行つただけだろ」

「それをデートと言わず何といつ…… そんなことより、3年のフレイル先輩も行方不明だ」

「同時期に2人もか……」

「ああ…… それとキースがリトリッジでワインと会つたらしい」

「何! 姉貴がリトリッジに……」

「だが、会つたのはその時だけらしい」

「それと、ヒフィルは付け加える。

「テスラがコーラルでワインを見かけたそうだ」「こ、コーラルだと!」

「ああ、教会の近くで誰かを待つていたらしい」

「1人じゃないのか…… もしかして」

「ああ、俺はフレイル先輩だと思つていい」

「しかし、何故」「

「それは知らん。だが、理由もなくワインがこんなことをするとほ
限らない。何か、理由があるはずだ」

「わづ、だな。……まあ、生きていればまた、会えるだろ」

「ああ……で、アイリ・シグニッシュはびいづるんだ? 告白され
たんだる」

「なぜ、それを知ってるんだ」

「ふん、俺を誰だと思ってる。学院の事で知らないことはないんだ」

「わづだつたな、情報屋のお前が学院内でも知らない情報はないな」

「どうやって情報を手に入れたのか疑問に思いながらも、それが情
報屋だと思つことにして納得した。

「で、どうなんだ?」

「……俺は、ワインが好きだ。この想いは変わらない」

「そうか、なら……」

「だが、付き合つてみると、俺が知らなかつたアイリの良さが見
つかるかもしれない」

「……つき合つてみだな」

「ああ

フィルは呆れたようにため息をついた。

第19話（前書き）

* 注意事項 *

久しぶりに更新。楽しんで貰えたら幸いですが相変わらずの駄文
+ 短い。読んでいただけることに感謝です。

シルフィードとアイリが付き合つてになって数日、文化祭の朝を迎えた。

クラス対抗トーナメントは等部毎に行われる。シルフィード達中等部のトーナメントが行われるのは食堂横コート。

ちなみに、初等部は体育館裏コート、高等部はグランド、上等部は校舎屋上特設会場で行われる。

「シル君、頑張つて！」

「ああ、優勝していく！」

シルフィードと付き合つて始めてアイリはシルフィードの呼び方をマグナス君からシル君に変えた。

「……ふん、初戦からシルが相手だとはな

コートの向かい側にはリサーバが立つていた。

「リサーバ！ マグナスなんてボコボコしちゃえ！」

「もちろんだ！」

「シル君！ リサーバ君なんかねじ伏せて！」

「あ、ああ

対決開始の合図がなり、2人はお互いを睨みつける。

「行くぜ！」

リサーバはシルフィードにむかって火の玉を撃つ。シルフィードはそれを避けリサーバに蹴りを放つ。

「つ！……はあ！」

リサーバはシルフィードに攻撃を放つがシルフィードは軽々と避け続ける。

「……行くぞ。炎拳！」

「ゴウウ……ドガアアアツ！」

シルフィードは自身の手に炎を纏わせリサーバを殴つた。リサーバは受け止めきれず、後方に吹き飛ばされ気絶した。

『勝者、シルフィード・マグナス！』

審判が気絶したリサーバを見て高らかに勝者の名前を告げた。

「リサーバア！」

すぐさまセレーナはリサーバに近寄り心配そうに抱きついた。

「……俺の勝ちだな」

「一トから出てシルフィードはアイリに近づいた。

「ねえ、さつきのは魔法?」

「ああ、まあそうだな。……父さんから教えてもらつた。魔法よりも武術に近いかな」

「へえ……で、次の試合はこつだつナ?」

「一回戦が全て終わつた後……以外と早いな」

中等部トーナメントは全11試合……各学年の1位が決まつたあと、1、2年が戦い、その勝者と3年が戦う。

「あ、あのを……トーナメントが終わつたら一緒にお店まわる?」「文化祭には学生が催した店がたくさんある。トーナメントだけではなくお店を担当して文化祭に来る一般人も多い。」

「ああ、良いぞ」

「……楽しそうね」

「せ、セレーナ」

アイリの視線の先では彼氏を見事なまでに打ちのめされふくれつ面のセレーナが2人を睨みつけていた。

「やつぱりアンタムカつく! 来年は必ずリサーバが勝つか!」

セレーナは不機嫌な雰囲気を漂わせ去つていった。ちなみにリサ

一バは医務室に運ばれている。

その後、ほぼ一瞬でシルフィードは試合を終わらせて行き中等部1年1位となつた。次は2年と勝負になりシルフィードはコートに入つた。

「シランクといえど1年、俺様の敵ではない！」

「先輩、そのセリフは死亡フラグだと思いますよ」

「ほつ、後輩の癖に生意氣だな」

対決の合図が鳴り、シルフィードは一気に間合いを詰める。

「……雷拳！」

『ビリビリッ……ドゴオオッ！

電気を纏わせた拳が2年代表にたたきつけられ、2年代表はその場に倒れ込む。

『勝者、シルフィード・マグナス！』

審判が勝者の名前を告げたあと、2年代表が医務室に運ばれ3年代表が入ってきた。

「2年を倒すとは今年の1年はなかなかだね。さすがシランク」

「ありがとうございます」

「僕の名前はアーク・アルシェル。お手柔らかに頼むよ」

「生憎、先輩方に遠慮をする気持ちはありません」

対決の合図が鳴り、シルフィードが先に動き出す。

「炎拳！」

「オ……パシッ！」

「な！」

シルフィードの拳をアークは左手で掻む。

「ふむ、熱いね」

「くつ！」

シルフィードはアークの手を振りほどき聞合いを取る。

「次は……僕の番だね」

アークは脚を振り上げる。

「……炎脚！」

「オオツ！」

アークの振り上げられた右足が炎に包まる。

「破！」

ドガアアアアツ！

振り下ろされた脚がシルフィードにぶつけられ、シルフィードは後ろに吹き飛ばされる。

「ぐつ……」

シルフィードは地面に叩きつけられ氣絶した。

『勝者アーク・アルシェル！ よつて中等部トーナメント優勝はアーク・アルシェル！』

コートの周りから歓声が上がる。シルフィードは医務室に運ばれ医務室のベッドに寝かされた。しばらくしてシルフィードが目を覚まし、周りを見渡すとトーナメントで氣絶した者達が寝かされていてその近くには友達や恋人がいた。

「シル君、目が覚めたみたいだね」

「……負けたんだな」

「うん。でも凄いよ2年生に勝ったんだし」

「……もう、夕方だな。ゴメンな、いろいろ見れなくて」

「大丈夫だよ。明日は体育祭だけど身体は良いの？ 痛まない？」

「少し痛むが大丈夫だ。心配してくれてありがとう」

「そ、そりゃシル君のこと好きだから心配するよ」

互いに顔が赤く染まりつつむいた。その顔は微笑んでいて、ビニとなく嬉しそうだ。

「はあ、見せつけてくれるわね」

「あ、セレーナ」

「ん、リサーバはもう大丈夫なのか?」

「おかげさまで元氣だ」

リサーバはセレーナと手を握つてシルフィードに近づいた。

「2人もなかなか熱々かな?」

「アイリ達ほどではないよ」

「シル、今から夕食を食べに行くがお前はまだいる」

「ん、俺達も行こうか」

「そうだね」

シルフィード達4人は医務室を出て食堂で夕食を食べた。寮の自分の部屋にもどったシルフィードはすぐさまベッドに入った。

「お、今日はお疲れだな」

「ああ、フィル。今日はゆっくり休ませてくれ」

「了解」

フィルは部屋の電気を消し、シルフィードと同じく自分のベッドに潜り込んだ。

第20話（前書き）

* 注意事項 *

駄文なことは変わりず……。気ままに書いてますがそれでも良い方は読んでください。読んでくださる方に感謝です。

学院祭2日目体育祭。学生が催す店はないが、業者などにより数店あった。体育祭は学院初等部から上等部まで各クラス5人代表をえらび1チーム80人の4チームで行つ。代表は各クラスのランクが高い者から選ばれる。ちなみにチームは1組だつたらチーム1となり、クラスとチームは対応している。

シルフィードは2組で勿論代表に選ばれている。他にもアイリ、レイル、カシア、フィルがいる。

「おや、昨日ぶりだねラランク君」

「アルシェル先輩、一緒にチームなんですね」

「みたいだね。僕のことはアークって呼んで良いよ。……身体の調子はどうだい？」

「大丈夫です」

グラウンド後方、選手待機席は和やかな雰囲気に包まれていた……。

「はっはっは！ 今日はお前に勝つ！」

リサーバが高笑いしながらシルフィードを指さしているが誰もそれをみようとしない。ちなみにリサーバは3組でリーチも代表だ。キースは4組の代表だ。ちなみに4組の代表にはプルムもいた。

中等部代表として選ばれているのは最低でもラランク…… 中等部

卒業時規定ランク以上の者達だ。

「ふ、また会つたな1年。昨日は油断したが今回は負けない」

「……誰だつけ？」

「昨日、お前に瞬殺されたイドリア・マケインだ！」

「……やつこや名前知らなかつた」

「つたく、面倒くさい」

キースは欠伸をしながらため息をついた。

「キース君、面倒くさいって何かな！」

「いや、何でもないつす負け犬先輩」

「マケインだから！ 贠け犬じゃないから！」

「負け犬もマケインも大して変わらないつしょ……同じチームだから足引っ張らんぐださいね」

「……今年の1年どもは何で」

イドリアは嘆いていたが中等部はもちろん他の代表にも完全に無視されていた。

「な、なあユナイゼル。俺Dランクになつたばかり何だけど……」

「あ、？ ちょうど5人しかD以上がいなかつた肩クラスだからし

やあねえ

「ぐ、肩つて……。ユナイゼルが一番肩じや……」

「何、喧嘩売つてんの？ 買つちやうよ俺」

シルフィード、フィル、リーチ、リサーバ、テスラ、キースの6人は学院の教師から問題児達の集まりだの肩の集まりだと言われてきた。

それは生活態度や授業態度の悪さからだが、ランクは平均以上、シルフィードに至つてはSランクだ。教師達も少しずつ見方を変えつつある。……キース以外。

キースは授業を平気でサボることはもちろん、喧嘩も頻繁にする。場合によってはその喧嘩で相手が病院送りにされる。

それ故、クラスどころか学院内の生徒でキースに話しかける者はほとんどいない。だが、学院内の誰もがキースの名前を知つていても顔までは知らないこともある。キースとは知らず話しかけて、名前を知つた途端おびえ始める。

ブルムは4組でキースに話しかける数少ない女子だ。

「け、喧嘩なんか売るわけねえだろ！」

「そもそも俺に話しかけるな

「別に良いだろ！ 同じクラスだし……」

キースは不機嫌そうに顔をしかめる。

「クラスだあ？ は、あんなの1年間だけのもんだろ。俺はお友達
『』にする気はねえ」

「だ、だけど来年同じクラスになるかもしれないだろ」

「同じクラスに居ないと話さないのか？ まあ、単なるクラスメー
トつてやつが気楽だよな」

「お、お前何言って……」

キースは何かを思い出したよつた顔をしてブルムを見る。

「そついやお前、俺を肩だと言つたが肩に負けるよつたお前はそれ
以下だよな」

「な！」

「そつだな……肩以下だから『』肩か？ それとも塵か？ なあ、
何が良い」

「知るか！」

ブルムはキースから距離を取ろうとする……が、その様子を見た
キースがニヤリと笑う。

「何だ、機嫌悪くなつちまつたか？ 尻尾巻いて逃げんのか？」

「そんなんじやねえ！」

プルムは再びキースに近づいた。2人の口論はかなりの音量だったが、周りのほとんどの生徒は見て見ぬ振りをしている。初等部に至っては泣きそうな生徒もいる。

「しかし面倒くさいよな、体育祭なんて……なあお前、何か問題起こせ」

「は、はあ！ 問題なんて起こしたら処罰対象だろ……それに噂じやかなりキツい処罰もあるって」

「何だ、怖いのか？」

「お前は怖くないのかよ！」

「全然。そのキツい処罰っての知りたくないか？」

「お、お前本気か？」

「ああ、安心しろ。しつかり巻き込んでやる」

「あ、安心出来るか！ まず、何をするつもりだ」

プルムに聞かれた瞬間、キースは待つてましたと言わんばかりに微笑む。

「いりするんだよ！」

キースはいきなりプルムに炎を放つ。プルムは反射的に水を放ち炎を防ぐ。

「な、何するんだよ！」

「く、くくく……はははははは！ 使ったよな、お前魔法使つたよなあー！」

「あ……」

そう、学院内での魔法使用は授業以外は禁止。処罰対象だ。

「それに、今日は体育祭で一般人も大勢……。そんな中で校則を破るなんて普通の処罰じゃすまねえよなー！」

キースの言葉にブルムは真っ青になる。それに対してキースは愉快そうに笑っている。周囲にいた生徒は2人から離れていた。周囲の生徒が離れたのはキースが魔法を使用する直前だった。何かが起きると感じた生徒達が巻き込まれまいとすぐさま距離を取ったのだ。教師達からは2人が魔法を使う瞬間がはっきり見えていた。それは他の人達も一緒だ。

「なあ、キツい処罰を確定的にするには……もつと騒ぎを大きくする必要があるよな」

「も、もう止めろー！」

ブルムの叫びを無視してキースは魔法を使う。

「ゴオオオッ！」

キースの周りから炎が吹き出し炎柱が出来る。

「さあプルムウ、お前も魔法を……」

ドガアアアア！

雷がキースがいた場所に落ちてくる。キースは素早く避ける。キースがその場を離れたことで炎は消える。

「貴様ア！ 俺とシルの勝負が出来なくなつたらどう責任とるんだあ！」

キースが雷を放つた主……リサーバを睨みつけた。リサーバの近くにいたリーチはブツブツ眩きながら頭を抱えていた。

「お前がUランクに勝てるワケねえだろ、現実見ろやあ！」

「潰す！ シルを潰す前にキース、お前潰す！」

「やるのか？ 殺るつてかあ！ いいぜえ、俺の本気……見せてやるよおおお！」

キースが叫び再び炎が吹き出てリサーバに向かっていく。リサーバはそれに目掛けて雷を放つ。

「「ウオオオオオッ！」」

ズガアアアッ！

2つがぶつかり合い、周りに衝撃が伝わりグラウンドの砂が舞い上がる。その砂埃は周りの者の視界を完全に防いだ。

砂埃が晴れた後、そこには後頭部を踏みつけられ頭が地面にめり込んでいるリサーバと踏みつけているアーク、腹を殴られうずくまるキースと殴ったシルフィードだった。

「馬鹿共が……」

その光景を見てリーチは頭を抱えてグランドの片隅にうずくまっていた。他の者達が呆然としていたのは言うまでもない。

第21話（前書き）

* 注意事項 *

短め、駄文、閲覧注意！

シルフィード、キース、リサーバ、アーク、プルムは学院長室に呼び出されていた。体育祭はあの後中止……その原因である5人は学院長室で1人を除いて平然としている。

「さて、呼び出されていた理由はわかるだろ？」「

「ちょっと待ってください。アークと俺は魔法を使っています。それに、俺達が止めなければ被害はもつと……」

「わかっている。まあ、話を聞け」

シルフィードは抗議するが学院長の言葉で黙つた。

「我々が確認した魔法使用者は3人……間違いはあるか？」

「ない」

「その通り」

「う、ごめんなさい！」

上からリサーバ、キース、プルムだ。

「無論君達3人には処罰を受けてもらう。シルフィード・マグナス、アーク・アルシェル……君達は魔法を使わず己の武術のみで2人を止めたのは誉めるべきことだが、教師達の前で暴力行為はいただけない」

シルフィードとアークはその言葉で納得した。

「シルフィード・マグナスとアーク・アルシェルは厳重注意……といいたいところだが、教師だけではなく一般人も居たわけだ。まあ、3人ほど厳しい処罰ではなかろうがそれなりに厳しい処罰だ」

学院長は机上の書類に目を移す。しばらくして学院長は顔を上げ5人を眺める。

「それでは処罰の内容だが……」

マジックゲート時計台

マジックゲートには時計台があり、学院敷地内のどこからも見えるように校舎よりも高く作られている。その屋根から2人の生徒が逆さ吊り下げられていた。

「なあ、こういう処罰つてどうなんだ?」

「問題無いんじゃないかな。どうやら見えないよつに認識阻害の結界が張られているみたいだし」

シルフィードとアークは処罰として時計台の屋根から半日逆さに吊り下げられている。学院祭の振り替え休日である今日はほとんど生徒は街に出掛けていて見られる可能性も低いが更に認識阻害されている。

「……頭に血が上るね、これ」

「だな……。一人で吊り下げられていたら精神が壊れそうだな」「ん、壊れるほどではないと思つけど高い所が嫌になつちやうね」

「それにしても、こんな時に呑氣に話せる俺達つて……」

「うん、変わつていろよ」

マジックゲート地下

キース、リサーバ、プルムの3人は学院の地下に閉じこめられていた。

「学院に地下があつたなんて……」

「ん、あそこには貼り紙があるが、どうやらこりは迷宮らしく」

「迷宮?」

「ああ、迷宮から出れば解放……出る」とが出来なければ一生をまよい続け屍となる

「そ、そんな……。いくら何でもしづらくなつたら助けてくれるはず」

「そつこや迷宮こは魔獸が放たれているらしいな」

「ま、魔獸！」

「ファイルが言つてたからな」

「ん、ファイルが言つなら本当なんだな」

キースとリサーバは呑気に話しているがプルムはガタガタ震えて
いる。

「な、何で？ 魔法を使つたけどここまで重い処罰つて……」

「十中八九俺のおかげだな。感謝しな」

「黙れキース。サッサと抜け出して外に出るぞ。俺はセレーナとイ
チャイチャイしないといけないからな」

「勝手に言つてろ」

「い、こんな奴らのせいだ俺は……」

「「何か言つたかプルムウ」」

「い、言つてません」

3人は出口を探すために迷宮を歩き出した。

「しかし、迷宮行きとはねえ……伝説の魔術師がそんなことをせる
なんて」

マジックゲート学院長室

「伝説か……伝説と言つても中学生でSランクになり魔術協会の手伝いをしていただけだよ」

「謙遜すんなよ。……迷宮にミノタウロスを放つた。ただのミノタウロスじやない。俺達が異世界の技術を使って作ったミノタウロスだ」

「構わない。迷宮行きの奴らは何処にでもゴロゴロいる普通の魔術師。時計台の2人はかなりの実力がある」

「邪魔される可能性があるから時計台に吊り下げたんだな」

「ああ、人工魔獣の性能テストだからな。失敗するとかなりの損失になる」

「だがよ、迷宮行きの3人にミノタウロスを殺されることはないのか」

「あるわけないだろ、彼らは……落ちこぼれだからな」

第22話（前書き）

注意事項

久しぶりの更新です。相変わらずの駄文。

「108、109、110……」

「せりきから何してんのだ？」

「腹筋」

シルフィードとアークが吊り下げられて数時間。いきなりアークが腹筋をし始めた。

「こんなとこりでよく出来るな」

「いりしないとか、血が上るんだよ」

「分かるナビ……」

「こつまでこのままだらうね……」

「やつ少しジヤないですか？」

地下迷宮

リサーバ、キース、プルムの3人は迷宮内の通路を走っていた。

「聞いてない！ 何でこんな化け物がいるんだよー。」

「あ、？ あれだ、迷宮つていえぱミノタウロスじやねえか！」

3人の背後には顔は牛で体はムキムキの大型の化け物……ミノタウロスが凄まじい勢いで迫りかけていた。

「で、でも……ミノタウロスが翼なんか生やしてるわけねえだろおお！」

そのミノタウロスの背には立派な翼が生えて飛んでいた。

「速え！ あの牛速過ぎる！」

「リサーバ、あの牛に突っ込め！」

「死ぬだろ普通！」

「大丈夫、ミノタウロスの手を見てみろ！ どでかいハンマーしか持つてねえじやねえか」

「潰される、絶対にペシャンコにされるから！」

男子2人は体力があるのだが、プルムは少しずつ2人から遅れ始め、ミノタウロスが迫ってきてた。

「き、キース！ 助けてええ！」

「自分で何とかしやがれ！ クソ女」

「薄情者！ 鬼！ 悪魔！ 人間のクズ！」

「薄情者で結構、鬼で結構、クズで結構……だが悪魔は取り消せええ！」

キースはクルリと振り返り手をプルムに突き出した。

「ボオオオツ！」

「ち、ちょっと！」

「ファイヤアアー！」

「キ、キヤー！」

キースは特大サイズの火の玉をプルムに向けて放った。プルムは何かに躊躇顔面から床に突っ込んだ。倒れ込んだプルムの上を火の玉が通り過ぎる。

「グオオオツ！」

火の玉はミノタウロスに当たりミノタウロスは炎に包まれた。リサーバは口を開けて呆然と、プルムは涙目で、キースは顔をしかめ、その様子をみていた。

「外したか……」

「ほ、本気で俺に当てる気だつたのかよ！」

残念そうに舌打ちしたキースにプルムはツッコミを入れた。

「お、おい。まだ動いているぞ」

炎に包まれたミノタウロスは翼を焼け落としても、侵入者を排除

ショットハンマーを引きずりゅつくりと3人に近づいている。

「ははは、ステーキにしてやるぜえー。」

「オオオオッ！」

キースはミノタウロスに向けて炎を放つ。キースの手のひら上で魔力が構成され発生した炎はとどまることなくミノタウロスに降り注ぐ。

「ボン！」

「……つかはー！」

炎の中からハンマーが飛び出しキースの腹に直撃する。キースは壁に叩きつけられ氣絶した。

「ブモオオッ！」

ミノタウロスは氣絶しているキースに向かって突進していく。

「ぐ、油断しやがつて……喰らえー！」

「バシユツ！」

リサーバはミノタウロスに電撃を放つ。ミノタウロスは動きを止めリサーバを見る。そして攻撃対象をリサーバに変更する。

「い、コイツ、電撃も効かねえのか！」

「ブモオオオオツ！」

「ぐつ……」

リサーバはミノタウロスを突進を受け壁にめり込み氣絶する。ミノタウロスは振り返り最後の標的に狙いを定める。

「い、いや……こ、来ないで……」

ブルムは立ち上がりずガタガタ震えることしかできない。

ミノタウロスはゆっくりと確実にブルムに近づいている。

ドゴオ！

突然、炎に包まれたハンマーがミノタウロスに向かつて飛んできた。ブルムは恐る恐るハンマーが飛んできた方向を見る。

「き、キース！」

「ムカつく……。化け物が、俺様にたてつけなど、マジ、ムカつくんですけどおお！」

ミノタウロスの足下から炎が床を突き破つて吹き出す。さらに両方の手のひらに魔力を集中させ炎をミノタウロスに向かつて放つ。

「死ねよ、化け物！」

「グオオオオツ？」

「ヤケロヤケロヤケロヤケロヤケロヤケロ……焼け死ね！」

炎が赤から徐々に黒くなつていいく。漆黒の炎はミノタウロスを覆う。しばらく炎は燃え続け、そこに残つたのは灰だけだった。キスはその場にうつむいて立つていた。

「キース？」

ブルムはおとるおとるキースの顔をのぞき込む。

「……なんだよ」

「『』、『』、『』メン。……わつきの炎つて何だ？」

「……誰にも言わないか？」

「あ、ああ」

「もし、誰かに言つたら殺すぞ」

「ひつ……や、やつぱり教えなくつていい」

「ふん」

キースはブルムから離れ壁にめり込んでいるリサーバを引き剥がす。

「起きろ、馬鹿」

「あ、あれ？ 牛はどうだ？」

「燃やした……灰だけしか残つてない」

「……そうか」

3人は迷宮を歩き、ようやく出口を見つけて外に出た時は、もう日が暮れていた。

「……食堂に行くか」

学院長室

「……驚いたな。まさかミノタウロスが

「あのミノタウロスはSランクでも倒すのが難しい……何者だ」

「……要観察だな」

ちなみにシルフィードとアークは3人が迷宮を出た1時間前に解放されていた。

第23話（前書き）

* 注意事項 *

馱文。思つがまま書いてます。趣味で書いてます。

シルフィード達の処罰からしばらく、季節は秋から冬へと変わつていく。学院祭が終わりいつも通りの毎日が続く。体育祭の一件でキース、リサーバ、プルムの学院内の評判は最悪のものとなる。

3人を止めるような形になつたシルフィードとアークは逆に評判は良くなる。2人が止めなかつたら被害が広がつていただろうと周りが思ったからだ。

「な、なあセレーナ、アイリ」

アイリ、セレーナ、プルムは食堂で昼食をとつていた。周りにいる生徒はひそひそと3人を見て話している。

「ん、どうしたの？」

「お、俺と一緒にいたら悪い評判たつぞ？ だから、な

「気にしないよ、私たちは。……そもそもセレーナはリサーバとつきあつてるし、私はシルフィードとつきあつてるから」

「……シルフィードは評判良いじゃん」

「でもシルフィードはリサーバやキースとも友達だよ

「だ、だけど……」

「プルムは私たちのこと嫌いなんだね……」

セレーナの悲しそうな表情にプルムは慌て始める。

「ち、違う！ 僕は2人のこと好きだけど、だからこそ……」

プルムがそういふとセレーナは若干頬を赤く染めプルムを見つめる。

「す、好き！ わ、私は女だし彼氏いるし……」

「……セレーナ、今大事な話しているから

「……」めん

「そ、そういう意味の好きじゃないからな！ ……ちょっと止めやつ
だけど」

プルムがそう言つと2人は驚いたような顔をして、少しプルムから距離を取る。

「「……え！」

「え、って！」めん、[冗談だから]

「えー！」

今度は残念そうにため息をつく。

「な、どんな反応すれば良いんだよ」

「プルムはプルムで良いんだよ」

「……アイリ」

「男が好きでも女が好きでもプルムはずっと大切な友達だよ」

「あ、ありがと……だけど、誤解しないでぇー。」

何だか話がズレてきたと思うプルムだが、こいつのがずっと続いて欲しいと思いながら誤解を解こうと必死だった。

2人はもちろん冗談のつもりでプルムをいじっては楽しんでいるのだが、プルムはそれを知る由はない。

3人から離れていて見えないとこでシルフィード、キース、リサ一バが昼食を取っていた。周りにいる生徒は視線を合わせないようにしていそいそと食べている。

「……プルムにバレちまつたな」

「ん、黒炎のことか」

「ああ、忌々しい悪魔の炎だ」

「忌々しい……か」

「……プルムのことばぞうする」

シルフィードに聞かれてキースは料理を食べる手を止め考える。

「炎のこととは教えてないし、一応脅しておくれ」

「……どんな風に？」

「あの炎は誰にも言ひつな、爪をはぎ取られ耳を引きちぎられ目をつぶされて良いのなら別だが……はどうだ？」

「うん、食事中に聞くセリフじゃないことはわかった」

リサーバは顔を若干青くしている。シルフィードは何かを考えるよつな素振りをしてキースを見る。

「田は潰すよりえぐり取る方が良いだろ、あと皮膚も剥がせばビーツだ？」

「それ良いな」

「……お前ら」

リサーバは呆れたように咳くが、2人の会話は止まらない。指を潰すや一本ずつ切り取るなど、他にも口に出すのもばかられるグロいことをためらいなく話している。

2人の会話を聞いた近くの生徒は顔を青くしている。中には料理を吐きそうにしている生徒もいて、女子にいたつては涙目……泣いている生徒もいる。

ちなみにシルフィードとキースはわざと近くに聞こえるくらいの大きさで話している。気持ち悪くなつて立ち去りうとする者はキー

スに睨みつかれて恐怖により動けなくなる。

「……そろそろ昼休み終わるぞ」

「ん、もつそんな時間か……周りがまだ食べているから気がつかなかつた」

「ああ。それにしても、みんな具合悪そうだな」

……お前らのせいだろ。

心の中でリサーバはそう叫んだ。

午後からの授業で具合が悪く保健室に行く者が多かつた。不思議に思いながらもキースは授業を受けていた。

午後の授業が全て終わり、キースの近くの席の生徒が急いで教室から立ち去る。キースはブルムの席に向かう。

「あ、キース……」

「この間の炎のことは誰にも言つた。言つた時はじつとお前を痛めつけて殺すから」

「な、何をする気だよ」

ブルムは顔を青くしながら聞いた。

「まあ非人道的なのは間違いないぞ」

「わ、わかった。……なあキース」

「ん」

「なら、あの時の黒い炎のことを教えてくれないか?」

「駄目だ」

キースは即答した。

「あの時、誰にも言わないなら言つって……」

「いつまでも条件が一緒だと思つな」

「な、なら、条件は?」

「そうだな……俺の奴隸になれ! なんてな、ハハハ」

キースは愉快そうに笑いながら立ち去り去つとする。

「……奴隸になれば教えてくれるのか?」

「……ハア?」

キースがプルムを見る。プルムは真剣な顔をしてキースを見つめていた。2人以外は既に教室から去つていた。

「……本気か?」

「ああ、本気だ」

「何でそこまでして知りたい？」

「……俺はお前がいなかつたら死んでたと思つ。俺、お前の……キースのことをもっと知りたいんだ。お前が何を抱え込んでいるのか知らないけど、少しでもお前の支えになりたいんだ！」

「……何だか男らしいセリフじゃねえか」

「お、俺は女だ！」

「ははは……教えてやる。俺の過去から話すか……俺の両親は悪魔に殺された」

「あ、悪魔……」

「ああ。悪魔つてのは召還されない限り人間界には来ない。……呼び出したのは俺なんだ」

「な！」

プルムは目を見開いてキースを見る。キースの言葉はキースが親を殺したことになる。

「そう……俺が、俺が召還した悪魔で、両親を殺した」

「な、何で！」

キースはプルムに睨みつけられるがヘラヘラと笑っている。

「両親が……ヤツらが俺のことを化け物扱いしたからだ」

「……え？」

「俺は生まれた時から魔力が高かつた。そこまでは良いんだ……。俺の力はランクにどどまらなかつた」

「なつ」

「俺が力を発する度に広範囲が燃え周りからは化け物だの怪物だの……。挙げ句の果てに魔力だ。周りはもちろん親も俺を避け始めた……それで俺は本物の魔力を召還した」

「……それで、どうなつたんだ？」

「かなり上位の魔力だつたじじへ、町を燃やしおぐした

「そ、そんな……」

「その後がかなり愉快なんだ。魔力が俺を気に入つて……取り憑いているんだ」

「な！ ならあの炎は？」

「あれはもともと俺の力だ。……あと、どうやら俺と魔力は似たような魔力らしい。……で、説明終わり。お前、俺の奴隸になるんだな？」

キースはニヤニヤしながらプルムを見る。

「あ……約束、だからね」

「なら、俺には逆らうこと、『主人様と呼ぶこと……良いな?』

「ああ……』主人様」

「ん、口調も奴隸らしくな……はは」

「……わかりました」

「無論、人前でもだからな」

「……はい」

「良い返事だ……。夕飯食いに行くぞ」

「わかりました」

愉快そうに鼻歌を歌いながら前を行くキースをプルムは俯いてついて行く。その顔はつらそうだった。しかし、何かを耐えようとする顔じゃなく、誰かをどうにかしてあげたい……救つてあげたい、そんな表情だった。

第24話（前書き）

* 注意事項 *

やはり駄文。アイデアがあまり浮かばない……。

「……お前ってやつは」

「やつだな、俺も自分のことが理解出来ない」

「やつちまつたな」「やつまつたな」

キースは部屋に戻ったあと、同室のテスラに今日の出来事を話す。

プルムを奴隸？ にしたあと夕食を食べに食堂へ行く。今までにはなかつた組み合わせに皆の注目を浴び、さらにはプルムがキースを「ご主人様」と呼んだことでさらに周りから視線を受ける。

いつもプルムと一緒に食べているアイリとセレーナは離れたところに座りキースを睨みつけてくる。キースが睨めば慌てて目を逸らすのだが……。ちなみにシルフィードとリサーバは畠然としていた。

一緒に食べているだけならまだマシだったのだがプルムはキースに敬語、ご主人様と呼ぶので「キースがプルムに何かをした」と周りが思う。

間違いではないのだが、周りの反応が予想よりも大きくキースは少し後悔していた。

……奴隸になれじゃなく話しかけるな、ぐうにじとけば良かつた。

そう思つキースだが、すでに手遅れだ。

夕食後、部屋に戻るうとしたキースのあとをプルムがついて行こうとしたが、さすがに止め、と言つて自分の部屋に戻らせた。

「なあ、キース。きっと明日には噂が誇張されてから広まつてゐるんじゃないか?」

「だよなあ……。噂が広まる前に脅すか」

「誰をだよ」

「むつ……妙な噂をたてた奴は殺すつて貼り紙しつくか

「……勝手に貼り紙したら処罰対象だ」

「……よし、ファイルのところに行く

「……え、何で?」

キースはテスラとともにシルフイード達の部屋に向かう。すれ違う生徒がキースを見てコソコソと話していたが、キースが睨みながら壁を叩くと怯えてそそくさと立ち去る。たまに睨んでくる生徒もいるが、これまたキースが睨めば慌てて立ち去る。

「……そういうやブルムは意外と男子から人気なんだよな

「なら俺を睨んでくる男子は嫉妬つてか?」

「だらうな」

「あ、あ？ 面白くねえ」

キース達がシルフィードの部屋に入ると、シルフィード、フィル、リーチ、リサーバがいた。

「お、噂をすればなんとやうり…………」

「おい、フィル！ 俺の噂を教えてくれ」

「先輩をボコボコにして舍弟にした噂か？ 他にも、先輩の彼女を奪つたり、街の不良をボコボコにして子分にしたり、街でモテたりしてゐつて噂があるが…………」

「2番目以外事実だ…………じゃなくて、俺が知りたいのは！」

「キースとプルムがつき合つて主従プレイをしてゐつて噂か？」

「主従プレイつて何だよ！ つてか俺がプルムとつき合つてゐることになつてんのか…………」

「それより先輩と街の不良をボコボコにしたのが問題だが…………」

「うぜえ、眼鏡」

「…………なあ、一度はつきつづつちが上なのか決めないといけないと思つていたんだ」

「ふん、今からやるか？ いいで」

「……俺達の部屋なんだけど」

今にも喧嘩を始めそうな2人にシルフィードはため息をつく。

女子寮

プルムの部屋には同室のセレーナに加えアイリがプルムと話していた。

「キースとつき合つてるって本当?」

「な、何だよその噂」

「だ、だって、今日の……主従プレイなんでしょう?」

「な、何そのプレイ?」

「え、違うの?」

プルムは2人にキースとした話……炎のことは除いて話した。

「秘密つてのがよくわからないけど、奴隸になつてまで知りたい秘密だったの?」

「うん、俺にとつては……」

「……? 秘密を知りたいってことはプルムはキースに少なからず興味があるんだよね?」

「え……。や、そんな」とない、よ

否定するプルムだが、顔は真っ赤だ。それを見てセレーナはニヤニヤしてくる。

「これってチャンスだよね、告れば?」

「だ、だから……」

「私が良ければ協力するよ」

「ほ、本当に? ……あ」

アイリが協力すると誓つと、プルムは思わず聞き返した。プルムがセレーナを見ると勝ち誇つたような笑みをしてプルムをみていた。

「やつぱつや、気持ちを伝えるのが一番良いんだよ」

「む、無理! それに俺のせいに変な噂がたつてるし」

「なら、尊じやなくて事実にすれば?」

「……は?」

「つか合つて、奴隸のままだったら事実つてことじやない

「え……。やつなるのか?」

「やつだよー 告白するのは明日だからね」

「私も応援してやからね。それじゃ、また明日」

「え。ち、ちよっと……」

アイリはプルムの部屋を去つていった。

「つこにプルムにも恋人か……」

「つこにつこ……普通、中等部で恋人いるつて早すぎじゃないかな」

セレーナにはプルムのため息が聞こえないよう、どんな応援をしようか悩んでいた。

クロリア王宮魔術協会会長室

「魔術騎士団騎士長……バアル・ゼブル」

「はい」

「魔術騎士団第1隊隊長グレイ・グレファス、第2隊隊長ノエル・エトワール、第3隊隊長ギルティー・クルーエル、第4隊隊長リュージ・Ｋ・レクティード」

「……はい」

「君達には海軍とともに調査してもらいたいことがある。ある島に多大な魔力が集中していることがわかり、そこで君達を派遣して実態を調べて欲しい」

「しかし、我々が国から離れるとなると……」

「問題ないだろ？、第5、6、7、8、9隊隊長がいるからな。魔術六将もいる」

魔術六将とは魔術協会に在籍している魔術師のランク上位6名（会長・騎士長除く）のことだ。ちなみに、グノムスの後を引き継いで魔術騎士団騎士長になったのはバアルだ。

「所詮、魔術騎士団の下つ端相手でも勝てる者は少ないってことですね」

会長ルキフグスの言葉を聞いてノエルは頷きながら呟く。

「しかし、元騎士長はたつた1人に殺されたんだろ、グレファース第1隊隊長」

「……ああ。だが相手は」

「魔人だつたんだろ。つまり、魔人相手には騎士団はかなわないってことだ」

「……騎士団全体のレベルを上げる必要がある」

「問題ない。君達が調査に出ている間、特別講師に来てもらつ。……君達が戻つて来た時は下つ端相手に勝てなくなつてるかもな」

「それは楽しみですね」

バアル以外の4人が部屋を出ると露骨に嫌そつな顔をした者がい

た。ギルティーだ。

「何だつて俺達が孤島に調査に向かわなくてはならないんだ！」

「……落ち着けクルーエル。我々にしかできない任務だ」

「？ レクティード、どうこう」と

「エトワール嬢、その孤島は魔力が溢れている。よつて、魔獣も桁違いに強いだろ？」

「へえ、所詮他の隊長は頼りにならないってことね」

3人が調査のことで話していると、グレイは離れたところで考え込んでいた。

「……特別講師が気になるな」

4人が部屋を出て残されたバアルはルキフグスと話していた。

「4人の監視、および始末を頼みます」

「了解した。で、ルキフグスよ。彼らを始末するために他の者が犠牲になつても構わないのだな」

「左様で」¹ぞいます。ところであの方はまだ見つからないのでしょうか？」

「ああ、確實にこの世界にいらっしゃるがどこにいるのかわからな

い

「そうですか。……しかし、4人を始末しなくとも……」

「彼らは我らが望む世界を齎かす存在になるだらつ……グノムスと同じようにな」

「……そうですね」

バルが会長室を去るのをルキフグスは黙つて眺めていた。

第25話（前書き）

* 注意事項 *

短め、駄文、作者に文才無し。趣味で書いてるため期待しないこと。

ある休日の昼下がりのこと、キースとプルムは街にある喫茶店のテーブルに向き合って座っていた。

「……もう一度言つてくれるか？」

「お、俺とつき合つてください…」

「はあ……お前は俺の奴隸。わかる？ 奴隸と主人との間に恋なんてありえない」

「お願いします！ 俺は、キースが好きなんだ！」

「……キースじゃなくてご主人様だらうが」

「なあ、頼むよ！」

プルムはテーブルをバンッと両手で叩き立ち上がり頭をかがめキースを見つめる。大きな音が店内に響いたことで他の客の注目を集める。

「ゴンッ！」

「痛つ！ 何すんだよお」

プルムは頭を押されて涙目でキースを見る。キースはプルムを叩いたあとため息をつく。

「お前……。そもそもまだ中等部一年だ。恋愛なんて叫さがる。…
シルとバカリサーバは別だがなあ」

「ほら、知り合いが2組もつきてるんだから俺達も、な、なー。」

「やかましい、屑が。奴隸のくせにいつとか考えんな

「な、なら……今度あるランク分け試験でお前より高ければつき合つてくれないか?」

「お前が俺に……。面白い、いいだらう

「ほ、本当か!」

「だが!……俺が勝つたら黙つて俺の言つことを聞いてろ、お前から話しかけるな……いいな?」

「う……わかった

「よし、なら決まりだ。楽しみにしてるよ……ブルム

「お、おう」

キースにひそしげりに名前を呼ばれたブルムは若干頬を赤く染めていた。

マジックゲート敷地内図書館

シルフィードは呪いについて調べていた。呪い、つまり呪術は魔法の一種だ。相手を頭の中にイメージして術をかける。

すぐに効果があるものもあればジワジワと効果が現れるものがある。術はしばらくすれば解けるものがほとんどだ。しかし、術者の能力が高ければ解けるまでに時間がかかる。能力が高い者の呪術のなかには自然には解けないことがある。

「……基本的には呪いの解き方は同じ。よく使われている解き方なら店に売っている本にも載っている。しかし、ミレイナにかかる呪いには効果がない。やはり、『世界書庫』に行くしかないか」

シルフィードは読んでいた本を閉じ棚に戻す。

「おーい、シル」

「ん、フィルか。どうした?」

「キースから招集がかかった」

「なんだろう? と思いながらシルフィードは自分の部屋に戻る。

「……なんで俺の部屋なんだ」

「気にすんな。それよりも次のランク分け試験のことだ」

シルフィードとフィルが部屋に来たときには、すでにキース、リサーバ、リーチ、テスラがいた。

「ランク分け試験がどうした?」

「プルムにランクが俺より高かつたらつき合ってくれと言われた。

だから本氣をだす。……お前らも本氣でやれ

「えっと……俺達関係なくないか？」

テスラの意見にキースとシルフィード以外の3人は頷く。

「そもそも俺はUランクだからな」

「……お前ら、俺達は平均か、少し高いかだ。だから周りから文句も言われるし注意される。だが、もし俺達がもっと高いランクだったら……。誰にも文句を言われず、自由じやないか！」

「……俺達すでに自由だろ」

「お前らは、そんなんで良いのかよ。」

「ランク高いと注目浴びるだろ、シルみたいに」

確かに、とシルフィードを含む4人が頷く。キースはまだ納得いかないようだ。

「そもそも、なんでつき合いたくなえんだよ」

「は、誰がプルムみたいなバカと……」

「そつかい……。試験で本氣を出してコッチにメリットは？」

「俺が街であつた美少女達を紹介するぜ」

キースの言葉にリーチとフィル、テスラの表情が変わる。

「本当か？ 嘘偽りはないんだな？」

「ああ、俺が街でモテるって噂あるんだな？ あれ、本当だからな

「……よししゃあ、のつたあああつー。」「

「どうやら3人はやる気になつたようだ。他の2人はため息をつき、
キースはニヤニヤしている。

「で、バカリサーバはどうすんだあ？」

「……俺にはセレーナがいるからな

苛立つた様子でリサーバはキースを見る。キースはニヤリとして
こいつ告げた。

「ランクが上がつたらもつと好きになるんじゃねえか？」

「……！」

苛立つた様子のリサーバだが目を見開いてキースを見る。

「……そうだな、そうだよなあ！ よし、セレーナのためにも高ラ
ンクを目指して頑張るぜえ！」

単純だな、とシルフィードは友達のことを情けなく思いながらた
め息をつく。

「どうした？」

「いや、何だか悲しくなつてきた」

「？まあ、いい。お前らあ、ランク分け試験頑張るぞー！」

「…………おまつー。」「…………」

「…………まあ」

第26話（前書き）

* 注意事項*
馱文につき期待しないこと。

ランク分け試験当日。筆記試験を終えてシルフィード達は食堂にいた。実技試験は午後からある。

「お前ら筆記試験はどうだったあ？」

「楽勝！ キース、約束絶対守れよー。」

「了解だ！」

「午後も頑張るぞー。」

「「「「オオオツー！」」」

「……元気だな」

シルフィードは深くため息をついた。ふと周りを見ると他の生徒がチラチラと見ていた。目が合つと慌てて視線をそらされたシルフィードは苦笑いする。ふと、アイリを見つけたシルフィードは食べている料理を持つてアイリ達が座つていれ席に向かった。

「アイリ、ここ良いかな？」

「あ、シル君。良いよ」

アイリはセレーナ、プルムと一緒に昼食を食べていた。

「何だか騒がしいね」

「ああ、何だかランク分け試験で本気だすつたりするといいんだ」

「え……本気?」

ブルムは首を傾げてシルフィードにたずねる。

「ああ、あいつら……つていうか前の俺もだけど本気とかだす気がまったくなかつたんだよ」

「……つまり手抜きでロランクなのか?」

「そうなる

ブルムはショックを受けたような顔をしてうなだれる。

「勝ち目ないじゅん

「あ、勝負挑んだんだっけ?」

「……ユナイゼル君つて本気だしたらどれくらー?」

「ああ? まあランクは超える

「……ランクつて今までしかないんだけど」

アイリは呆然とキースがいる方を見る。

「ならリサーバも結構高いの?」

「少なくとも△だな」

「さすが私のリサーバ！」

セレーナは顔を赤くしてリサーバの方を見る。プルムはなにやら
ブツブツ呟いている。

「自分から話しかけるなってあんまりだと思わないかシルフィード
！」

「お、俺に言われても……」

「キースと友達だろ。お願ひだよ！ 俺、嫌だよ。話しかけられた
時ってことは返事するだけのことだよなあ……なあ、どうすれば
良いんだよお」

プルムは涙目になりながらシルフィードを見る。アイリとセレー
ナは心配そうにプルムを見ている。

「だ、だから俺に言われても……」

「……わかった。直接頼む」

そう言つてプルムは立ち上がり、キースのもとに向かう。

「な、なあキース

「ご主人様だらうが、屑が」

「す、すみませんご主人様……。あ、あのやつぱり話しかけるなつ

てのはあんまりでは……」

「お前は『』主人様に口答えするのか?」

「い、いえ。申し訳ありません!」

プルムはゆっくりと席に戻る。

「無理だつた……」

「だらうな」

「お、俺……実技サボるから」

「「えー!」」

プルムは足早に食堂を出て行った。

「……サボリはGランクだつたな。負け決定だな

「プルムを追いかけないと!」

アイリは立ち上がるがセレーナに腕をつかまれる。

「もうすぐ始まる。それに勝負を言い出したのはプルム……悪いけど自分で言い出して逃げる人を助ける気にはなれないよ

「ち、ちよつと! 友達じゃ……」

「だからだよ。私はありのままのプルムを受け入れる。臆病なプル

ムでもね。プルムが好きなよつたわらるべきだよ

アイリは納得出来ないようだが、しぶしぶ頷く。

「……さて、俺もそろそろ行くか。実技も頑張れよ」

「うん、ありがとうシル君」

女子寮

プルムは自分の部屋に閉じこもっていた。

「……はあ、俺バカだよな。無謀な勝負挑んで勝てないとわかつたら尻尾まいて逃げて……試験サボったからGランクか」

それも良いかな。俺は落ちこぼれだからな、とプルムは自分を嘲笑した。キースからは肩だと言われ続けていた。

実際そうだよな、とプルムは思う。それに奴隸になつてまでキースを知りたいと思つたこともある。

どんな形でもキースと一緒に入れることに喜びを感じていた。

「……俺つてバカだよな」

勝負を挑まなかつたら良かつた……。

キースと一緒にいても此方から話しかけられない……キースに

話しかけられなければずっと話せない。

どうせ負けるんだから実技を受ければ良かった……でも、受けてもまともに魔法は使えないだろう。

「コンコンッ。

「……誰？」

「……俺だ」

「き、キース！」

プルムは慌てて部屋の扉を開けるとキースが立っていた。

「な、何で？」

「お前の友達のバカ2人にな……一発ずつ殴られたんだよ」

キースは頬を手で押さえながらプルムを睨みつける。

「う、ごめん」

「……ふん。俺は言っ過ぎたともやり過ぎたとも思ってない。……だがな、お前が実技をサボるうとしているのは俺のせいなんだろ？ だから、謝りに来てやつた」

「……謝りに来たつて態度じゃないな」

「うぬさい、肩のくせに」

「謝る気あんのかよ？」

プルムは「『』としてキースを見た。キースは思わず顔を逸らした。

「……『』、こんなに可愛いかつたんだな。

キースが顔を赤くしていると、プルムは不思議そうに見ていた。

「まあ、なんだ……その……『』悪かつたな。奴隸のこととか

「ほ、本当にキースが謝った……」

「お前、俺のこと何だと……」

「……それより、実技試験もう始まってるんじゃないか？」

「ランクなんかどうでもいいんだ。三学期の試験で本気だす

「でもGランクになるんだぜ？」

「シルなんか一学期の試験まで何年間もGランクだったじゃないか。それにくらべればちよつとの時間、息抜き程度だな」

「そつか……ん？ なら勝負はどうなるんだ？」

「引き分けだな……いや、俺の負けでいい」

「へつ……それじゃ」

「ふん、つまらつてやつても良い」

「あ、ありがとうー キース！」

プルムはキースに抱きつく。いきなりのことびっくりし、からにキースの顔は赤くなる。

そして、次の日

「キース、約束はどうした！」

「約束？ 何のことだか……」

「お前サボりやがつてUランクじゃないか！ 挙げ句の果てに彼女まで作りやがつて」

「この裏切り者め！」

「はは、言いたいだけ言いたまえ、Uランク共め

キースはリーチ、ファイル、テスラに詰め寄られていたが平然としていた。

「……ありえねえよな

「だな」

少し離れたところにいるシルフィードとリサーバは張り出された結果を見ながら話していた。

『中等部一年フィル・フォモール
　　"　　テスラ・ヴァインス
　　"　　リーチ・ランダイン
　　"　　リサーバ・ランダイン
以上の者をDランクとする。』

ちなみに、アイリは変わらずCランク。セレーナは一つ上がつてDランクになっていた。シルフィードはもう少しCランクだ。

キースとブルムは無論Dランクだ。

「……まあ冬休みって少ないのに王宮に行かないといけないのか

「……そうだな」

冬休み、セレーナと過ごす時間が少なくなることにリサーバは残念そうにため息をついた。

第27話（前書き）

* 注意事項 *

馱文。期末試験期間中にもかかわらず投稿という暴挙により期待は禁物。

季節は冬……。冬休みに入ったある日のこと。その日は朝から雪が降っていた。雪はクロリアの街を白く染めていく。

「……つたく、寒いじゃねえか」

魔法学院マジックゲート中等部一年のキース・ユナイゼルは白い息を吐きながら街を歩いていた。その後ろからはブルム・メルビィーがついてきていた。

「ま、待つてよー」

「早く歩けよクズが……お前はグズなのか！」

「そ、そんなこと言つたつて……」

「……ほら」

キースはブルムに手を差し伸べる。

「え……」

「お前がはぐれたら困るしな……今の時期は人も多いし」

冬になると街は賑やかになる年末には一週間に渡つて忘年会ならぬ忘年祭が国中……世界中で行われる。また、年が変われば一週間新年祭がある。

冬には2週間も祭が続くのだ。祭の時期と冬休みは重なり街も様々な催しをする店が増える。

「……うん」

プルムは顔を染めて手を握る。キースはプルム以上に顔を赤くしていた。

「なあ、どこに行く?」

「ビリでも良い。だけビリランクだからビリでも高いんだよな

「……あやこさんシル君に奢つてもうりおつ」

キースはニヤリとして指差す。プルムがキースの指差した方を見るとシルフィードとアイリがいた。

「で、でも……」

「まあ、行くぞ」

「……あ

キースは強引にプルムを引っ張つてシルフィードのもとに向かう。

「やあ、シル君」

「キースとプルムか。……お前らもパーティーか?」

「ああ。といつわけでなんか奢れ」

「……どういうわけだかわからないけど。まあ、良いだろ。4人でどこかレストランでも行こうか」

「お、さすがSランク、太っ腹だ」

「……ごめんアイリ」

「え？ 別に良いよ。大勢は大勢での楽しみがあるからね」

「……そう」

ブルムは意外そうにアイリを見たあとキースをみてこいつ悪う。私だつたら2人つきりが良いのにな……。

マジックゲート男子寮

リサーバの部屋ではリサーバとセレーナがのんびりしていた。

「ねえ、リサーバ。私、街に行きたいな」

「街か……そうだな。面倒だから却下だ」

「な、何で！」

「今の時期街にはたくさん的人がいる。たしか明日から祭だろ？ それに、俺はお前と2人つきりが良いんだ」

「り、リサーバ……」

「2人つきりが良いなら別のところに行ってくれ!」

リサーバとセレーナがなにやら良い雰囲気になりかけていると部屋のもう1人の住人リーチ・ランダインが叫ぶ。

「おい兄さん、今良いところだつたのに……」

「そうよ。空氣読めないの?」

呆れたように2人はリーチを見る。

「……俺にどこかに行けと?」

「おお、さすが兄さんだ。弟が考えていことがあるなんて」

「……っつ、夜になつたら戻つてくるからな!」

そう言つてリーチは部屋を出て行つた。

「……兄さんにも良い相手みつかると良いのにな

「リーチに好意を寄せている人はいるんだけどね……」

2人は部屋の扉をじつと見つめていた。

マジックゲート男子寮前

リーチはゆつくり寮から出てくる。

「……はあ。何で周りの奴らには彼女が出来るんだろうな。あとは俺とフィルとテスラか」

リーチは、やつぱり人間顔なのか、とため息をつく。しかし、本人は気づいてないようだがリーチを含めシルフィード等6人組はかなりルックスが良い。

そんなリーチを物陰からコソコソと見ている女子達がいた。

レーヌ・ブラウニー、フラン・ブラウニー、ラルム・ブラウニー。中等部1年の三つ子だ。長女はレーヌ、次女はフラン、三女ガラムだ。

「ね、姉さん。リーチ様だよ」

「落ち着きなさいラルム。……ランダイン兄弟の兄であるリーチ様。ボサボサした髪にメガネという地味な外見。……しかし、私は知っている、リーチ様が格好良く素敵な方だと言つことを…」

「アネキ、あんまりうるさいと気づかれるぜ」

フランの言葉にレーヌはハツとする。

「危なかつたわね……。リーチ様はJランクになつたことで人気が急上昇中。この前なんか女共がキャーキャーリーチ様によつてきて……私達は初等部の頃からリーチ様が好きなのに！」

「アネキ、落ち着けよ」

「あ……私つたらまた」

「……何かようですか？」

「「「り、リー チ様！」」「

リー チがなんだかうるさいな、と思つて振り返ると髪型は違うが顔の似ている3人が騒いでいた。たまに自分の名前が呼ばれているのでリー チは気になつて話しかけた。

リー チに話しかけられた3人は顔を真っ赤にして口をパクパクさせていた。しばらく沈黙が続きリー チが気まずそうに頭をかくと、リー ヌが口を開いた。

「あ、あ、あの、私達、リー チ様のファンなんですね！」

「ふ、ファン？」

「はい！ あ、あの……握手してくださー」

「あ、ああ

リー チがおずおずと手を差し出すとリー ヌは物凄い勢いでリー チの手を両手で握る。

「ああ幸せです。リー チ様とお話ししてこうこう風に握手してもらえるなんて……

普段のフラムとラルムならば「私も！」とか言つただが、今は緊張してそれどころではない。

「……えつと

一向に手を放す様子を見せないレースを困惑したよつこみのリーチ。ふとレースと田が合つてリーチは慌てて田を逸らす。それを見てレースは「ヤリとする。

「リーチ様、もしかして女子と手を繋いだりすることってないんですか?」

「ま、まあな

「せ、ですか」

レースは「ヤヤヤしながらリーチによりかか。リーチはこきなりのことで若干赤かつた顔がさらに赤く染まる。

「な、なんだ?」

「……私、リーチ様が好きです」

「は、はあ?」

レースはリーチに抱きつぐ。

「付き合つてください」

「「ぬ、抜け駆け!」」

レースがリーチに告白したことヒラクマとラルムは驚く。リーチは田を見開いてレースを見ている。

「ダメですか？ リーチ様」

「い、いきなり言われても。俺、君の「」と良く知らないし」「付き合つことで私のすべてをさらけだすのと私のすべてを知つてください」

「アネキ、大胆！」

「ね、姉さん本当に中等部1年なの？」

「え、えつと。俺まだ恋愛とか興味ないし、恋人とか高等部からでも……」

「なら予約です」

「予約？」

「はい、高等部になつた時、付き合つてくれると約束してください」

「だ、だけどまだ中等部1年だから高等部になる「」には他に好きな人が……」

「私は初等部の頃からずっとあなたが好きです」

「あ、気持ち嬉しいけど……」

「なら、付き合つてください」

……さゆつ。

レーヌはリーチを強く抱きしめる。リーチはなんとかして抜け出せないか考えるが、相手は女子。力を入れて怪我させてしまうといけない。ふとリーチは考えが浮かぶが、それは駄目だと躊躇つ。しかし、その方法しかないかも知れないと思つたリーチは実行する。

「あ、あの」

「はい？ ……！ え？」

顔を上げたレーヌの唇に自分ね唇を重ねる。レーヌが驚いたように目を見開き、腕の力が弱まつた瞬間、リーチは抜け出した。

「「」、「」めん。とにかく、今は恋人とか考えてないから！」

リーチは逃げるよつとその場を走り去つた。

「……わ、私、リーチ様にキスされた」

レーヌは自分の唇に触れながら呆然としていた。フラムとラルムはつらやましそうにレーヌを見ている。

「アネキばかりズルイ」

フラムの言葉にラルムは頷くが、レーヌは心ここにあらず、とう感じでまったく聞いてなかつた。

第28話（前書き）

* 注意事項*
馱文、閲覧注意。

港町コーラル……海軍本部

グレイ達魔術騎士団とバアルは海軍本部の応接室に居た。海軍のトップは元帥、次に大将、中将、少将、大佐、中佐、少佐、大尉、中尉、少尉、候補生、曹長、軍曹、伍長、兵長、一等兵、二等兵、三等兵と続していく。

グレイ達5人は海軍のトップではなく、階級的には5番目の大佐と呼ばれている人物達と会うことになった。

ちなみに元帥はもちろん1人で、大将も1人、中将は2人、少将は3人いる。大将、中将、少将をまとめて海軍6将と呼ぶ人が多い。

大佐、中佐、少佐は各6人となつていてそれより下は人数は定められていない。なお、各階級の定数は国によつて違う。

「私達は魔術騎士団の隊長陣なのよ。言わば国のトップレベル。それなのに相手は大佐？ なめられてるのかしらね私達」

ノエルは納得がいかないようだ。それを見て、ギルティーは鼻で笑う。

「俺達と共に孤島に向かうのが大佐さん達ってことだろ。俺達は打ち合わせをしてすぐに出発するんだからな」

「……すぐに出発するって本当？」

「……王宮を発つときに言われたが、覚えてな……聞いてなかつた

な

グレイは呆れたようにノエルを見る。ノエルは恥ずかしそうに顔を染めてうつむく。

「は、さすがエトワール嬢。温室育ちのお嬢様は一味違うね」

「あらクルー・エル、所詮あなたも温室育ちでしょ？」

「まったく。温室にはほど遠い過酷な環境だったぜ」

「へえ、その環境詳しく述べてくれない」

「お、聞いてくれるか？ なら教えてやる」

ギルティーが話そつとすると部屋に4人の大佐であるう者達が入ってきた。

「はじめまして。少将以上は会議とかで行けないから今回大佐が4人だけとなってしまいました。もちろん船にはサポートする兵士達も乗りますので……」

「わかりました。よろしくお願ひします」

大佐の1人とバアルが握手をする。その後、軽い打ち合わせをしたあとすぐに船に乗り込む。船に乗り込んだノエルは海を見ながらため息をつく。

「船……。孤島に行くのになれば楽しいのに」

「……HTワール嬢は船には何度も？」

「まあね。船上パーティーも何度も……レクティード、顔色悪いよ？」

「船、苦手なんだ」

リコージは顔を青くして口を手で覆っている。ノエルは苦笑いしながらリコージの背中をそすつてこいる。

「……さて、HTワール嬢。到着まで時間がかかるから俺が育った環境についてじっくり話そう」

「さうね。聞いてあげる

「俺は捨て子なんだ」

「……え？」

「首都クロリアの北にある樹海に捨てられてたらじ。それでルキフグスさんに拾われて王宮で育ててもらつた。まあ、温室育ちではあるかもな」

「……」めさ

「何に対しても謝つてるんだ？」

「捨て子つてこと知らなくて……」

「まあ、気にしてないからな

「……セツ」

「あー、何だかすぐに終わっちゃったな。船の中ウロウロしてくる

そう言つてギルティーは船の中へと入つていつた。

「……人にはそれぞれ悩みがある。あまり触れないことだ」

「セツだね。……えつと、本当に大丈夫?」

見るからに悪化しているリュージを見てノエルは心配する。

「……部屋で休んでくる」

リュージはフラフラと歩きながら船の中へと向かう。ノエルは姿が見えなくなるまでリュージの後ろ姿をみていた。

バアルは立ち入り禁止と貼り紙が扉に貼られている部屋にいた。バアルの前にガルー・ファトウスが居る。

「よお、ガルー。調子はどうだ?」

「まあまあだね」

「正体はバレてないよな」

「ええ。正体を知った奴は「チラに引き込みましたから」

「そういえば今日は忘年祭最終日だな」

「……新年早々生き物の血を見ることになりますね」

「だな」

薄暗い部屋には薄気味悪い笑い声が響いていた。

首都クロリア

街は人で溢れ、賑わっていた。そんな街中を走る影があった。リーチだ。リーチは何度も人にぶつかりそうになりながらもしきりに後ろを振り返っていた。

「ぐ、いくら何でもしつこすぎんな」

「待ってくださいリーチ様！」

リーチを追いかけるのは数日前キスされたレーヌだ。あれからリーチの部屋に毎日押し掛けては逃げるリーチを追いかけている。

「ここまで来たら変態だぞ！」

「それでも構いません、リーチ様と話せるならば！」

「俺が嫌なんだよ！」

ちなみにレーヌの妹達は姉の異常なまでの執着心に若干引きながらも一応応援している。

「何で、何で私の気持ち受けとつてくれないんですか！」

「だから俺は、中等部のうちに付き合つ気はないんだ！」

「で、でも……きやつ」

「何だらうとリーチが振り返るとレースがつまづき転んでいた。リーチはレースに近寄り「大丈夫か？」と話しかける。

その瞬間、レースがリーチに抱きついた。リーチはしまった、と
いう顔をしたが時すでに遅し。レースの腕はしっかりとリーチを捕
らえていた。

「やつと捕まえました、リーチ様」

レースは恍惚の表情でリーチの背中に頬をこすりつける。

「お、おい。街中で止める」

「ああ、リーチ様の匂い」

レースはリーチの匂いを嗅ぐ。

「や、止めつてー」

「……なら付き合つてください」

「はあ？ 何でそつなるんだよ」

「私、リーチ様が好きなんです」

「……それは何度も聞いたよ」

そう言つてリーチはふと思つ。

……こんなに好かれているって幸せなことなのかな?

「……なあレース」

「な、何?」

リーチはゆつくつと後ろを向きレースを見つめる。レースは怒られるのではと恐る恐る見ている。

「俺なんかで良いのか?」

「え?」

「俺が彼氏で本当に良いのか?」

「……はー」

「……そつか

「……えっと、どうかしまし……ー。」

リーチがレースの脣に自分の脣を重ね合わせる。レースは目を開いて呆然としている。レースの腕の力が弱まる。

レーヌはハツとしてリーチを逃がさないようにしようとすると、リーチに逃げる気がないことに気づく。不思議に思つていると、今度はリーチがレーヌを力強く、なおかつ優しく抱きしめる。

……これまでの人生を離す。

忘れてはいけないのはここは街中で、多くはないが少ない通行量だということ。幸いにも周りを通る人々は2人見ないようにして歩いていること。

レー・ヌは顔を真っ赤にしている。さすがに恥ずかしいのかリー・チから離れようとするがリー・チが抱きしめたまま離さない。

「り、リーチ様……離してくれませんか？」
「あ、誤解しないでください」
「さい。嫌ではなくて恥ずかしいからです」

「……言つゝとを全く聞かなかつた奴の言つゝとを聞くせど俺は優しくないぞ」

リーチはさりげなく抱きしめる。

「あ、あの……」

「俺なんかで良ければ付き合ってくれ」

「一、いざ、おおきなお願いします」

「ああ、ようこそな

そして、再び唇と唇が重なり合つた……。

第29話（前書き）

* 注意事項 *

馱文、短め、注意です。

クロリア王国は新年を迎えていたるところで祝いが行われている。王宮では国内から様々な者が招かれている。各街の魔術協会支部会長、町村長、海軍の少将以上、大企業・財閥の当主や社長、それらの家族などなどだ。

ルベライト・セイファートはグラスに注がれたジュースを空に瞬く星を見ながら飲んでいた。招かれている人物の家族にルベライトと同年代は結構居るが、ルベライトは王子だ。王子という立場が話しがけづらくしている。

「ルベライト様」

「ん、ロフオカルさん」

ルキフグス・ロフオカルは一人寂しそうにジュースを飲んでいるルベライトを見つけ話しかける。

「元気ありませんね」

「まあ……な。冬休みはJランク昇格者は来ないんだな」

「まあ、休みが少ないので。それに今回の昇格者はマジックゲートから4人だけですから各自王宮に来てもらい国王様に会つてもらいます」

「そうか。……マジックゲートといえばシルの学校だつたか」

「シルフィード・マグナスですね。そういうえば夏期休業中に友達になられて……」

「ああ。……最近会えてないな

たまにだが、休日にシルフィードが王宮に顔を出し、ルベライトと話している。今ではルベライトの一一番の楽しみとなっている。

「ルベライト様はもう少し積極的になるべきです。今まで同年代の方にお会いしてもまったく話そつとしませんでしたから」

「ふん、何でパーティーに招かれている奴らが子供を連れてくるかわかるか？ 僕と仲良くなつて羨妬されようとしているんだ。所詮、親が子供を利用しているだけ」

「ふむ。否定はしませんがね」

「……そういうえば魔術騎士団に特別講師が来ると聞いたんだが、俺も稽古つけてもらえるか？」

「お望みならば、伝えておきます

「ありがとう、恩に着る」

ルベライトは空のグラスを使用済み食器置き場に置きに行く。こつそりと部屋に戻ろうとパーティー会場（大広間）を出ようとすると、ふと、壁にもたれ一人飲み物を飲んでいる少女を見つけた。ルベライトはその少女に近づき声をかける。

「同年代の輪の中に入らないのか？」

「……別に群れる気もないし、私は無理やりつれてこられただけだから」

少女はルベライトを見ずに答える。誰とも話す気はない、というような雰囲気を出していた。

「へえ、そつか」

ルベライトは少女の隣で壁にもたれる。少女はため息をついてグラスに残ったジュークスを飲み干す。

「あのさ、私一人でいる方が気楽なんだけど」

「確かにそうかもしれないが、一人でいると楽しくないぞ?」

「わからないかな? 私に構わないで欲しいん……だ?」

少女はイラついた様子でルベライトを見る。見た瞬間、少女の目が見開かれる。

「ん、どうかした?」

「え、えつ……ルベライト様?」

「そつだけど様はつけて欲しいな」

「さ、先ほどは失礼なことを言つてしまい申し訳ございませんでした!」

「ああ、大丈夫だよ。気にしない」

「あ、ありがとうございます」

「君、名前は？」

「は、はい。ネージュ・ニュージュです」

「……ニュージュといつとクロリア最大の財閥、ニュージュグループか」

「そうです」

「ユアージュグループは魔法を使ってつくられた道具である魔法具や宝石、薬品、造船など他にも様々な分野で活躍している。

その中では魔術とは違う技術、科学を使っているモノがある。だが、電気や電波や大きな音をだすモノは魔獣を引き寄せる可能性があるためそこまで発達はしていない。

「あ、ルベライト様は何で私に声をおかげに？」

「敬語なんて使つな。……部屋に戻ろうとしたらネージュをみかけてな」

「そうですか」

「……敬語禁止

「わ、わかりま……わかった」

「よし。 そりゃなんで群れるのが嫌いなんだ？」

「……私さ、ニコアージュグループをいざれ継ぐんだ。だから私の機嫌を取ろうとみんな近づいてくる。まだ中等部だよ。……クラスでも休み時間になると他のクラスからも私に会いに来る。1人の方が落ち着くんだ」

「ああ、何だかその気持ちわかるな。大人がまだ子供である俺に頭下げたり「機嫌取ろう」としたり……。なあ、友達にならないか？」

「えつ？ 私と……ルベライトが友達に？」

「ああ。友達なら気を使う必要もないだろ？ 俺は王子である前に1人の子供だ。おかしいことはまったくない」

「こやかに話すルベライトをネージュは驚いたようにみている。ネージュには友達はいる。だが、どちらかと言つて「機嫌を取つてばかりでまったく友達っぽくはない」とネージュは思つていた。

「私なんかがルベライトの友達なんて……」

「俺には友達と呼べる者はいなかつた。だが、夏期休業中に来たSランク達と友達になつた。立場とか関係ない。気楽に話せて笑い合える。そんな友達になりたいんだ。……嫌なら仕方ないが」

「い、嫌なんてとんでもない！ ……私で良ければ友達にならう、ルベライト」

ネージュはルベライトに手を差し伸べる。ルベライトは笑顔でそ

の手を握る。

「よろしくな」

「ええ、じつじつ」

ルベライトとネージュが握手している様子を遠くからジッと見て
いる者がいた。

「あれが王子か。それにしても俺に稽古をつけて欲しいって変わっ
てる」

「まあまあ、我々も期待しますよ。明日からアナタ流の稽古で騎
士団を強くね。……我が軍が攻め込んだ時、少しでも張り合いがな
いとつまらないですから」

「了解、ルキフグス殿。我等が栄光のために……」

第30話（前書き）

* 注意事項 *
グダグダ、駄文注意。

船が「コーラルの港を出航して数日。目的地である島が見えてくる。リュージは口を押さえながら島を見つめる。

「えっと……本当に大丈夫？」

「……あと、少しで着くんだ。……そのくらい大丈夫だ」

リュージはそう言つが、顔を真つ青にして言つ様子は誰がみても大丈夫だとは思わない。やせ我慢しているのは一目瞭然なのだが、本人が大丈夫だと言うので周りはどうしようもない。

「……まだ離れているが空気中の魔力濃度が高まっているな。この距離でこれほどなら島の魔力濃度は凄まじいだろうな」

「そうだな……。なあグレファス……あれ、海賊船だよな」

ギルティーは双眼鏡をグレイに渡す。グレイはギルティーが指差す方向を双眼鏡を覗きながら見る。

「……みたいだな。調査のついでに海賊退治をしないといけないみたいだ」

その頃バアルは船内の一室で4人の大佐と話していた。

「わ、我々に、仲間を裏切ると言つてるのか？」

「ん、簡単言うとそーカな。君ら大佐4人はガルー以外の搭乗海軍兵士と魔術騎士団隊長陣を魔獣どもと戦つている隙に始末する。……いや、隊長陣の1人ギルティー・クルーエルは俺が殺る」

「……本気ですか？」

「ああ、この船に乗つている大佐……君達は我々の理想実現に必要だからな。君達以外の搭乗者は邪魔だ。……此方側に来て欲しい奴もいるがな」

「……理想実現」

「ああ。我々の……な。さて、そろそろ行くぞ、ネビロス、アイペロス、ナベルス、グラシャラボラス」

「「「「承知」」」

「……僕は様子見と行きますかね」

船に搭乗している全員が降りる準備を終え、ついに島に到着する。真っ先に陸に足をつけたのはリュージだ。

「はつはつは！ これは凄い。魔力が満ち溢れている。今日の俺は絶好調だ！」

「陸に上がった途端に元気になつたわね」

「それがレクティードアビリティーだ！」

「……意味わかんない」

陸に上がった瞬間テンショングが上がったリュージに若干呆れながらノエルも島に上陸する。グレイとギルティーは大佐4人とともに船から降りる。その後からはバアル、ガルー、海軍兵士が続く。

その様子を草むらから見ている者達がいた。

「……なんで海軍がこの島に来てるシスか？」

「俺たちが知るわけないっしょ。……早くディザに報告しなきゃいけないっしょ」

「……いや、今の俺達は海軍よりも強い筈っす」

「……海賊下つ端の実力を見せましょっか！」

次の瞬間、草むらから海賊2人が飛び出す。その先にいたのはノエルだった。

「！ か、海賊？」

「海軍死ねえっス！」

海賊の1人が刃物に電気をまとわせノエルに切りかかる。ノエルは魔力を手に集中させ円盤状の防壁バリアを作り出す。

「そんなバリアで防げるとは思わないことシス！」

……ピシッ、ピシッ。

「ば、バリアにヒビが！」

「イタダキッス！」

ガシャーン！

バリアが粉々に砕け、呆然としているノエルに向けて海賊が刃物を突き刺す。だが、ガルーが間に入り込み刀で防ぐ。

「……海賊、コイツは魔術騎士団だ。僕が海軍。相手を間違えるな

「な、防がれたッス！」

「俺が居ることを忘れるなっしょ！……ぐへえ！」

もう1人の海賊がガルーに攻撃しようとすると、リュージに防がれる。

……海賊下つ端2人は縄で腕を縛られ、他の海賊のところへ案内する役割をもらつた。

「……本当に良いんスか？ わざわざ殺られに行くなんて正氣の沙汰じゃないッスよ」

「いひぬさいな。サッサと歩いて案内しなさいよ！」

「……バリアを破られた瞬間怯えていた奴がなに言つてるんスか」

「お、怯えてなんかいない！」

「……図星かあ？」

「ぐ、クルーエル！」

しばらく騒ぎつつ歩き、周りが木に囲まれた道に来ると先頭を歩いていた海賊下っ端2人が急に足を止める。後ろに続くグレイ達と海軍兵士達は不思議に思いながらも足を止める。

「おい、何で止まつて……！」

グレイが海賊下っ端の顔を見た瞬間、言葉を止める。海賊下っ端2人は笑みを浮かべていた。

「海軍も馬鹿ッスよね、警戒することなくついてくるなんて」

「間抜けにも程があるつしょー。」

その言葉に合わせるように木の陰から海賊達がぞろぞろと出でてくる。グレイ達は海賊に囲まれた。

「ははは！ こんな島に何のようです、海軍および魔術騎士団……もとい魔術協会の犬共オ！」

「い、子供？」

道の奥から海賊を数人引き連れ、ティザとウインディーネが現れる。海賊達と一緒に子供がいることにグレイ達は驚く。ふとグレイはウインディーネを見て、気づく。

「な、何故行方不明の学生が此処に！」

「……そういえば私、学生でしたね。忘れてました」

「そうこうひとまじうでも良いんだ。……魔術騎士団相手にどれだけやれるか、試すか……。行くぞ、野郎共オ！」

ディザの掛け声で海賊達が武器を手に襲いかかる。中には魔法を使っている者達もいる。

「ぐ、賊共が……」

「ふん、魔術騎士団の力なめんなよー。」

リュージは刀を手に海賊達を斬つていぐ。ギルティーは魔力を集中させ魔力弾を作り海賊達に撃ち込んでいく。

「やるしかなにようね。所詮賊、数で押そうなんて浅はかな考えだね！」

「ぐ、学生であらうと海賊の仲間なら手加減はしないー！」

ノエルは空気を刃状に固め、海賊に向けて飛ばしていく。グレイは剣に炎をまとわせかかってぐる海賊達を迎え撃つ。

「……予想外の好機ですね」

「ああ。じばらく様子を見よう」

バアルとガルーは海軍大佐4人と共に少し離れて様子を見ている。もし、海賊達が勝てば海賊討伐をすることになり、グレイ達や海軍

が勝ちそうならば海賊もろとも殲滅する。どちらにしろバアル達以外生き残りがいないようにする。

普通ならば魔術騎士団や海軍は訓練など怠つていなければ海賊を簡単に討伐出来るほどの実力を持つている。

だが、この海賊達は頭によつて訓練を強いられ、この魔力満ち溢れた島にいることでかなりの力、Sランク以上の実力をつけている。最初はグレイ達や海軍が優勢だつたが、時間が経つにつれて海賊達が優勢になつていいく。すでに多くの海軍兵士が殺された。海賊達はほとんどが生きて、その中には無傷の者達もいる。

グレイ達魔術騎士団隊長陣にも焦りの表情が浮かんでいた。

「な、何で海賊がこんなに強いのよ!..」

「お前らと訓練のやり方が違うっス! こつちは命がけなんスよ!..」

「ぐつー!..」

トツ端がノエルの腹を蹴る。ノエルは蹴り飛ばされ木に叩きつけられる。さらにトツ端はノエルに向けて魔力弾を放つ。

「Hトワール!..」

それを見たグレイはノエルを助けに向かおうとするが、周りの海賊達に阻止される。

「ぐ、邪魔だ!..」

グレイは剣を振るうが呆気なく防がれ、剣を弾き飛ばされる。

「ちいっ！」

「オオオッ！」

グレイは海賊用掛け炎を放つ。海賊達が怯んだ瞬間、海賊の包囲から抜け出しノエルに駆け寄る。

「……氣絶してるな

ノエルは動いていなかつたが、息をしていることにてきづきグレイはホッとする。だが、このままだといつ海賊にやられるか分からない。運ぼうにも海賊にやられる可能性が高くなる。

「お困りのようだなあ

「クルーエル！」

木の上からギルティーが飛び降りてきた。ギルティーの姿を見てグレイはギョッとする。ギルティーの顔や服には返り血がビッシリと付いていた。

「ん、海賊どもを背後から斬りまくっていたら血がベッタリだ

「……さすがギルティー・クルーエル、優秀ですね」「……ゼブルさん！」

ギルティーに声をかけてきたのはバアルだった。その後ろには海

軍大佐4人がいる。

「君とゆっくり話をしたいのだが、周りが邪魔だな……殺れ」

「「「ハツ！」」」

シユツ…………ドゴオオオオツ！

ゼブルが合図をすると海軍大佐4人が海賊達に向かって魔法を放つ。その魔法は光線のようなものや、視覚では捉えられないもの、様々な魔法が海賊達を襲う。

魔法は地面に当たり砂煙を起こす。砂煙が収まつた時にはほとんどの海賊と魔法に巻き込まれた海軍兵士達がボロボロになつて倒れていた。息をしているかどうかすらも分からぬ。

「な、味方まで巻き込んで……」

「味方？　ああ、海軍兵士達のことか。ただの駒にしかすぎない。味方は海軍大佐4人と海軍兵士一人だ……そのことで相談なのだがギルティーよ、我々についてこないか？」

「……え？」

「私は君が小さい頃から知つてゐる。君は優秀だ。我々の力になつてもらいたい。ルキフグスもそれを望んでいるぞ」

「ロフオカルさんが……」

「それに君が我々の仲間になるなら魔術騎士団には手を出さない」

「…………わかつた。仲間になります」

「クルーエル！」

「良いんだ……。だがゼブルさん、これほどのことをしていて王宮に戻るのか？」

「いや、我々は別の場所に行く。グレイ・グレファス、君は海軍と魔術協会にこう報告するんだ。……途中で海賊に遭遇。船を破壊され氣づいたら浜に打ち上げられた。……で良いだろ」

「船無しでビリヤッテ？」

「なあに、魔法だよ。テレポート……そこに隠れているコージ・K・レクティードを含め3人飛ばしてやる」

「……バレてたか」

木の陰から頭を搔きながらコージが出でくる。グレイとギルティーはまったく氣付かず驚く。

「…………わい、転送しあつ

「ま、待て……」

グレイが何かを言い終わる前にバアルはテレポートを使う。ギルティーとバアルの前からグレイ達3人が消えた。

「…………ギルティー、君は生き残っている海軍および海賊達を始末し

てくれ

「了解しました！」

ギルティーは海軍や海賊を殲滅させるため、走り出した。ギルティーの姿が見えなくなつてバアルは草むらを見る。

「いい加減にそこから出でたらどうだい？」

「……ツチ

草むらから出でたのはティザとワインティーネだ。

「何で君のようなガキ共が居るんだい？」

「……魔術協会を潰すための修行だ！」

「……君はもしゃ裏の奴らを見たのかい？」

「……裏だと？」

「ああ、魔術協会の一部……主に上層部の奴らが集まつてできた裏魔術協会。彼らは平氣で犯罪を起しそんだ。まあ彼らは数年前に滅んだよ」

「滅んだ？」

「そう。君が恨みを持つ奴らもとつて死んでるだろ？……それにしても天人がいるとはね」

バアルはウインディーネを見つめる。ウインディーネは自分のことを魔人だと思っていたので驚いたように、ディーザを見る。

「……そうだ、お前は天人だ。ルーと相性が悪くてな、刃向かわせないように嘘をついていた。もづ、復讐は出来ないようだからバラすがな」

「ほう。私の言葉を信じるか……。まあ事実だからな。さて、少年、少女よ。我々についてこないか?」

「「え?」」

「もづの島で生き残っているのは私達だけだ。それに少なからず復讐心は残っているのだろう? なら、そんな魔術協会を……国を支配しないか? 我々になら出来る」

バアルの言葉を黙つて聴いていたディーザは、バアルを見つめゆつくりと口を開く。

「俺は……」

……クロリア王国に少しずつだが確実に危機が迫っていた。

第31話（前書き）

* 注意事項 *

馱文、短め。読んでくれる皆様に感謝です。

王宮に特別講師アスター・ヴァイヤーが来て数日。冬季休業も残りわずかと迫った日のこと。魔術騎士団訓練所でアスターはルベライトに稽古をつけていた。

「ふむ。悪くない、むしろ素晴らしい。ルベライト様は才能があります」

「そ、そろか？」

ルベライトは恥ずかしそうに頭を搔く。

「……ですが、技の出し方が雑、実戦にはまったく向いてません。まず剣を振るときに安定していません。ぶれていると威力が格段に落ちます。力任せに振っていては強くなれません。まずは基礎から始めましょう」

「あ、ああ」

「頑張つてください、ルベライト様。技術はダメダメですが才能はありますから」

「……わかった」

才能はあるが技術はない。ハッキリ言われたルベライトは落ち込みながらも再び訓練を始める。

マジックゲート敷地内図書館

キースとプルムは2階で読書をしていた。キースは黙々と読んでいるが、プルムはつまらなそうに「パラパラ」とページをめくっている。

「なあ、キース。窓から外見て見りよ。雪、積もってんぜ」

「そうだな」

「雪合戦つて楽しいよな。他にも雪だるま作ったり、かまくら作つたり……」

「そうだな」

「……察しろよ……こんな口に室内で読書なんてつまらない！ 外に出て遊ぼうぜ……」

チラリとプルムをみたキースはため息をつき、こいつ言った。

「寒いし面倒だ」

「バンツー！」

プルムは机を叩き立ち上がる。その音が図書館に響き渡る。ちなみに2人以外に図書館職員しかいない。

「寒いなら体を動かせば良いだろー！」

「疲れるだろ、面倒だ」

「彼女が遊ぼうって誘つてるんだ！ 彼氏としてどうなんだそれは！」

「今もこいつして2人つきりでいるだろ。それに外では学生達が馬鹿みたいに遊んでるんだ、それともお前は2人つきりは嫌なのか？」

「そ、それは……。もちろん2人つきりが良いよ。だけど……」

「……ツチ、わかつたよ。その代わり今度何か奢れよ」

「え、良いの？ わかつた、ありがと」

はしゃぐブルムに苦笑いしながらキースは立ち上がり、2人は外に出る。

「……帰ろつか」

「ぶつ殺すぞテメエ！ 外に出て第一声がそれかよ、テメエが外に出たいって言つたんだろうが！」

「だ、だつてこんなに吹雪いてるなんて」

そう、今日は吹雪だ。数メートル先までは見えるがそこから先はよく見えない。さらには冷たい風と雪が絶えず体に叩きつけられる。

「絶対に帰らせないからな！ さあ、まず何する雪合戦か？」

「え、ええー」

プルムは若干引きながらキースをみている。すると、ビリーからか笑い声が聞こえてきた。

「はつはつは！ 」これはキース君ではないか

2人は声がした方を見る。するとイドリアが腕を組んで笑いながら2人を見ていた。

「ああ、負け犬先輩ですか。お久しぶりです」

「だ・か・ら、負け犬じやなくてマケインだろうが！」

「そんなことはどうでも良いんです。つてか負け犬もマケインも変わらないでしようが、馬鹿なんですか先輩」

「どうでも良くないから、変わるから、馬鹿じやないから！ 何でそんな」と言われてんの俺！」

「負け犬だからじやないですか？」

「ねえ、キース君。君喧嘩売つてるよね。しうがない、自称雪合戦の貴公子が雪合戦で勝負するよ」

「雪合戦の貴公子つてなんだよ……」

「自称つて……」

2人してイドリアを呆れたように見つめる。

「さあ、まず第1投目だ」

シユツ……ベチャ。

イドリアが投げた雪玉はキースの顔面に直撃する。

「……受け立ちますよ、負け犬先輩イ！」

ビシユツ……「ゴツ！」

キースが放つた雪玉はイドリアの顔面に当たる。

「イタツ！ 石入れてるよキース君！」

「石入れてこそ雪合戦でしょ！ が！」

「危険すぎるー！」

「行きますよ先輩！ 必殺分身玉！」

キースはたくさんの雪玉（石入り）をイドリア目掛けて投げまくる。

「それ分身じゃない、たくさん投げていいだけじ……イタツ！ 何、全部石入り？ これ雪合戦じゃ……ギャアアアツ、目があ！」

「……えっと、帰ろー」

ブルムは2人を置いて部屋に戻る。2人の雪合戦（というの

方的なイジメ）は夜遅くまで続いていた。

翌日、雪合戦が繰り広げられていた場所には雪の上に赤い液体が飛び散っていたそうだ。

第32話（前書き）

* 注意事項 *

馱文、短文注意。隨時アイデア等募集中！

冬季休業最終日、学院の敷地内に学生が作ったかまくらでアークは寝ていた。かまくらの中には火がついたロウソクが暖房としておいてあつた。

アーク・アルシェル、中等部3年2組15歳はAランクだ。実際、試験は手抜きなのでSランクなのかもしないが。

「あ、アーク君みつけ」

ふとかまくらの外から声が聞こえる。アークが目を開けてかまくらの入り口をみると、少女がのぞき込んでいた。アークは体を起こし少女に話しかける。

「エニアか……どうしたんだ？」

エニア・フィサリス、中等部3年2組で密かにアークに好意を寄せている。アークはカッコ良く女子からだけではなく男子からも人気がある。

エニアはアークに告白しようとは一度も考えた。しかし、アークが中等部だけではなく高等部の女子から告白されるがこと「」とく断つていることを知り今ではあきらめている。告白に失敗してギクシャクしてしまうのは絶対に嫌なので、それなら友達以上恋人未満の関係で居続けようとしている。

「かまくらを見かけたから誰か居るのかなって……1人で作ったの？」

「ああ、魔法を使った。……他の奴には内緒にしていてくれないか？」

「うん。というか魔法使ってよくバレなかつたね」

「……まあ、僕は魔法の天才だからね」

「自分で天才つて……」

「事実だから。エニアも中に入れば？ 2人くらいは入れるし、暖かいからな」

「ん。じゃあ、お邪魔します」

エニアはかまくらの中に入り、アークの隣に座る。体が密着しているがエニアは気にしないようにしている。エニアはドキドキして顔も赤い。エニアはアークに顔を見られないように注意している。

「うわあ、暖かいね」

「そうだね」

2人はかまくらの中でもまるで恋人のように体を寄せ合つている。エニアは、恋人だつたら抱き寄せられたりしてるのでかな？ と妄想していた。しばらく、2人は話すこともなくジッと座つていた。

「……そういうばアーク君は好きな人居ないの？ 噂で聞いたんだけど中等部以外にも高等部の先輩達からも告白されて、でも全部断つてるらしいって……」

「噂は本当だよ」

「へえ。なら、やっぱり好きな人居るのかなあ？」

ヒーラはニヤニヤしながらアークを見る。

「……そうだな。居るよ」

「え？ あ……そ、そうだよね。やっぱりか」

明るく言つヒーラだが、内心ガツカリしている。

「……ヒーラはどうなんだ？ 好きな人は居るのか？」

「わ、私？ 私は……居ないよ」

「ん、そ、うなんだ……」

「うん。……好きな人に告白してないの？」

「ああ。……人に告白するのが不安でね。告白されることが多いんだけど、女子が告白すると男子が告白するのって違うだろ。それに、もしかしたら相手の方から告白して来てくれるんじゃないかなって考えてね。……僕って自意識過剰なところあるよね、自分が両思いだと思ってるって」

アークは自嘲している。その様子を見てヒーラは何か声をかけた
かつたがかける言葉が見つからなかつた。

「……どうしたら良いと思う？ 自分から告白した方が良いと思つ

か？」

「わ、私に聞くの？」

「ああ、今ここここののはエニアだけだ。……それに信頼してるんだ」

「え？……私を？」

「ああ。そういうえばエニアとは学院に入る前、幼稚園の頃から付き合いだよな。エニアが告白した方が良いって言うなら告白する……どうなんだ？」

エニアは迷っていた。アークの告白はほぼ確実に成功するだろう。だが、正直に言つとアークが他の女子と仲良くしている様子は見たくない。もし、告白しない方が良いと言つたらアークは相手からの告白を待ち続けるだろう。

「わ、私は……告白した方が良いと想つ」

「……そりが、ありがとう。……一つ聞くがエニアは僕のことをどう想つ？」

「…………？」

「…………いや、考へている時なんだか辛そうな表情をしていたから」

「もしかして……私がアーク君のこと好きなんじゃないか、とか思つてた？ 仮にそななら告白した方が良いとか言わない。それに……私、アーク君のこと仲が良い友達くらいにしか思つてなかつたし。

「…………」
「…………すまない」
「…………」

アークは俯ぐ。ニアの田には何だか震えているように見える。
…………言い過ぎた、ニアはそう思つ。心にもなにことを、自分が言
われたら傷つくことを…………だが、もう後には引くことはできない。

「…………せひ、早く告白して来なよ」

「そう、だな」

アークはゆうべつとかまくらの外に出る。…………行つてくる、ニアにそう言つたアークは駆け出した。

「…………はあ。私、なんであんなコトを」

自分のことを信頼していると言つた。好きな人にそう言われかなり嬉しかつた。…………だからこそ告白するように言つた。

告白は成功するだろう。それでもアークは何時も通りに接していくだろう。もしかしたら、そのことがアークの相手に誤解を生むかもしれない。それでアークが不幸になるくらいなら自分が嫌われても良い。

きっと、明日からアークは自分に話しかけることはかなり少なくなるだろう。

…………これで良いんだ。

エニアは自分に言い聞かせる。だが、何故か寂しく感じる。これで良いはずなのに……涙が流れてくる。

エニアは一人かまくらの中で泣いていた。

第33話（前書き）

* 注意事項 *

馱文。短い。あまり話は進んでない。

アークはクロリアの街をふらふらと歩いていた。アークが告白しようかと考えていた相手、それはエニアだった。そのエニアは自分のことを見ていなかつた。

「……ふ、ふふふ」

……本当に自意識過剰すぎたのかもしない。学院では努力という努力はしたことはなかつた。それでも、基本的に何でも出来た。他人にもてはやされ、天狗になつていた。

「ぐ、はは、はははは！」

……馬鹿だ。自分でもそう思つ。エニアとは所謂幼なじみ。小さな頃から過ごしてきてエニアのことが異性として気になりだしたのは初等部6年の頃だ。

……自分で言つのも何だが初等部の頃からモテていた。女子は話しかけてくるがすぐに恥ずかしそうにして去つていく。そんななかで普通に接してくれた女子はエニアだけだつた。

アークは歩きながらどこか自嘲気味に笑つてゐる。すれ違つ人達はアークを気持ち悪そうに見つけてゐる。それもそうだ。街中を笑いながら歩く様子は変になつたようにしか見えない。

「ぐ、ぐぐぐ……」

気づくとアークは街を出てクロリア北の森を歩いていた。クロリ

アの北、東、南には森が広がっている。西には草原が広がっている。
……今は雪で一面真っ白だ。クロリア北の森には精霊が棲むと言わ
れている湖がある。

アークはその湖に来ていた。光に照らされ湖の表面と積もつてい
る雪がキラキラと輝いている。水は澄んでいて魚が泳いでいる様子
が見える。湖の真ん中には陸地があり祠が建っている。

「……綺麗だな」

アークは湖の近くに腰を下ろし、水中で泳いでいる魚を見ている。
春ならば花畠も見れるらしい。

「あれ？ 先輩何やつてるんですか？」

「ん、ああ君か。いや……ちょっとね」

アークが振り返るとそこにいたのはルキス・フィサリス。中等部
2年でエニアの妹だ。ルキスは首を傾げてアークの隣に座る。

「悩み事なら私に相談してください！ 微力ながら協力しますよ」

「はは、気持ちだけで嬉しいよ」

「そうですか？ ……あ、あの、先輩」

「なに？」

「寒いので、え、えっと……寄り添つても良いですか？」

「あ、ああ。かまわないよ」

「あ、ありがと「ハヤハヤ」ます!」

ルキスはアークにピタリと寄り添つて、腕を組んでくる。ルキスは顔を赤くしているが、アーチはちょっと驚いているだけだった。

しばらく、2人は無言で湖を見つめていた。ときどきルキスはアーチを見てはいるが、ルキスの視線の先に映るのは変わらない。

「……先輩、好きです」

「……え?」

「好きなんです先輩のことが! 私、幼稚園の頃から先輩に惹かれしていました。初めは兄のように感じていましたが、だんだん恋心になつて……。先輩が告白を断り続けているのは知っています。ですが……も、もしよろしければ付き合つてください!」

ルキスは言い終えた後、恥ずかしそうに俯いた。

「……ルキス、顔を上げてくれないか?」

「は、はい。なんですか?」

「気持ちちは嬉しい。だけど付き合えない」

ルキスは悲しそうな表情をしたあと俯く。俯いたままルキスは口を開いた。

「……どうして、先輩は告白を断り続けているんですか？」

「……好きな人が居るんだけど、告白しようと思つていてね。……
まあ、相手は友達にしか見てないみたいだけね」

ルキスはゆっくりと顔を上げる。

「……先輩、私はそれでもあきらめませんから。絶対に先輩を虜にしてみせますからね！」

「……そつか。期待してるよ」

微笑むアーヴを見てルキスは目を奪われる。……いつか、この笑顔を……先輩を自分のものにしたい。

そして、ルキスは決意する……。

絶対に先輩を落としてみせる！

第34話（前書き）

* 注意事項 *

馱文注意です。読んで下さる皆様、お気に入り登録をして頂いた
皆様に感謝です。

グレイ、リュージ、ノエルの3人はコーラル近くの浜辺に倒れていたところを海軍のパトロール隊に発見された。3人は海軍に報告した後、クロリア王宮に戻った。

魔術協会会長室

「……答えてください！ アナタも今回の件に絡んでいるんですか？」

「口を慎め……それに貴様等には魔術騎士団を辞めてもいいつ

「ど、どういふことですか？」

「ふん。魔術騎士団であるにも関わらず任務に失敗し、ノロノロと自分達だけ戻つて來た。魔術騎士団始まって以来の恥さらしだ」

「……それが事情を知らない者達からの我々の評価ですか」

「ああ。事情を知るのはほとんどない。……国中に広まるのも時間の問題だ。ああそうだ、国王様からの評価も同じだ」

「私達は悪くない！」

「何と言おうが貴様等が王宮を出て行くことは決定事項だ。これは他の魔術騎士団隊長、魔術協会6将が会議で決めたことだ。その意見に賛同した者、団体を1つずつ言つても良いが日が暮れるだろう

「……我々はどうすれば良いのですか？」

「まずは王宮を去ること。そして街を去る。……幸いにも魔術騎士団のメンバーを知っている者は限られわずかしかない。出来る限り遠くの街、または国外で静かに暮らせば良い」

「……わかりました」

3人は会長室を出る。

「……実家に帰らつかな」

「ヒトワール嬢の実家というと、魔法具の一流メーカーだつたな。最近では小型魔力增幅装置が売れているとか聞いたな……ついてきて良いか？」

「良いよ。レクティードはどうするの？」

「俺は旅に出る。前から行こうかと考えていたが良い機会だ。クロリア王国中を自分の足で回る」

「そつか。なら行こうかグレフアス」

「ああ、じゃあなレクティード」

「ああ、またな」

リュージは2人を見送ると歩き出す。向かったのは北の森にある湖。その奥には樹海が広がり常に霧がでている。別名迷いの森。樹海の途中に小さな村がある。その村の建物はツリー・ハウス、木の上

に立っている。上に登るハシゴはあるが、霧で気づかない者が多く、村の存在をしる者は少ない。

樹海の先には山脈がある。山脈は大陸を半分にするように横に広がっている。なお、大陸全体がクロリア王国で、他にも大陸は存在するが、大陸全体が一つの国であることはクロリア王国以外はない。ちなみに大陸の端から端まで続いている山脈の中に世界で一番大きい山がある。その山は平地からだと頂上は見えない。頂上には竜が居て世界を見守っていると言われている。

リュージは樹海の村ナイリアに着き、ハシゴを登る。ハシゴは1つしかなく、ハシゴのさきは宿屋の中だ。

「あ、おかえり、リュージ様」

「久しぶり。師匠はどこにいるかわかるかい?」

「……ショウゾウ様でしたら2階の大広間で酔っ払っています」

「変わつてないな」

「リュージ様は立派になられましたね」

「……ありがと、リハ」

「いえ……それにしてもいきなりビリウされたんですね?」

リュージはリハに自分が魔術騎士団を止めたことを伝える。島でのことも包み隠さず。

「……つまり、そう遠くはない未来に王宮を中心に戦いがあるんですね」

「そうだな。……王宮内には既に敵が潜伏してると思う。戦いが始まると前に信頼できる仲間を探さないといけない。その旅に出ようと思つ」

「そうですか……まずは師匠に協力してもらひつんですね」

「ああ。行つてくる」

リュージが2階に上がり大広間に行くと醉っ払いがいた。醉っ払いがリュージに気がつくと立ち上がって近づいてくる。

「久しぶりじゃなリュージ」

「お久しぶりです。師匠は相変わらずのようですね……」

「ふん、お前以降儂の修行についてこれる奴が来ん」

「確かにあの修行は何度も死にかけましたからね」

「それに最近の若者は根性が足りん」

「だからって昼間から酒ですか……」

「暇なんじゃからしうがない……で、ビリしたんじゃ?」

「実は……」

リュージはミリに話した内容をショウゾウに話した。話をしている間、ショウゾウは難しい顔をしていた。

「……わかった。出来る限りのことは協力しよう。教え子達にも連絡しておく」

この世界の連絡手段に電話がある。だが、電波は魔獣を寄せつける可能性があり、電波の代わりに魔力波を使った魔力電話が使われている。魔力波とは魔力を電話に送ることで発せられる電波のようなものだ。魔力と異なり魔力波は魔獣に感知されない。

「ありがとうございます」

「それで、まずはどこから行くのか？」

「クロリアの西にある都市ヴォールに行って飛空艇に乗って山脈を越えようと思つ」

飛行艇は数種類存在する。普通の船にプロペラやエンジンを使って浮かす物、気球のように袋状の物をガスを入れてゴンドラのようないものを浮かせる物、潜水艦にプロペラやエンジンを使って浮かせるような物など多くの種類がある。

「……気をつけるんじやぞ」

「ああ……お爺ちゃん」

クロリア～ヴェール往復大型魔獸車内

魔獸車には種類があり、小型・中型・大型の三種類がある。小型は3人乗り、中型は6人乗り、大型魔獸車は大人用の移動手段として用いられる。どれも魔獸が引っ張る。

また、乗り物専用の魔獸の研究も行われているようだ。

ノエルの実家に行くには飛行艇に乗つて行くのが早いので、飛行艇に乗るためにヴェールに向かつっていた。大型魔獸車に乗り込み、2人は話をしていた。

「へえ、グレイは元騎士長の奥さんに会つたことがあるんだ。……私と奥さん、どちらが綺麗？」

「それは……ノエルだよ」

「ちょっとー、さつきの間は何よ」

「何でもない」

グレイとノエルは仲良くなり、名前で呼び合つまでになつた。

「そりいえば、グレイの実家は何処なの？」

「俺？ 俺は北クロリアの一番北だ」

クロリア王国は真ん中に広がる山脈から上を北クロリア、下を南クロリアと分けて呼ばれている。首都クロリアは南クロリアだ。

「一番北ってクルクだよね。コーラルの次に大きな港町の

「そうだ。……さて、そろそろ着くな」

「みたいだね」

魔獣車がヴォールに着いた時には日が沈みかけていた。2人は宿に泊ることにした。

「えっと、申し訳ありませんが今部屋が一つしか空いていません」

「だつて。一緒に部屋で良いよね」

「は？ ま、待て。男女が同じ部屋だぞ？」

「私は気にしないよ。それにグレイのこと嫌いじゃないよ。むしろ好き。……変なことはしないでよ」

「あ、当たり前だろ！」

顔を真っ赤にして言うグレイ。ノエルは、即答しなくても良いじやん……とつぶやいた。

宿屋の食堂で夕食を食べ、2人は眠りについた。ちなみに部屋はダブルベッドが1つだけしかなく、冬であることから密着して眠ることになり2人はドキドキしてなかなか寝付けなかつた。

第35話（前書き）

* 注意事項*
短め駄文。

冬季休業明け、三学期初日。体育館にて始業式が終わつたあと、この日は帰りのホーム後午前中で下校となる。

帰りのホームが終わり放課後……。

「シル君、食堂行こい」

「そうだな」

アイリはシルフィードと一緒に食堂に向かつ。食堂につくと人だかりが出来ていた。

「？ 何だらうな…… 食事の邪魔だといつのこ

「はは……。あ、プルムが居るから何かあつたのか聞いてくるね

アイリは人だかりの近くにプルムを見つけ、歩みよる。ある程度近づいてくるとプルムもアイリに気づいた。

「あ、あ、あ、アイリ！ 大変、大変なんだよー！」

「ど、どうしたの？」

「な、なんと……王子が学院に通うことになつてね。俺達4組に入つたんだ」

「お、王子ってルベライト様？」

「それ以外に誰が居るんだ？」

「あ、キース」

「学院も何を考えているんだろうな。Gランクが2人もいるクラスに将来国のトップになる人間を……」

まあ、クラスの生徒も教師も俺等を王子と話さないよう見張つているが、と遠目で様子を眺めている教師を睨みながら話す。

アイリが苦笑いしていると、ルベライトは何かを見つけたよう歩き出す。生徒達は邪魔にならないように道を作り、その様子を見ている。

「……久しぶり、シル」

「ああ、そうだな」

王子とシルフイードが仲良く話している様子を見て、ほとんどの生徒、教師が目を見開いて驚いていた。

「え、シルと王子は知り合いなのか？」

「王宮に行つた時に友達になつたらしいよ」

「へえ……。」「、」

2人が向かつてくるのに気づいた3人は若干緊張したような表情をする。

「はじめまして、ルベライト・セイフアートだ」

「は、はじめまして」

「アイリ、そんなに緊張するな

シルフィードは笑いながら言つたが、気軽に王子に話しかけることが出来るのはほんのわずかだ。

「もしかして、シルの彼女かい？」

「は、はい」

「こんな美人の彼女が居て羨ましいな。俺なんか出会いは全くないからな」

「中等部じゃないか。まだまだこれからだ」

「シルにはもう彼女がいる。説得力はないな」

「ははは」

「ほ、本当にルベライト王子と友達だったんだね」

「そうだ、シルの友達なら俺とも友達になつてくれ」

ルベライトはアイリ、ブルム、キースを見る。3人は驚いたように顔を見合わせる。

「え、えっと……私達なんかでよろしければ……」

「よし、ならば決定だ。敬語は無しで良い……よろしく」

「「「よ、よろしく」」

ルベライトはこまかに困惑している3人に手を差し伸べ握手を求める。3人はおそるおそる手をだし握手した。

「えっと、みんなは昼食は食べたのか?」

ルベライトの問いに首を横に振る3人。

「なら一緒に食べよ!」

350

5人が適当に席について昼食を食べていると周りから視線が突き刺さる。5人中1人が王子、1人がSランク、2人がGランク……注目を浴びるのは当然かもしれない。

アイリとキース、プルムは緊張しているからか、いつもより食べるスピードが遅い。対してシルフィードとルベライトはしゃべりながらもパクパクと食べている。

「そういえば、何で学院に?」

「ああ。今、魔術騎士団に特別講師がいるんだけど、その講師から学院について知つておくと良いとか言わされてな」

「なるほど。だが、学院行きたかったから願いが叶って良かつたじゃないか」

「ああ、そうだな……寮は1人部屋らしいからも、たまに遊びに来いよ」

「約束する……。それで、昼からどうするんだ?」

「学院のどこに何の教室があるか分からぬから案内してくれないか?」

「ああ、わかった」

シルフィードとルベライトは立ち上がり、食堂をあとにした。3人は2人が出て行ったあとホッとため息をつく。

「緊張したあー」

「王子と友達か……悪くない」

「わ、私が王子と友達なんて……」

ブルムはまだ緊張していたのだが……。しばらく3人は周りから視線を浴びていた。

第36話（前書き）

* 注意事項*
かなり短めです。

「ほり、早く行かないと出航するぞ」

「ま、待つてよ」

グレイとノエルは、ヴュールの飛行艇乗り場に居る。ヴュールの飛行艇は船にプロペラなどがついているタイプだ。飛行艇は客1人1つもしくは数人で1つの部屋が用意される。

2人は1つの部屋で過ごす。飛行中は外に出て空からの景色を見ることができる。

「ねえ、グレイは飛行艇初めて？」

「いや、一回だけ魔術騎士団に入る時に乗った」

「そういえば、グレイって私が騎士団に入る前にはすでに隊長陣に選ばれたんだよね。同じ年なのに凄いよ……まあ、でも私達隊長陣って高等部の頃から騎士団に入ってる人多いんでしょ？」

「まあな。高等部から魔術協会や海軍の協力のためならば出席しないで良いとあるからな。最低条件として成績を保ち続けることがあるけどね」

「そうだったね。……私は上等部の時に入ったんだよね」

「途中でマジックゲートに転入したんだつけ？」

「そう、その時に初めて飛行艇に乗ったんだ……よし、そろそろ出航だから外で景色みようよ」

「ああ、そうだな」

2人が甲板に出た時には既に船は浮き上がっていた。ふと、グレイは酔つたのか気持ち悪くなつたらしい男を見つけ話しかける。

「大丈夫ですか？」

「あ、ああ。何のこわしき……グレーファスとエトワール嬢か」

「なんでレクティードが？」

「ああ……仲間探しだな」

「ま、まさか戦つ気？ 無理だよ、あんな強かつた海賊達を樂々倒すような相手でしょ……」

「それでもだ。世界は広い。このクロリアにも、まだまだ知らない猛者達が居るはずだ。魔術騎士団よりも強い奴らが……」

「魔術騎士団よりも強い奴らなんて……」

「……元魔術騎士団か」

「そうだ。マジックゲートの学院長を初めとする伝説の魔術師達も居る」

「……でも」

「別に協力してくれと言つてもりはない。協力してくれるとありが

たいがな」

そう言つてリュージは、ふらふらと部屋に戻つていつた。その様子を2人は心配そうに見ていた。

3人の話を聞いていた者達がいた。顔はフードで見えず、ローブを着て怪しげな雰囲気を出している2人組の男だ。

「……伝説の魔術師、ねえ。……どう思つるー君？」

「サア。デスガ、ナーカガガオキルヨウナキハシマス」

「だね。さて、私達の出番は来るのかな？」

「ドウデシヨウカネ。……オレハアナタニツイティキマスカラネ」

「いきなり何だい？ 気持ち悪い」

「……ヒディデスネ。オレヲタスケテクレタノハアナタデス……メシア」

「ああ、そういえばそうだつたね。かなり昔のことだつたから忘れてたよ。何年くらい前の話だつけ？」

「ニヒヤクネンホドマエノハナシデスネ」

「……そつか。もつそんなに経つのか。……早いね」

「……オレハナガクカンジマシタ」

「はは、君も後数百年生きれば分かるよ。私達はちっぽけでこの世界の一部にしか過ぎない。だが、少しずつ行動を起こしていけば世界は変えられる。現に同士も世界中にいる」

男は手を太陽へと伸ばし、拳を握る。もう一人の男はそれを眩しそうに見ている。

「……イヨイヨデスネ」

「ああ。……世界の破壊。そして再生。それを成し遂げた時、私は
変わるんだ。救世主メシアから神へと……」

第37話（前書き）

* 注意事項 *

馱文です。読んでくれる方々に感謝。

ヴェールを出発した飛行艇は数時間で目的地であるヨルガの街に着く。ヨルガは北クロリアと南クロリアを行き来する飛行艇乗り場がある。飛行艇は北クロリア間を行き来するものもあるが、南クロリアに行き来する飛行艇はヨルガからしか乗ることが出来ない。

ちなみに、南クロリアでは飛行艇があるのはヴェールだけだ。

グレイとノエルの目的地はエクステンドという北クロリア最大の街だ。そこは山に囲まれた街で飛行艇を使って行く場合がほとんどだ。2人はエクステンド行きの飛行艇に乗り込んだ。

リュージは歩いて北クロリアを回るようで、2人と分かれて行動することにした。ちなみに、飛行艇に乗り込んだ2人はまた同じ部屋だ。

「思うんだが、北クロリア最大の街が山に囲まれてるなんて不便すぎないか？ 山を越えるか飛行艇に乘らないとこれないなんて……」

「だから北クロリア最大の街になつたんじゃないかな。わざわざ苦労してまで来る盗賊つてほとんどいないし、他の街に比べたらかなり平和だと思つ」

ノエルは自分の産まれた街エクステンドに対して誇りを持つているようで、嬉しそうに話している。

「安全なんだ」

「うん、安全だよ」

ノエルが微笑んだ時、急に周りが騒がしくなる。何事だろうと耳をすませると……。

「俺達はエクステンドの盗賊だ！ 金をだせえ」

グレイとノエルは顔を見合せぬ。

「……安全なんだ」

「……うん」

2人は巻き込まれたくないと考え、部屋でおとなしくしていることにした。……が、盗賊が扉を蹴り飛ばした。

「おひおひ、邪魔して悪いねカッフルさん。金目のもの渡してくれれば今すぐ立ち去るけ……ど……」

部屋に入ってきた盗賊の1人がノエルを見て、目を見開く。ノエルも、盗賊を見てどこか見覚えある顔だと思う。

「えつと……誰だったかな」

「お、俺だよノエル姉」

ハツヒノエルは思い出す。自分のことをノエル姉と呼んでいたのは1人。家の近所の年下の子供で幼なじみ。

「もしかしてロッキー？」

ロッショ・クワルツ、ニックネームはロッシー。エトワール家の近所。ロッショの父親は一流魔法具メーカー・エールの製品制作部門の部長をしている優秀なエンジニアだった。ちなみにエールというメーカーの社長はノエルの父親だ。

「なんで、ロッシーが盗賊なんか……」

「家が火事になつてよ、全焼して1人生き残つてしまつたんだ」

「だからって盗賊になんか……。私の父さんに頼めば……」

「……ヴォームさんにはエトワール家で暮らさないかつて言われた。だけど、今までずっと助けてもらつてきた。もつ、これ以上迷惑をかけたくないんだ」

「迷惑だなんて父さんは思つてないよ」

「……それでも、俺は」

ノエルとロッショが言い合つているのをグレイは黙つてみている。その時、また盗賊が部屋に入つてきた。

「おい、何やつてんだ！」

「す、すいません」

「ん、だれだその女」

「あ、エトワール家の長女です」

「……エトワールって言つたらエールの。おい、その女を捕らえろ」

「は？」

「その女を捕まえてエトワール家から金を巻き上げるんだ……早くしろ」

どうやら、入ってきた盗賊はリーダーのよつで、ロッショウとむつ1人の盗賊は慌てて縄を持つてくる。

「……私がそう簡単に捕まるとも？ 私はランク、連れもランクよ」

「ふん、だからどうした？ これ知つてるか」

盗賊リーダーは懐からビンを取り出す。中には小さな蜘蛛がびつしりと入つて蠢いていた。

「蜘蛛……気持ち悪い」

露骨に嫌な表情をするノエルにムツとした盗賊リーダーだが、蜘蛛について説明する。

「この蜘蛛はな、吸魔蜘蛛つていってな、高い魔力を持った生物にまとわりつき魔力を吸い取るんだ。野生の吸魔蜘蛛にまとわりつかれたら、早く取り払わないと魔力が吸い尽くされる。

魔力がなくなつたと吸魔蜘蛛が感じると今度は血液を吸い取る……まあ、吸魔蜘蛛に覆い尽くされた生物は助からないと言つても過言じやない。

「Jの吸魔蜘蛛は、手懐けているから俺の意のまま……」

盗賊リーダーはビンのフタを開ける。

「……やめなさい」

「黙れ、温室育ちのお嬢様が！」

盗賊リーダーはビンをノエルに向かつて投げる。普段であれば余裕で対応できるのだが、盗賊リーダーの言葉に一瞬動きを止めてしまった。

……防ぐことにノエルは失敗し、ビンの中から飛び出て来た吸魔蜘蛛に身体中にまとわりつかれてしまう。吸魔蜘蛛は身体に貼りついた瞬間に糸を吐き出し振り落とされないように身体を固定する。

「や、ヤバ……ぐわああああっ！」

吸魔蜘蛛が魔力を吸い取るために一斉にノエルに噛みつく。ノエルは激しく痛みを感じるとともに急激に魔力が抜けていくを感じた。ノエルは激しい痛みに悶え苦しむ。

「ノエル！」

グレイは吸魔蜘蛛操る盗賊リーダーに攻撃しようと駆け出す。

「おいおい、俺が意識を失つたりしたら吸魔蜘蛛は本能がまま……わかるよな。そうなつたらエトワール家の長女は死ぬ」

「ぐつ……頼む、吸魔蜘蛛を止めてくれ！」

「……なら、金田のものを置いてこの部屋から出る。そうすれば吸魔蜘蛛を止める。だが、長女は解放しない。エトワール家から金を巻き上げないといけないからな」

「……わかった。ノエルには絶対に手を出すな。……ノエルを傷つけないでくれ！」

「もしかして、この女が好きなのか？　ははは、そつか、なら助けたいよな」

「いいから、早く！」

「……さらに条件をつける。吸魔蜘蛛をまとわりつけて飛行艇から飛び降りろ」

「……何？」

「お前のことだ。愛する者を危険を顧みず助けようとするだろ？　計画の邪魔をされたら困る。……手を出さない」とは約束する

「……わかった」

「……戻れ」

吸魔蜘蛛達がビンに戻つてていく。ノエルは魔力をかなり吸い取られたが激しい痛みから解放された。ホツとしたノエルは床に横につたまま大きく息をしている。

「もしかしたら、生きているかもしれないが、高いところから落ち

さらに吸魔蜘蛛をまとわりつかせていれば、ほぼ死ぬ。別れの挨拶
ぐらいさせでやる」

グレイはノエルに近づく。足音にビクッとしたノエルだがグレイ
だて気がついて安心する。

「……大丈夫か？」

「うん……まだ、体に力が入らないけどね」

「そつか……話は聞こえていたか？」

「……ダメだよ。グレイが私のために死ぬなんて

「……すまないな」

グレイはそう言ってノエルから遠ざかって行く。

「グレイ！ ダメ、私を……私をおいていいかないで！」

「……ノエル？」

「……こんな時に言うのはおかしいかもしれない。でも、今だから
伝えたいの。私……グレイが好き」

「……ははははははははは……こりやあ驚いた。まさかの両思
いかあ？ お互いの思いをわかりあえたのに、無残にも引き裂かれ
る2人……もう一度と会えない想い人……泣かせるねえ！ ぎゃは
はははははは！」

最後にやつちゃえば？ 最後の思い出ぐらい作らせてあげるぜ……

……くかかかかかっ！」

「……金田のものは置いた。あとは蜘蛛をまとわりつかせて飛び降りるだけだ」

「……ふん。思い出作らないのか？ つまんねえな」

「俺はお前を楽しませるために生きてるんじゃない」

「ふうん、もう楽しめたけどな……行け」

盗賊リーダーのかけ声で吸魔蜘蛛がグレイにまとわりつき、糸で身体を固定する。

「……ぐう……！」これで飛び降りれば良いんだな？

「ああ」

「ダメ、グレイ。グレイが死んだ！」

グレイは激しい痛みに耐えながらノエルを見つめる。

「ノエル……お、俺は……ノエルに……ふさわしく、ない……だが、もし……生きて、また……会えたらい……その、時は……じゃあな」

グレイは部屋を飛び出し甲板へ出る。ノエルは盗賊を押しのけて追いかける。盗賊達も追いかけた。

ノエルが甲板に来た瞬間、グレイは飛行艇から飛び降りた。

「ぐ、グレイ！ そんな……なんで……」

ノエルはその場に座り込み涙を流す。

「……ノエル姉」

「おー、ロッショ。女を縛つて倉庫にプチ込んだ……今すぐに」

「わ、わかりました」

第38話（前書き）

* 注意事項 *

駄文、グダグダ注意。よくあることだ、気にするな。

北クロワアにあるエクステンド、その街は山に囲まれ、山の周りには森が広がっている。

「……何のよつだ

「金田のものを置いて行きな」

森の中で1人の学生が盗賊に囲まれていた。盗賊達のアジトはエクステンドの周りにある山のどいにか。ちなみにそのリーダーは今、飛行艇の上にいる。

「……山にも盗賊がいるんだな。まあ、海の盗賊だから海賊、山の場合は山賊というからな」

「なに、」
「イヤ、」
「言つてやがる」

「まあ、慌てるな。俺は逃げないから安心しろ。……それより、仲間にならないか?」

「あ? 結局は命」
「かよ」

「つい最近、仲間達が消息不明になつてや」

「俺達には関係ないな」
「そ……だつたら死ね

「シユツ……。」

「……うつ

学生が刀を鞘から抜くと同時に周囲の盗賊は切り裂かれ息絶える。それを見ていた他の盗賊達は一団散に走り逃げ出す。

「……もう誰もいないか。……と、言つたら良かつたな。……そこに居るのはわかつてゐる。今すぐ出でてくれば、たぶん殺さないかもしないのだろうと心の中奥底深くで少しくらい思つてゐるはずらしいことをどこかで聞いた氣がするようなしないような」

「どれだけ曖昧なんだよ！ つてか途中から本人の意思じゃないからね！」

「お、間違つたようだな。正確には、今すぐ出でてくれば、たぶん殺さないかもしないだろ？ と誰かが言つたような氣がしないわけではないわけだが、心の奥底深くで少しくらい思つてゐるやつがいるはずらしいってことをどこかのだれかさんの友達らしき人が言つたらしいうことを聞いたことがあるかもしないと存在したかどうかさえ怪しい人が言つていたので殺されないはず……と思えるほど人生は甘くはない」

「なんか複雑になつてるし、結局私は殺されるの？」

「黙れメス！ 山賊みたいな輩と仲間な時点でお前の人生終わつてんだよ！ 海賊こそ男のロマンだ！」

「意味分からないし私は女だし」

「ああ……海が恋しい」

「話聞けよ！」

「ふ、今の状況でそんなことを言えるとは余裕だな……田の前に居る男に今にも殺されるかもしだい」というの

「急に真面目になつた！……せつぱり私を殺すのか？」

「気が向いたらな

「え？ なんかいい加減」

「ああ、海を見たい、海に帰りたい、海を飲みたい」

「……飲みたいは流石になつよ」

「なに言つてるんだ？ スープを思い浮かべろ、スープはにじむ」とで具材の栄養やらなんやらがスープに溶け出すんだ。そしてスープは美味しくなる

「……なら海も？」

「そんなわけあるか脳無し。海とか熱せられるか馬鹿。海水とか飲んでも塩辛いだけで、なおさらのどが渴くじやねえか

「……泣きたい

「泣きたいとき泣けばいい

「……アンタのせいだよ

「人のせいにするのは良くない……で、女性が山賊なんかに入ってるなんてな……汚れてる」

「な！ 汚れてなんかいない！ ま、まだ処女だし……」

「……は？」

「……え？」

「いや、汚れてるってのはな精神的にとかそんな感じで……まさかそんな回答が来るのは思いもしなかった」

「だ、だつて……」

「ま、どうでも良いし興味もないからな……さて、今からお前に選択肢を与える」

「……なんだよ」

「……死ぬか、俺についてきて服従を誓うか？」

「……お前つていつたい何者なんだよ」

「俺か……海賊かな」

「……山だぞ」

「山にいるから山賊、海にいるから海賊といつ固定概念は捨てたほうがいい」

「はあ……。お前が強いのはよくわかった。だが、何で私を仲間にしようと思つんだ？ 足手まといだろ」

「駒は多くても困らない。それに俺の好みだからな」

「……っ。賊つてのはそればかりだな。私が山賊に入つた時も山賊達はそんな目で私を見て……」

「賊だけじゃない。男は誰しもが抱く感情だ」

「……正直そろそろ危ないと思つていた。それに、山賊に入つたのは家族の敵をとるためだつた。だけど、敵である盜賊の副リーダーはお前が……。もつ賊になる氣はない……殺してくれ」

「……駄目だ。お前は俺の仲間にする」「……選択肢の意味がないじゃな」

「ふん。嫌になつたらすぐにでも逃げれば良い。ま、お前には帰るところがないんだろ。逃げれば望み通り死ねるはずだ」

「……最悪だね」

「さて、今から賊の残党を探して仲間に引き込む

「残党つて……まだリーダーは死んでない」

「逃げたのか？」

「リーダーは上にいる」

女山賊は空を飛んでいる飛行艇を指差した。

「へえ……なんか振つてきてない？」

「……え？」

飛行艇から何かが落ちてきてる。それも、2人の真上に……。

「……人だな」

自称海賊は振つてきている人を受け止めよつと構える。

「な、無理だろ！」

「ふ、固定概念は捨てろ！ たしかに高いところであればあるほど物の落下時の威力や速度は増す。普通は受け止めようとしたらかなり危険だ。だが、俺の力を侮るなよメス！」

ヒュウウウツ……ズンッ！

「ぐ、何のこれしき！」

宣言通り自称海賊は受け止めた。

「さ、吸魔蜘蛛！」

「……燃え尽きる」

落下してきた人にまとわりついていた蜘蛛だけを燃やし自称海賊

はゆっくりと地面に下りる。落下してきたのは男で氣絶している。

「おこ、メス。何か心当たりは？」

「この男は知らないけど、吸魔蜘蛛はリーダーの……」

「……何とか生きてるな。魔力もまだある。落ちてくる少し前にまとわりつかれたようだな。連れて行く、メスお前にまかせた」

「は？ 私女なのに……。しちがない……格好いいし良く考えたら得かも」

「黙れメス」

「ひどくない！ ビニに連れて行けばいいの？」

「やうだな、エクステンドまでだ」

「ま、まだ山すりつこてないの……」

「ああて、仲間探しの始まりだ」

元山賊、さらに落下してきた男を加え自称海賊はエクステンドへ向かう。

第39話（前書き）

* 注意事項 *

馱文。グダグダ。今年中にもう1話は投稿したいです。

飛行艇は山賊達に乗つ取られた。ノエルは倉庫に閉じこめられている。手足は縛られ、身動きが出来ない。

「……グレイ」

「悪いけど、あの高さから落ちたら助からない。それに、吸魔蜘蛛もいる。吸魔蜘蛛の恐ろしさはノエル姉は身を持つて知つたと思うよ」

「……私が実家に帰るうとしたばかりにみんなに迷惑がかかるなんてね」

「ノエル姉……」

「……ロッシー頼みがあるの」

「何だい？」

「私を今すぐ飛行艇から落として！ 家族にまで迷惑かけたら……」

「……今、縄をほどく」

「え、でもそんなことをしたらロッシーが……」

ロッシーはノエルを縛っている縄を解く。

「……今、リーダーは吸魔蜘蛛を持つていなければ。俺がリーダー

ーの足止めをするから逃げてくれ

「う、ロッキー！」

「……ノエル姉、生きてたらまた会おうな

「私のせいでの、また……」

ロッキーが開けた扉を見つめ、ノエルは涙をこぼしている。

「私だ……私がいるから……」

「……少女よ、何事も前向きに捉えるんだ！」

「キヤアアツ！ だ、誰？」

自分以外に誰もいないと思っていたノエルは驚いて周りをキョロキョロする。

「騒ぐな、後ろだ」

「う、後ろ？ ……ギヤアアアアアツ！」

ノエルが振り向くと、ライオン（たてがみ付き）のマスクをかぶり、革ジャンを着ている男がいた。いきなり、目の前にライオンの顔が現れ、ノエルは悲鳴をあげた。

「おいおい、何を叫んでいるんだ。山賊達にバレるかもしれないだろ」

「だ、誰？」

「俺？ 俺はレオだ」

「……レオさんは此処で何を？」

「寝るだ……気づいた時には飛行艇が動いていた

「……やつですか」

「話は聞いていた。逃げるのだろう？ ビリやつて逃げる？ 空間移動系の魔法があれば良いが、空間移動系は消費魔力がかなり高い。今の君の状態だと無理だろう。空間移動系を正確に使うにはかなりの技術も必要だから使おうとする人間も数えるくらいしかいないだろ。ミスつて壁の中にでも移動したら最悪だからな」

レオは腕を組んでビリしようかと考えている。ノエルも考へているが、なかなか思いつかない。

「……やつぱり飛び降りるしか」

ノエルは結局他に方法を思いつかなかつた。レオは何かを決めたようすで腕を組んだまま頷いた。

「よし、飛行艇を墜落させる」

「は？ 墜落させたら乗客はどうなるの！ それに、街に墜落したら大変じゃない！」

「む……ならば山賊を殲滅させれば良い」

「た、確かにそうだけど……今の私は万全の状態じゃ……」

「……出来る出来ないかが問題じゃない。やるかやらないかだ。さつき行つた少年を助けることも出来るかもしないんだ」

「……そうだ。守られてばかりじゃダメなんだ。でも、その言葉……誰かから言われたような」

「行くぞ、少女よ！」

レオは部屋を飛び出す。ノエルはそれを追つ。しばらく走ると、ロッショウが山賊のリーダーにボコボコにされ倒れていた。

「ロッシー！」

「の、ノエル姉……」

ロッショウはノエルが来たことに目を見開く。山賊のリーダーはノエルではなく、レオを見て顔をしかめた。

「ん。来たのか……それと、レオ。貴様、何のつもりだ」

「助けてもらつた恩は感じている。だが、俺は間違つたことをする人間を止める義務がある。たとえ、恩人であつても……それが、人生の先輩である俺が出来ることだ」

「……レオ、貴様は……っ、ち、良いだろ？。俺を止めてみろ」

山賊リーダーは手を前にかざす。すると、魔法陣が現れる。

「……召喚術か」

バチ……バチバチッ！ 魔法陣から現れたのはライオンの頭と腕を持ち、鷲の足、背には四枚の翼と蠍の尾を持つた怪物だった。

「……何コイツ」

ノエルは今までみたこともない魔獣で、なおかつ高い魔力を感じて後ずさつた。

「コイツは悪魔だ。…… ああ、ソイツ等を殺せ！」

「……キサマか。我を呼び寄せたのは…… 我が眠りを妨げたのは！」

悪魔が目を付けたのはノエル達ではなく、山賊リーダーの方だった。

「な、なに？」

「人間のような下等生物に呼び出されただけでも屈辱的であるのに…… 覚悟は出来ていいのだろうな」

山賊リーダーは雲行きがだんだん怪しくなっていると思い、慌てるが……。

「え、え…… ちょっと待ってくれえ」

「問答無用だ」

悪魔は山賊リーダーを鷲掴みにしてどこかに飛び去つていった。それをノエルとロッショは呆然と見ていた。

「さて、盜賊の残党を殲滅せらる。お前達は倉庫でまつてろ」

そう言つてレオは走り出した。レオの言葉で、我に返つた2人は顔を見合わせる。

「いつたい、何だつたんだ……」

「わからない……。でも、良かつた、無事で」

「……まさかリーダーが召喚術を使えるなんて」

「……そうだね。召喚された悪魔……かなり強そうだつた。戻つてこないと良いけど」

「召喚されたものは術者が氣絶したり魔力切れを起こしたら元の場所に戻る」

時折、山賊達の悲鳴が聞こえる。それも普通の悲鳴ではなく断末魔の叫びに聞こえるが、2人は聞こえないふりをしてレオを待つている。

「やついえば、レオさんつて何者?」

「ワーダーが山で氣絶しているところを助けたらしい」

「氣絶?」

「なんでも修行していたら碎いた岩が頭に飛んできて氣絶したそ
うだ」

「……もしかして、若干馬鹿？」

「……多分。でも、キャラ作りしている感があるんだよな

「マスクも怪しいよね」

「そうだな。マスクの下は傷だらけの顔だったり

「かなり格好いいかもしれないよ」

「ん、楽しそうに何を話しているんだ？」

「「「うわっ」」

2人は話に夢中でレオが近づいてきているのに全く気づかなかつ
た。もしかしたら話を聞かれたかもしれない。レオの表情はマスク
でわからないが、わからないこそ2人は不安で仕方ない。

「何を慌ててるんだ？……ああ、このマスクについてか？」

「い、いえ……」

「マスクについて……だよな」

「は、はい」

謎のオーラがレオの背後に見えたような気がしたノエルは怯えな

がらも肯定した。レオは、ふうとため息をついて腕を組む。

「……秘密だ」

「……え？」

「Jのマスクについては秘密だ。それに余計な詮索はするな

「は、はい」

若干、Jのやりとりに納得いかないが、2人は頷く。

「山賊は殲滅完了。無事にエクステンドに着くようだ」

その報告に2人はホッとする。どんな手段で殲滅させたかわからぬが、何故だか知らない方が良い気がしたので気にしないようにした。そして、報告通りに飛行艇はエクステンドに到着する。

「ロッシーはこれからどうするの？」

「旅に出るよ……南には言つた」とないからね

「やつか……えつと、レオさんは？」

「しばりJの街の宿屋に滞在する。困った時には来たまえ」

「……はい」

絶対にレオに会いに来る」とはないと思いつつもノエルは頷き、実家へ向かった。

第40話（前書き）

* 注意事項 *

今年最後の投稿。相変わらずの駄文。

「…………?」

グレイが目を覚ますと、天井が目に入った。飛行艇から飛び降りたので外に居るはず……いや、死んでいてもおかしくはないとグレイは思った。

周りを見渡すと、ベッドに寝かされて居ることに気がついた。どうやら、どこかの宿屋に連れてこられたらしい。

ガチャ。

部屋の扉が開き、女性が入ってきた。

「…………よく見てみたら2人ともイケメンだよね。これはチャンスでは? きっと、今まで不幸だった私に神様があたえた…………」

「あ、あの…………」

グレイと女性の目が合って、しばらく互いに見つめ合っている。すると、だんだん女性の目がキラキラと輝き始めた。

「キヤー! 超私のタイプ! 気絶していたからわからなかつたけど、顔立ちは整つていて凛々しい…………」

「え、えっと…………」

グレイはどうすれば良いかわからず、混乱していた。この女の

性は誰だ？俺を助けてくれたのはこの女性か？

しばりべすると、また部屋に入つて来た者がいた。

「おい、何ださつるのは！ 周りに響いて居たぞ……お、田が覚めたか！」

「あ、ああ。……助けてくれたのは君達か？」

「ん、そうなるな」

「……ありがとう、礼を言ひ。……飛行艇はどうなつたか知つてるか？」

「飛行艇？ ああ、無事に飛行艇乗り場についたぞ。偶然乗り合わせていた奴が山賊達を蹴散らしたらしい」

「……良かつた。俺の名前はグレイ・グレファスだ」

「俺はレングス・ストリングだ。ちなみにセレスチャル学院高等部1年だ」

「私はメディア・ミスティーです。……つてアンタ学生なら授業は？」

「サボリだ」

「即答！」

「サボリ以外にねえだろ、研修中にみえるか？ 見えないこともないだろうな。なにせ俺は優等生だからな。奇しくも武術大会では2

位に終わったが……」「

グレイは2人の様子を見ていると、思わず笑みがこぼれた。それに気づいたレングスはむつとした。

「なんだよ……」

「いや、仲良いんだなって……つきあつてるのか?」「

「ンなわけねえだろ? テメエの目はふしあなかよー。」

「え? 違うのか……メディアはショックを受けていいよ! だが」「

メディアはうつむいてブツブツ呟いている。

「おじメス! お前、何を期待してるんだよ。お前と貴様はたんなる仲間だ!」

「仲間……。そうだよね、私達は仲間! そして、仲間はお互いに信頼して徐々に惹かれあって……」

「何勘違いしてんだ? 貴様は駒だろ?」

「ひ、ヒド……」

「やつだ、ヒトフル家ってどこにあるか知ってるか?」

「ヒトフルって言つたら魔法具一流メーカーヒールの……案内するよ」

「本当か？ ありがたい」

エトワール家

ノエルは家族で食事をしていた。エトワール家は社長とその妻にノエル含め3人の子供がいる。3人とも女性で長女がノエル、次女は高等部1年、三女は中等部1年だ。ちなみにメイドと執事を雇っている。

「まさかノエル姉さんが帰つてくるなんて……。まあ、いづれは姉さんが継ぐ予定だつたんだけどね」

「これなら俺はもう引退しても大丈夫だな」

「な、お父さんはまだまだ頑張つてもらわないと……私、いろいろ教わらないといけないし」

「確かにね……まだアナタには現役でいてもらわないと……そういえばノエル、アナタは家を継ぐんだからそろそろ結婚についても考えないと」

「ノエル姉には好きな人いるの？」

「あ、えつと……居るんだけど……」

そう言つてノエルは飛行艇での出来事を家族に話した。食卓には重い空気が流れる。

「……」めぐ、ノエル姉。嫌な事思ひ出せぢやつて

「つ、ん、大丈夫。きっと生きているから」

「……ええ、お嬢様。生きていらっしゃいますよ」

「……ハマル。ありがとうございます」

ハマル・シュラタン。代々エトワール家に仕えている優秀な執事の家系の長男で、歴代最優秀と言われている。年齢はノエルと同じ。ちなみにノエルは24だ。

シュラタン家に生まれた男子は執事、女子はメイドになるために小さな頃から教育を受けている。魔法学院にも通うが、早ければ高等部の時に1人前の執事・メイドとして、どこの家に仕えることになる。

シュラタン家はクロリア王国だけではなく様々な国の貴族などに仕えている。そして、その国で家族を作り、どんどんシュラタン家は拡大している。シュラタン家は執事・メイド界では最大の一家だ。

ちなみに、ハマルがエトワール家に来たのはノエルが高等部1年の頃だ。

ピンポーン。

「お嬢様のようですね」

ハマルは玄関へと向かう。

「そういういえば、ハマルって好きな人いるのかな？」

「ああ？ 聞いた話だとシュラタン家は恋愛対象がいなければ同業者と結婚することが多いらしいよ。……執事と令嬢の禁断の恋もあるそりだけど」

「もしかしてノエル姉を狙つていたりしたんじゃないの？」

「もう……からかうのはやめてよ」

「……でも姉さんがクローリアに行つたあとしばりく元氣なさそりだつたよ」

「……そつか」

「それに、姉さんが戻つてきて何だか嬉しそうだつたよ」

「でも……」

「安心して下さいお嬢様、私の結婚相手はすでに決まつておりますので……お嬢様の騎士がこひらにやつてまいりましたよ」

「……え？」

ノエルがハマルの声がした方を向くと、グレイがいた。

「ぐ、グレイ！ 本当にグレイなの？」

「ああ、正真正銘、グレイ・グレーファスだ」

「……良かつた。もう、会えないかと」

「俺も……会いたかつたよノエル」

グレイとノエルは見つめ合ひ……。

「ゴホンッ！」

「「あー。」」

「いやあ、みんなの見ている前で何をしようとしていたのかなあ？」

「若いって良いわね」

「……私もいつか良い人出来るかな？」

「流石です、ノエルお嬢様」

みんなに見られて「」と忘れていた2人は顔を真っ赤にしてうつむく。

「君が……」

「あ、はい。グレイ・グレファスといいます」

「そつか……」」で働かないか？」「

「え？ 良いのお父さん」

「ああ。ノエルのことを大切に思つていろよつだからね。将来、この家を支えて貰わないとね」

「わうね……それに早く孫もみたいわね」

「「えー。」

「ノエルお嬢様の部屋にグレイ様のベッドを用意しておきますゆえ、今夜はお楽しみください」

「ち、ちよつとハマル！」

「姉さんもグレイさんも顔真っ赤だよ」

「頑張つてねノエル姉、グレイさん」

「な、何を頑張るのよ……ほり、グレイからも何か言つてー。」

「え、えっと……頑張ります」

「ぐ、グレイー。」

「ほり、グレイさんもやつ言つてほりじだし……あ、お母さんって呼んでね」

「ノエルの歳で子供が居てもおかしくない……お父さんと呼ぶんだ」

「私も叔母になるのか……お兄さんと呼ばせていただきます」

「中等部に居るわに叔母か……グレイ兄つて呼ぶね」

「グレイ様、ノエルお嬢様を末永くお願いします」

グレイとノエルの顔は真っ赤で、かなり恥ずかしいようだが、笑みも浮かんでいる。ノエルは反対されることなく、むしろ急かされていることを嬉しく思った。グレイも、エトワール家から歓迎されたことを嬉しく感じていた。

「私達はこれからどうするの？」

エクステンドの宿屋にいるレングスとメティアは「これからのこと」を相談していた。

「再び海賊団を作り直す……そのための仲間（駒）を探す

「……付合わない？」

「死ね、メス」

「……エドワード」

お銀ちゃん（龍喜也）

お力おもておぬでござるやうな事なき。

大変申し訳ございませんが、この小説の更新を一旦停止しようかと思います。理由は、初めての小説といふこともあり手探り感覚、自分で書いていましたが、予想よりも多くの方に読んでもらって嬉しく感じたことと、より満足してもらいたいと感じたことからです。

しばらく、別の小説を書き、自分が納得いくレベルに達したと思いましたら最初から改訂しながら更新したいと考えています。

今まで、ありがとうございました。もし、よろしければこれからもよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2059w/>

魔法学院生徒物語

2012年1月1日21時29分発行